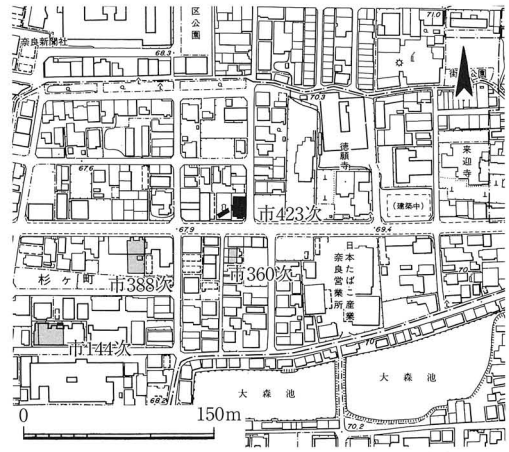
6. 杉ケ町遺跡・平城京左京四条五坊十四坪の調査　第423次

事 業 名　共同住宅建設
届出者名　松川公明
調査次数　平城京　第423次
調 査 地　杉ケ町51－6、－7、－9
調査期間　平成11年4月9日～5月7日
調査面積　140㎡
調査担当者　大窪淳司



発掘区位置図　1/6,000

調査の概要　調査地は、平城京の条坊復原では、左京四条五坊十四坪の南西部に相当する。近隣の調査で弥生～古墳時代の集落遺跡の存在と、奈良時代以降の遺構が稀薄になることが確認されており、十四坪内の遺構の有無の確認と、弥生～古墳時代の集落遺跡の様相確認を主目的として、調査を実施した。

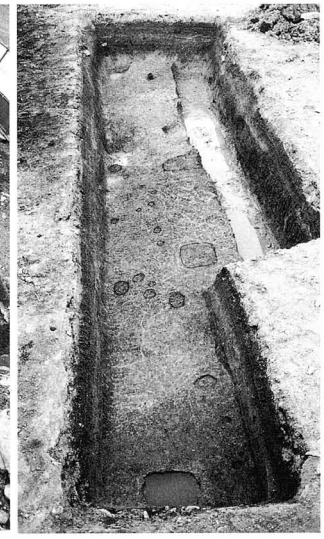
発掘区の層序は、造成土、耕土（暗灰色砂質シルト、暗橙灰色砂質シルト、灰色砂質シルト、淡灰色砂質シルト）が0.3～0.5m続き、地表下約0.5mで淡橙色砂質シルトの地山になる。地山上面の標高は約68.0mである。発掘区のほぼ全面に後述する溝SD01およびSD02の氾濫による褐色砂質シルトの堆積が広がっており、遺構面は地山および褐色砂質シルト上面である。

検出遺構　弥生～古墳時代の溝6条、小土坑106、杭跡367、室町～江戸時代の土坑2がある。奈良時代の遺構はなかった。

古墳時代以前の遺構　SD01は、東発掘区南西隅から西発掘区東半で検出した溝である。埋土は水成堆積である。地形が北に向かって下がっているため、南東から北西へ流れていた可能性が高い。幅は、検出面で約10m、底面で約7m、深さは0.6～0.8m。埋土は、概ね上下2層に分かれ、下層から弥生時代後期後半の土器、上層から弥生時代後期前半～古墳時代前期の土器が出土した。したがって、下層は弥生時代後期後半、上層は古墳時代前期までに埋まり、上層が東発掘区西半を覆うことから、古墳時代前期に氾濫したと考えられる。

SD02～05は、SD01東側で検出した溝である。いずれの埋土も水成堆積だが、溝底にほとんど傾斜がなく、水が流れた方向は不明である。SD02は、東発掘区南東隅から北西へ伸び、屈曲して北東へ向かう。埋土から弥生時代の石器および後期後半の土器が出土した。埋土が東発掘区の中央から北部を覆うことから、弥生時代後期後半に氾濫

東発掘区全景（南から）


西発掘区全景（南西から）

し、埋まったと考えられる。幅1.0～2.5m、深さ0.1～0.2mである。SD03は、東発掘区南東隅から北西へ向かう。出土土器は細片で、溝の時期は不明である。幅約0.7m、深さ約0.3mである。SD04は、東発掘区東南部から西へ向かう。弥生時代後期後半の土器が出土しており、その頃に埋まったと考えられる。幅約0.5m、深さ約0.2mである。SD05は、東発掘区東部から西南西へ向かう。幅約0.5m、深さ約0.3mである。出土土器は細片で、溝の時期は不明である。なお、重複関係からSD03・04は、SD02より古く、SD01に接続することから、弥生時代後期後半には埋まっており、SD05は、SD02より新しく、SD01上層より古いことから、古墳時代前期には埋まっている。

SD06は、東発掘区北西隅で検出した溝。重複関係からSD01の氾濫堆積より古く、古墳時代前期には埋まっていたとみられる。幅約0.4m、深さ約0.4m。弥生時代後期末の土器が出土した。

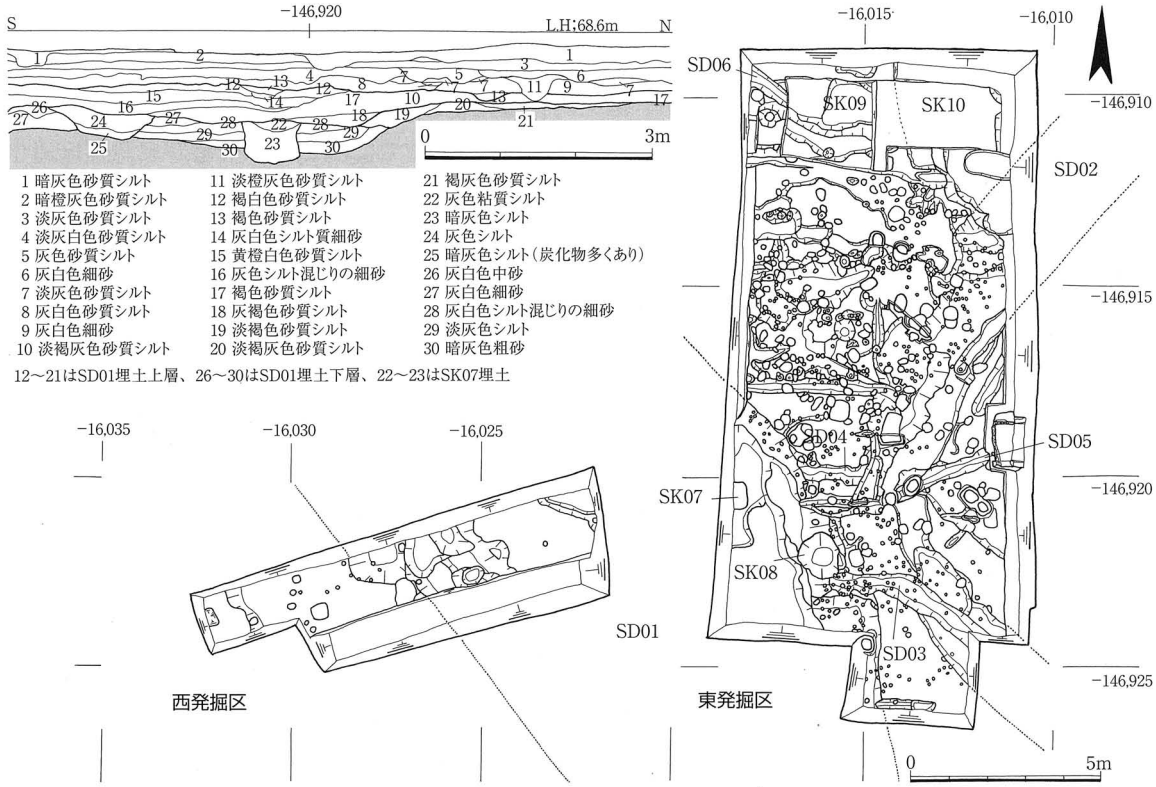
SK07は、SD01下層上面から掘り込まれた土坑である。弥生時代後期末～古墳時代前期の土器が出土した。土坑の規模は南北約0.7m、東西0.4m以上、深さ約0.6m。

SK08は、SD01東岸斜面に掘り込まれた土坑である。SD01下層の下で検出した。南北約1.2m、東西約1.1mで、深さは検出面から約0.5mである。弥生時代後期後半の土器が出土している。

また、SD01の東岸で、SD02～06が集まったところでは多数の杭跡を検出した。溝に伴う護岸施設、井堰等の施設があったと考えられる。

これらの遺構について古い方からまとめると、弥生時代後期後半までSD01と接続するSD03・04、SD06、SK08が存在していたが、SD03・04、SK08が埋まった後、SD02が掘られ、その後SD01下層・02・06が埋まり、SK07、SD05が掘られている。古墳時代前期にSD05、SK07が埋まった後、SD01が氾濫により埋まったと考えられる。これらは、近隣の調査結果と同様に弥生～古墳時代の集落に伴う遺構と考えられるが、性格は不明である。

室町～江戸時代の遺構　SK09は、東発掘区北部で検出した方形の土坑で、南北約2.3m、東西3.4m以上、深さ0.6～1.0mである。南から北へ階段状に深くなる。SK10は、東発掘区北東隅で検



遺構平面図　1/200・東発掘区西壁土層図　1/100

出した、発掘区外へ広がる土坑である。南北4.0m以上、東北3.3m以上、深さ約1.0m。重複関係からSK09より新しい。ともに室町～江戸時代の土器が出土し、中世～近世の粘土採掘坑と考えられる。なお、いずれの土坑も部分的に掘り下げた.

出土遺物　大半が弥生時代後期～古墳時代前期の土器で、遺物整理箱で18箱分ある。室町時代の瓦質土器が2点、江戸時代の国産陶磁器が3点あるが、いずれも細片である。また、安山岩製の石器が17点、平瓦の小片が数点ある。ここでは、弥生～古墳時代の土器、石器の一部を報告する。

土器　大半がSD01から出土した、弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器である。甕または壺が多い。器壁の剥落が著しく、調整の明らかなものは少ない。底部の破片が多く、底面がドーナツ形のものが大半を占める。

1～31は、SD01出土の壺、甕、高杯、器台、鉢、手焙形土器である。

高杯（1～8）の杯部は、皿形で口径22.8～28.4cmである。内外面にナデ、ミガキがある。脚部は、大形品（3～6）と小形品（7・8）とに分かれ、また中空（3・4）、中実（5～8）のものがある。外面にナデ、ミガキ、内面にハケ、ナデがあり、6の外面にはケズリがある。7の脚部外面に櫛描紋が施されている。

器台（9）は、やや内彎気味に広がる精製品である。脚部径は8.6cm。内外面にミガキがある。

脚（10）の径は9.5cmで、内面にハケが残っている。

鉢（15・16）は、焼成前、底部に単孔を穿っている。15は口径11.5cmの小形品で、内外面にナデがある。16は大形品で、外面にタタキ、ハケ状工具によるケズリ、内面にハケがある。

手焙形土器（11）は、頸部から体部下半までが残る。体部外面に刻み目のある突帯が貼り付けられ、頸部外面と体部下半外面にヘラ描沈線がある。

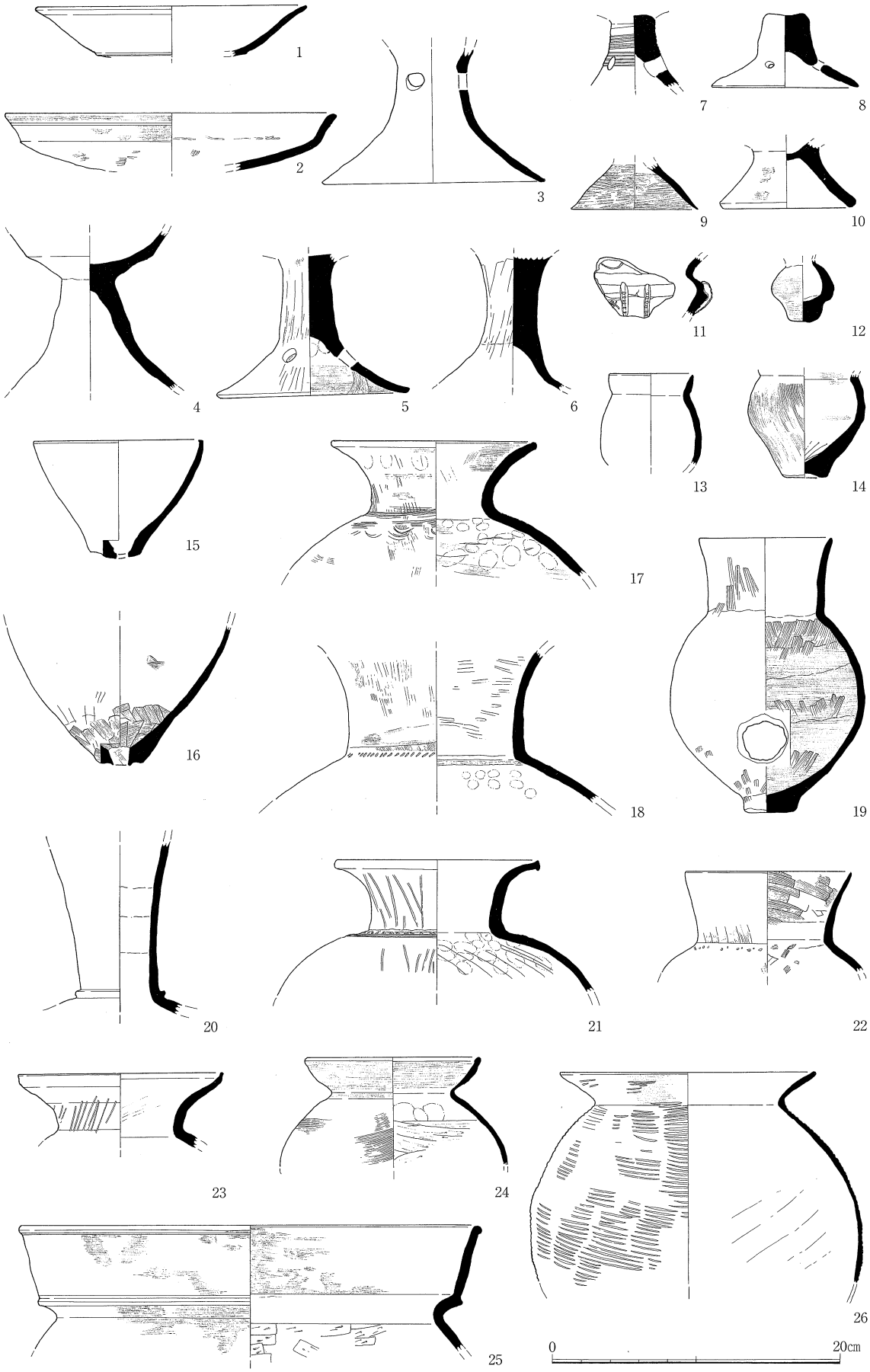
壺（12・14・17～23）は、広口壺、短頸壺、細頸壺がある。広口壺（17・18・21・23）の口径は14.1～14.4cmである。23の口縁は受口状で、近江地方の影響が考えられる。口縁部と体部との境に、17・21は櫛描紋、18・21は列点紋がある。外面にハケ、ナデ、ミガキ、内面にハケ、ナデがある。短頸壺（19・22）の口径は、19が9.3cm、22が11.4cmである。19は体部下半に焼成後に穿たれた円孔があり、祭祀に用いられた可能性がある。22は口縁部と体部との境に列点紋がある。19の頸部外面にナデ、ミガキ、体部外面にタタキ、ハケ、22の内外面にハケがある。細頸壺（20）は口縁部と体部との境に貼り付け突帯がある。小形品（12・14）のうち、12は粗製品で、内外面にナデ、体部外面下半には炭化物が付着する。14は精製品で、体部外面にハケ、内面にナデ、底部内面にハケが残っている。

甕（13・24～31）は、口径17.6～31.6cmの大形品（25・26）、12.0～15.8cmの中形品（24・27～30）、5.8cmの小形品（13）に分かれる。24・28は布留式甕、26は大和形庄内式甕、25・27はそれぞれ山陰系、近江系の二重口縁甕である。29・30の口縁端部は、外傾面をなす。31はドーナツ形の底面で、0.4～0.7cm大の粒状圧痕が10個ある。

32～37は、SD06出土の高杯、及び甕である。高杯（32～34）は、口径10.5～12.4cmである。口縁部と脚部は直線状に広がっている。東海系の影響を受けたものである。いずれも脚部に3箇所の透孔がある。甕（35～37）は、すべて庄内式甕で、37は大和形である。口縁部のタタキ出しが顕著であり、口縁端部をつまみ上げている。体部内面にケズリが見られるが、砂粒はあまり動いていない。

38・39は、SK07出土の高杯である。脚部内面にナデ、ケズリがある。

40・41は、SK08出土の壺である。40は短頸壺で、口径8.6cmである。頸部外面にナデ、体部外

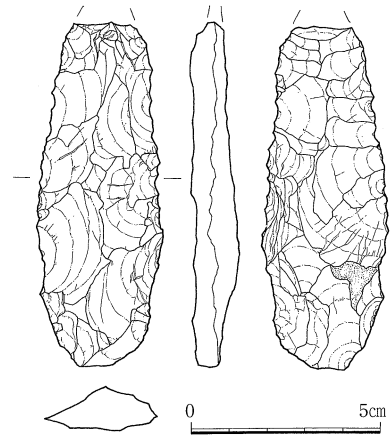


SD01出土土器　1/4

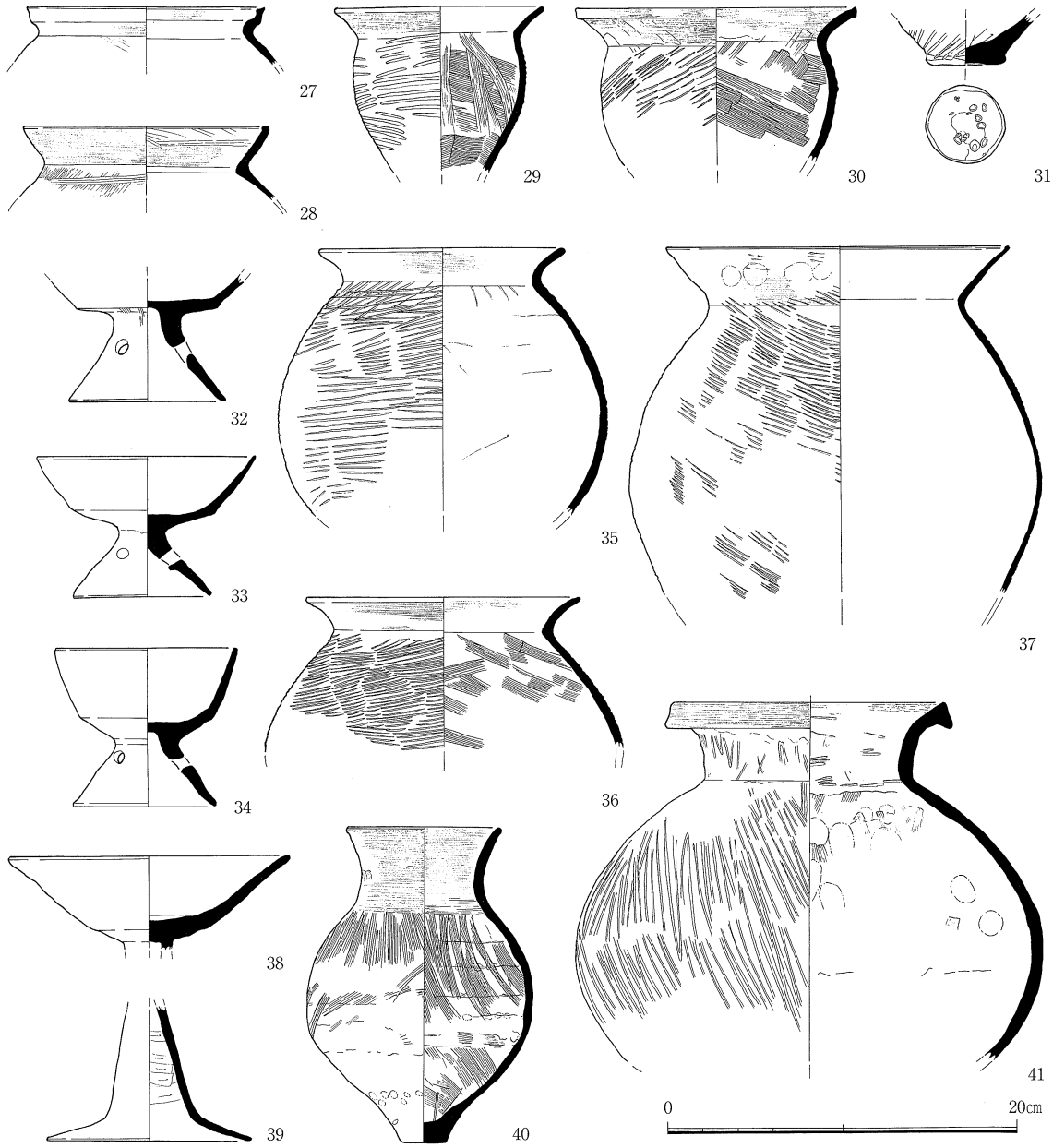
面にハケとナデ、頸部および体部内面上半にナデ、体部内面下半にハケがある。41は垂下口縁の広口壺である。頸部と体部外面にミガキ、口縁端部にナデ、頸部内面にナデとミガキ、体部内面にナデとハケがある。

石器　尖頭器2点、石鏃1点、加工痕のある剥片1点、剥片13点がある。すべて安山岩製で、弥生時代のものと考えられる。7点がSD02からの出土で、ほかにSD01・04等から出土した。SD02出土の尖頭器（右図）は、先端部を折損しているが、全長10～11㎝程度のものである。粗製で整形時の剥離面を多く残す。両側縁から随所に調整を加えており、調整作業が先端部から基部へ向かって進行したと考えられる。

（大窪淳司）



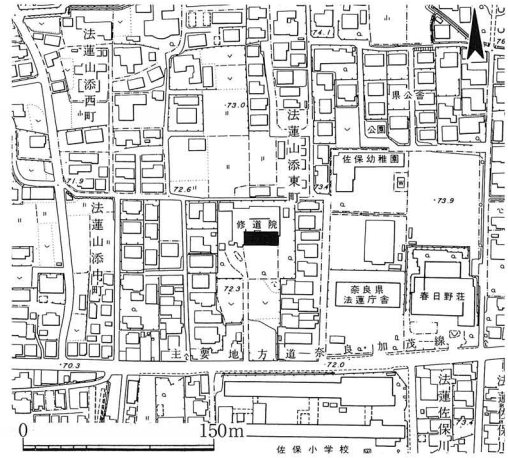
出土石器　1/2



出土土器　1/4

7. ヤイ古墳・平城京左京二条五坊北郊の調査　第437次

事 業 名　宗教施設建設
届出者名　(宗) カトリック善きサマリア人修道会
調査次数　平城京　第437次
調 査 地　法蓮町746
調査期間　平成12年2月7日～3月13日
調査面積　275㎡
調査担当者　原田憲二郎



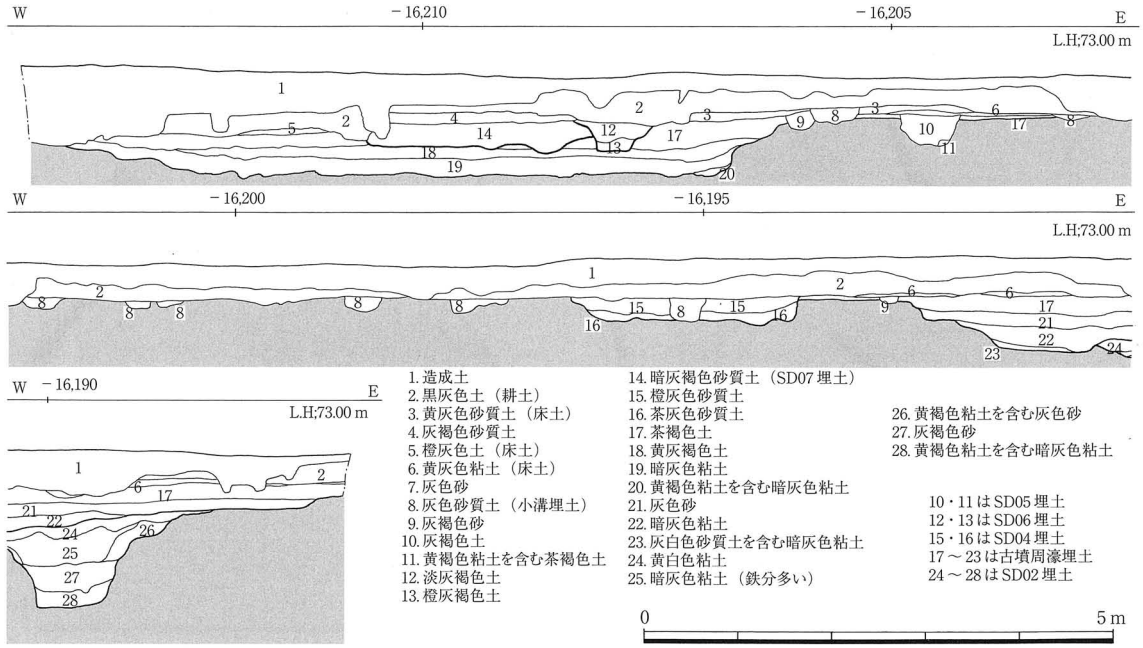
発掘区位置図　1/6,000

調査の概要　調査地は、平城京外京の北辺、一条南大路の北側にあたり、平城京外と考える説がある。しかし、昭和29年以来、一条南大路以北で6度にわたる調査が行なわれ、奈良時代の遺構が発見されたため、東四坊大路以東の一条南大路より北にも南北2坪分の条坊が存在したと考える説もある。本調査地は、一条南大路より北にも条坊が存在した場合、東五坊坊間路が想定される場所である。したがって、本調査は、条坊遺構の確認を主たる目的とした。

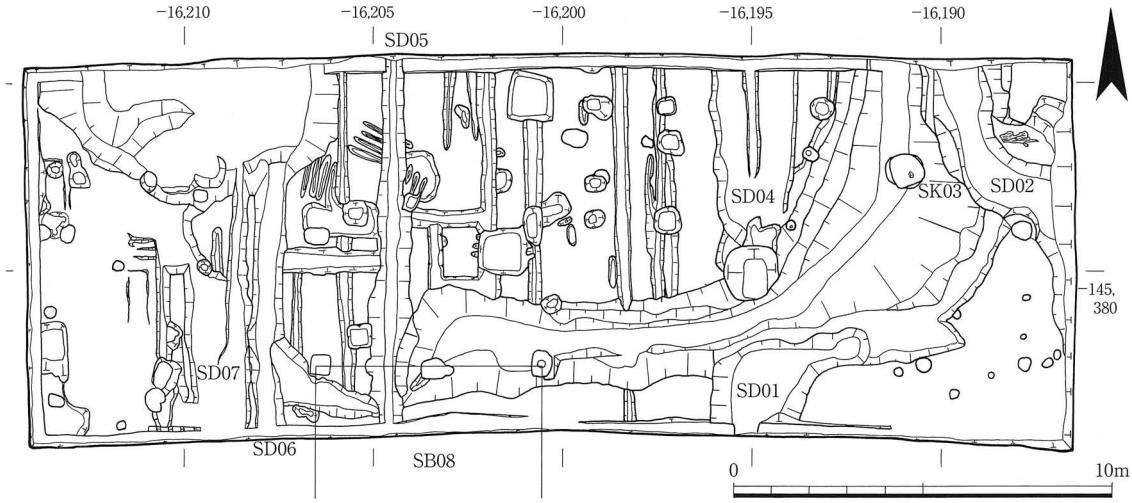
発掘区の層序は、上から造成土、耕土、床土と続き、地表下約0.4mで黄褐色粘土または灰色砂の地山となる。地山面の標高は約72.1mで、遺構はすべて地山上面で検出した。以下に主な検出遺構について述べる。

古墳時代以前の遺構　古墳1基、溝2条、土坑1がある。

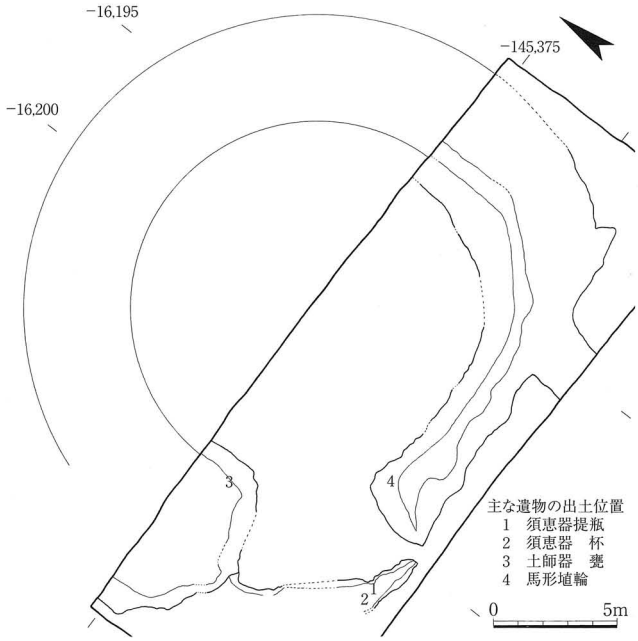
前方後円墳の後円部の一部と前方部を検出した。復原全長は約18.5mで、周濠がある。小字名からヤイ古墳と仮称する。墳丘は後世に削平をうけており、埋葬施設は不明である。前方部を南西に向ける。後円部は復原径約15m、くびれ部幅約6.2m、前方部は短く、長さ約3.5m、前端部はやや開いて復原幅約8.6mである。周濠を含めた全長は約24mである。周濠は、後円部で深さ



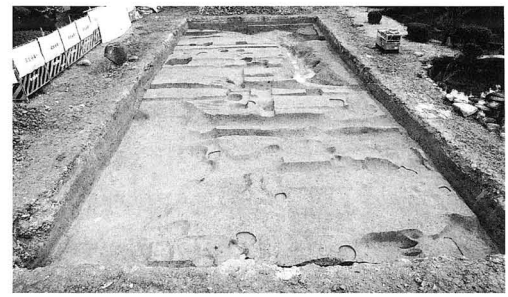
発掘区北壁土層図　1/80



遺構平面図　1/200



ヤイ古墳復原平面図　1/300



発掘区全景（西から）

発掘区全景（東から）

0.5〜0.9m、前方部ではやや浅く、約0.2m残っている。周濠幅は後円部東側で約5.5m、後円部南側で約2.2m、前方部南側は約1.2m、西側は約8.0mと一定ではない。ただし、西側に関しては、形がやや不整形で、別の古墳と周濠を共有している可能性がある。後円部の南側の周濠幅が狭いのは、このためかもしれない。周濠内から古墳時代後期の埴輪、須恵器、土師器が出土した。埴輪は、上層の茶褐色土から多く出土し、さらにくびれ部南東側から多く出土した。くびれ部付近に並べられていたものが、墳丘の削平の際、周濠内に捨てられたものと考えられ、かなり細かく破砕された状態で出土している。土器は須恵器杯と提瓶が前方部前端から出土した。前方部での祭祀を窺わせる。また、くびれ部北西側では最下層の暗灰色粘土から赤色顔料を入れた土師器甕が出土した。

SD01は、発掘区南東で検出したL字状に曲がる溝である。南へ続く。幅約2.5m、検出面からの深さ約0.6mである。埋土の状況から、ヤイ古墳の周濠と同時期に埋まったものと考えられる。これもまた古墳の周濠の一部の可能性がある。ただし、ヤイ古墳周濠からの排水用の溝の可能性もある。溝内から埴輪が出土した。SD02は、発掘区北東隅で検出した北から南に蛇行する溝で

ある。幅約2.5m、検出面からの深さは約0.9mである。土師器の小片が出土したのみで、時期は不明であるが、遺構の重複関係から、ヤイ古墳周濠より古いことがわかる。SK03は、径1.0mの土坑である。遺構検出面からの深さは約0.7mである。ヤイ古墳周濠と重複しており、それより古いことがわかる。遺物は出土しなかった。

奈良時代以降の遺構　溝4条、掘立柱建物1棟がある。

SD04は、南北方向の溝である。北側は発掘区外へと続くが、南側は発掘区のほぼ中央で途切れる。長さ5.8m分を検出した。幅約2.2m、検出面からの深さは約0.3mである。SD05は南北方向の溝である。南北ともに発掘区外へと続く。長さ約10m分を検出した。幅0.6～1.1m、検出面からの深さは約0.3mである。SD06は南北方向の溝である。南北ともに発掘区外へと続く。長さ約10m分を検出した。幅約0.7m、検出面からの深さは約0.3mである。SD07は南北方向の溝である。南北ともに発掘区外へと続く。長さ約10m分を検出した。幅1.5～2.5m、検出面からの深さは0.3mである。遺構の重複関係からSD06より古いことがわかる。出土土器からは、いずれの溝も9世紀に埋まったものと思われる。検出した位置から、SD04が東五坊坊間路東側溝、SD05が東五坊坊間路西側溝、SD07が雨落溝、SD06がSD07の改削時の溝であるとも考えられる。それぞれの溝心の国土座標は、SD04がX＝－145,377.000、Y＝－16,195.030、SD05がX＝－145,377.000、Y＝－16,204.420、SD06がX＝－145,383.000、Y＝－16,207.760、SD07がX＝－145,383.000、Y＝－16,208.940である。SD04とSD05間の心は、X＝－145,377.000、Y＝－16,199.725であり、溝心々間は9.39mである。これを東五坊坊間路と考えると、過去に確認された東五坊坊間路側溝心々間8.0m[1]と比較してやや幅が広く、また、想定される五坊坊間路心の約2m西に離れる。しかしながら、一条南大路より北の条坊が、それ以南とは異なる施行であった可能性もあり、SD04～SD07が条坊遺構であるかどうか速断することはできない。

SB08は、東西2間（6.0m）の掘立柱列である。柱間寸法は、3.0m（10尺）等間である。中央の柱掘形の深さは、左右の柱掘形に比べて浅く、これを妻柱とみて、南北棟建物の北側柱列と考える。（原田憲二郎）

出土遺物　古墳時代の須恵器・土師器・埴輪、奈良時代の須恵器・土師器・瓦、ほかに銅製品、石製品が遺物整理箱34箱分ある。大半が埴輪であり、ここでは、古墳時代のものについて述べる。

埴輪には、円筒埴輪と形象埴輪がある。いずれも破片で、全体が残っているものはない。円筒埴輪は、口縁部の破片が多く、底部は非常に少ない。つくりは粗雑で、歪みの大きいものが多くみられる。口径は総じて20㎝前後であろう。高さのわかるものはない。口縁部はわずかに外方に広がり、端部には面がみられる。タガは総じて低い。色調、焼成、調整などによって数種類に分れる。淡茶色、赤褐色の土師質のもの（1・2・7・8）と灰色の須恵質のもの（3・4・5）とがある。須恵質であるが、部分的に淡茶色を呈するもの（6）も少しある。外面はいずれもナナメあるいはタテハケで調整しているが、内面は土師質のものはタテハケ、須恵質のものはナデである。口縁部付近には、外面にヨコハケ、ナデもみられ、底部付近には内外面ともヨコナデあるいはヨコハケがみられる。また、底端部内面を削るもの（3）がある。ハケメは粗いものが多いが、わずかだけ土師質の埴輪に細かいハケメのものがみられる。また、外面に赤色顔料を塗ったもの(7)、口縁部付近にヘラ記号のあるもの（1・4・5）がある。形象埴輪の種類には、家、蓋、盾、馬、鳥、人物（女子・男子）がある。家形埴輪と蓋形埴輪は、それぞれ2個体分を確認した。

須恵器には、杯蓋と提瓶がある。ともに一部を欠き、また、外面の大部分に焼成時の降灰がみ

1）奈良市教育委員会『平城京左京（外京）五条五坊七・十坪発掘調査概要報告』1982

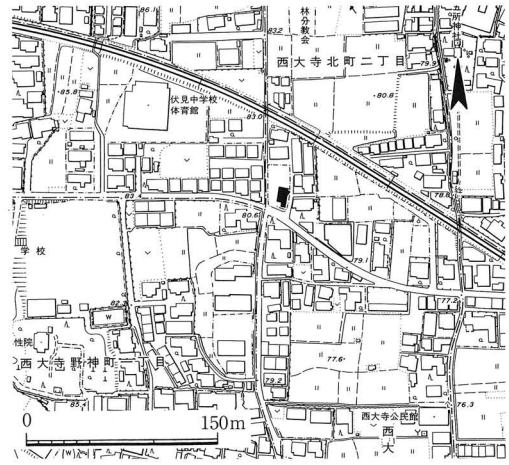
られる。杯蓋（9）は、口径13.2cm、高さ4.8cmである。口縁部はほぼ垂直で、端部には内傾する面がある。頂部外面にはケズリがみられるが、明瞭な平坦面はない。そのほかはヨコナデ調整である。提瓶（10）は、復原口径6.3cm、高さ17.5cmである。口縁部は外方に緩やかに広がり、端部には外傾する面がある。体部両外側面に鉤状の把手が付く。体部外側面に沿って不整ながらも円弧状に、櫛描波状紋が2条、その内側に櫛目の刺突紋が3条みられる。施紋後、不整方向のハケメ（カキメ）とナデによって、仕上げられている。土師器甕（11）は、口径18.9cm、高さ26.0cmである。体部はやや胴長で、最大径は26.8cmである。底部は丸い。口縁部は外方に緩やかに広がっている。体部外面は、全体に粗いタテハケがみられるが、口縁部付近ではヨコハケ、体部下半の一部にケズリがみられる。

（森下浩行）

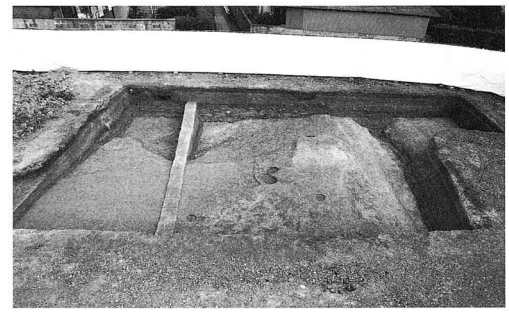
ヤイ古墳出土埴輪　1/6・土器　1/4

8.　平城京右京一条北大路・西三坊大路の調査　第430次

事 業 名　共同住宅建設
届出者名　米田義夫
調査次数　平城京　第430次
調 査 地　西大寺新田町475－1
調査期間　平成11年8月19日～9月8日
調査面積　93m²
調査担当者　大窪淳司



発掘区位置図　1/6,000


発掘区全景（西から）

調査の概要　調査地は、西ノ京丘陵の縁辺部に位置し、平城京の条坊復原では、一条北大路と西三坊大路との交差点に相当する。したがって、条坊遺構の検出を主目的として調査を行った。

発掘区の層序は、造成土以下、耕土が約0.2m続き、灰白色砂質シルトの下で、橙色砂礫あるいは黄色粘土の地山となる。遺構面は地山上面で、その標高は約80.1mである。

検出遺構には、奈良時代～平安時代の土坑、室町時代の溝、時期不明の土坑がある。

SX01は、発掘区の東半で検出した土坑状の落ち込みである。東西4.5m以上、南北9.0m以上で、SD02に接続する。深さは0.5～0.7mで、SD02との接続部でやや浅くなる。埋土は、概ね砂質シルトが堆積した上層と、シルトが堆積した下層に分かれる。いずれも大量の瓦を包含し、下層から奈良時代の土器、上層から古墳時代初頭～平安時代末の土器が出土した。なお、上層は重複関係から後述するSD02の上層より古い。下層が水成堆積したシルトであることから、SX01は池の可能性があり、平安時代末に埋め立てられたと考えられる。

SD02は、発掘区南部で検出した東西方向の溝。掘形は3段で、溝幅が上段で6.4m以上、中段で約2.4m、下段で約0.7mあり、検出面からの深さはそれぞれ約0.6m、約1.1m、約1.5mである。埋土もまた、上層（砂質シルト）、中層（シルト）、下層（中粒砂）の3層に概ね分かれるため、2度の改修を想定できる。上層から奈良～室町時代の土器と鉄滓、中層から古墳～室町時代の土器が出土した。下層の出土土器は小片であるが、平安時代以前のものと考えられる。したがって、掘られた時期は不明であるが、少なくとも室町時代まで溝が利用され、その間に改修を行なったものと思われる。改修前の溝心の国土座標は、X＝－144,944.4、Y＝－20,173.0である。

SK03～10は、発掘区の西半で検出した土坑である。平面形及び規模については別表に記した。いずれも出土遺物がなく、 時期は不明であるが、重複関係から、SK07～09はSX01の上層より古く、平安時代末以前の土坑と、SK10はSD02の上層より古く、室町時代以前の土坑と考えられる。

出土遺物は、遺物整理箱で土器が1箱分、瓦塼が50箱分、鉄滓が1点ある。

土器の大半は摩滅が著しい細片で、時期不明のものが多い。古墳時代から室町時代までの土器がある。古墳時代の土器は、布留式土器と6世紀の須恵器杯身と提瓶が各1点ずつ、SX01から出

土した。また、平安時代前期の山城産緑釉陶器椀1点がSX01から、室町時代の龍泉窯系青磁椀1点がSD02から出土した。　（大窪淳司）

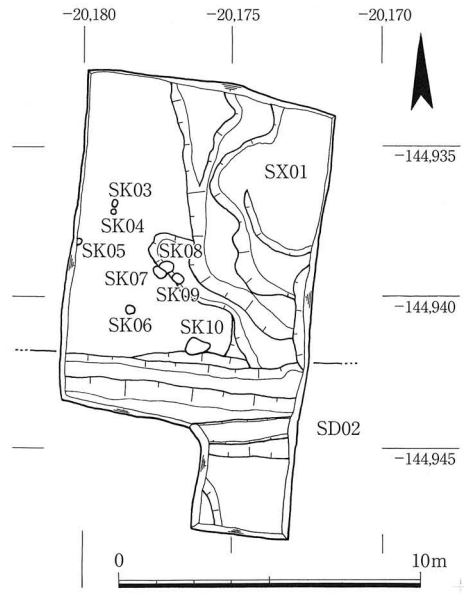
瓦塼の大半は丸瓦と平瓦で、軒丸瓦7点、軒平瓦7点、熨斗瓦4点、面戸瓦17点、鬼瓦1点、塼2点がある。遺構からの出土はSX01とSD02に限られ、総量の約73%がSX01、約19%がSD02から出土した。主要なものを別表に記した。熨斗瓦はいずれも破片で、大きさは不明である。平瓦凹面に深さ、幅共に1～2㎝の分割截線を焼成前に入れ、焼成後に分割する割り熨斗である。面戸瓦はすべて蟹面戸である。鬼瓦は牙部分である。塼は2点とも厚さ約5㎝の破片で、他の法量は不明である。平瓦には、側面に部分的に布目痕が残る1枚造りと考えられるものが29点ある。布目痕は側面のケズリ調整が及ばず残ったと思われる。

なお、SX01とSD02について出土数から丸瓦と平瓦の比率をみると、前者が1：2、後者が1：5で様相が異なる。今回確認している熨斗瓦は、割り熨斗瓦であることから、平瓦としたものの中に、熨斗瓦の小片が相当数含まれているものと考える。SD02からの丸瓦と平瓦の出土率から推察すると、SD02出土の瓦は築地塀のものである可能性は高いといえる。　（山前智敬）

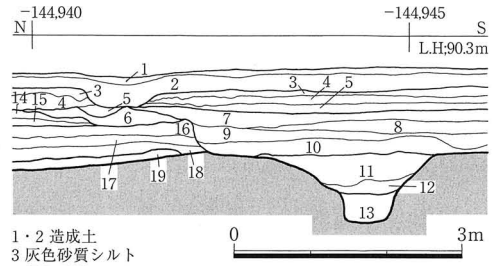
今回の調査は、一条北大路と西三坊大路の条坊関連遺構の検出を目的とした。これに相当する可能性があるものにSD02がある。SD02の改修前の溝心は、平城京右京一条北辺四坊一坪（西三坊大路）の調査（県1985年度）で想定された一条北大路心より約15.8m北にあり、一条北大路の北側築地塀に伴う雨落溝の位置に相当する。SD02が奈良時代に機能していたかどうか不明のため、確証に欠けるが、雨落溝である可能性は出土した瓦からも窺える。雨落溝が改修を重ね、室町時代まで存続した可能性がある。

また、右京一条北辺四坊一坪の調査では、西三坊大路心が推定されている。一方、右京五条四坊三坪（国100次調査）[1] 地点で、西三坊大路の幅員は、21.83～23.24mであることから、先の地点から10.92～11.62m東の位置に東側溝を想定できるが、当発掘区内ではこれに相当する遺構がなかったため、発掘区より西にある可能性が高い。　（大窪淳司）

1）奈良国立文化財研究所『平城京右京五条四坊三坪発掘調査概報』1977



遺構平面図　1/250



1・2 造成土
3 灰色砂質シルト
4 橙色砂質シルト
5 灰褐色砂質シルト　10 灰白色砂質シルト　15 暗灰色砂質シルト
6 暗黄色砂質シルト　11 灰白色シルト　16 淡褐灰色砂質シルト
7 黄灰色砂質シルト　12 灰色シルト　17 淡黄灰色砂質シルト
8 褐灰色砂質シルト　13 灰白色中粒砂　18 淡橙灰色砂質シルト
9 橙灰色砂質シルト　14 灰白色砂質シルト　19 灰白色シルト
（3～5は耕土、7～13はSD02埋土、
6はSD02氾濫堆積、16～19はSX01埋土）

発掘区東壁土層図　1/100

土坑一覧

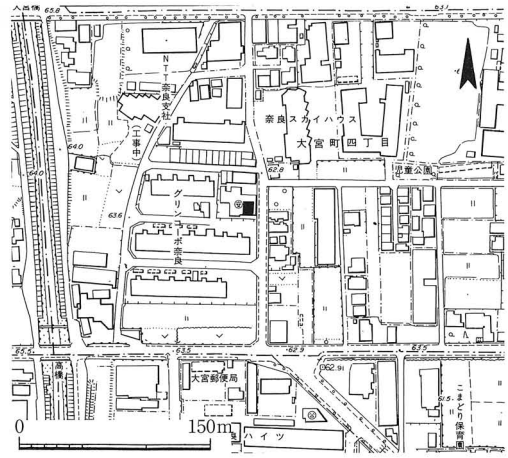
遺構番号	平面形	平面規模（m）	深さ（m）
SK03	円形	直径0.2	0.1
SK04	円形	直径0.2	0.1
SK05	円形	直径0.2	0.1
SK06	円形	直径0.3	0.2
SK07	方形	0.4×0.3	0.2
SK08	方形	0.4×0.3	0.2
SK09	方形	0.4×0.3	0.2
SK10	不定形	0.8×0.6	0.3

軒瓦等の出土点数（遺構別）

型式・種類		総数	SX01	SD02
軒丸瓦	6236種別不明	4	3	1
	型式不明	3	1	1
軒平瓦	6732Q	1	0	1
	6732種別不明	1	0	1
	型式不明	5	3	0
熨斗瓦		4	4	0
面戸瓦		17	16	0
塼		2	1	1
鬼瓦		1	0	1

9.　平城京左京三条三坊五坪の調査　第433次

事 業 名　三笠公民館建設事業
届出者名　奈良市長
調査次数　平城京　第433次
調 査 地　大宮町4丁目313－3
調査期間　平成11年9月10日～10月6日
調査面積　35m²
調査担当者　細川富貴子

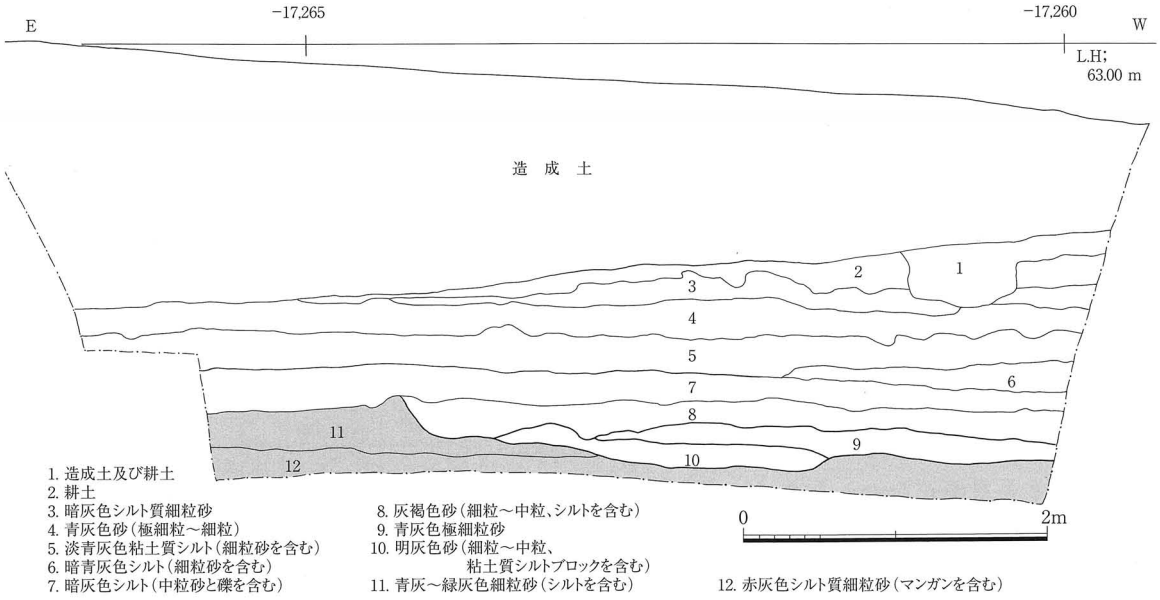


発掘区位置図　1/6,000

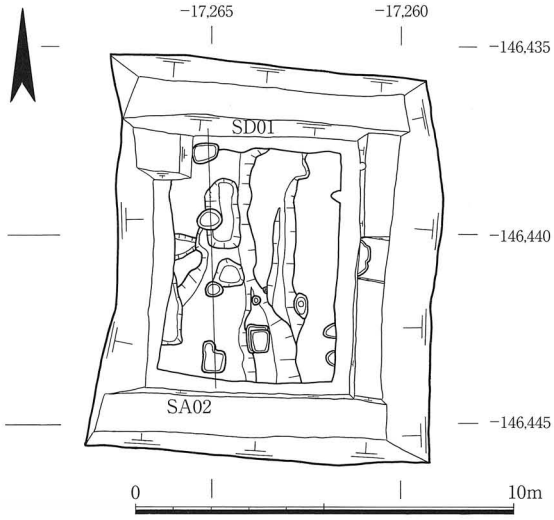
調査の概要　調査地は、左京三条三坊五坪の北東部に相当する。調査地の東に隣接する現在の道路が東三坊坊間路に相当するので、その西側溝の検出を目的に調査を実施した。発掘区の層序は、造成土、耕土以下、暗灰色シルト質細粒砂、青灰色砂、淡青灰色粘土質シルト、暗青色シルト質細粒砂、暗灰色シルトと続き、青灰～緑灰色細粒砂の地山になる。遺構面は地山上面である。調査地及びその周辺は流路であった時期があると考えられ、耕土の下、地山までの間に砂およびシルトが厚く堆積している。そのため、地表面から遺構面までの深さは1.8～2.0mで、非常に深い。遺構面の標高は約60.5mである。

検出した遺構は、南北溝1条、掘立柱塀1条、柱穴である。以下、それぞれについて述べる。

SD01は、発掘区西半部で検出した南北方向の溝である。東岸は発掘区のほぼ中央で確認したが、西岸は発掘区外にあると思われる。幅は3.0m以上、遺構面からの深さは約0.1～0.5mである。出土遺物には、瓦と奈良時代の土器がある。SD01が東三坊坊間路西側溝にあたるかどうか、それを確認できた3箇所の調査例（市TI第11次・平成3年度、国第215－1次・1990年度、県・1998年度）から本調査地での西側溝の位置を導き出すと、その溝心は発掘区西端から東へ0.5mの位置となり、SD01の東岸から離れている。したがって、SD01は東三坊坊間路西側溝とは考えがたいが、溝心

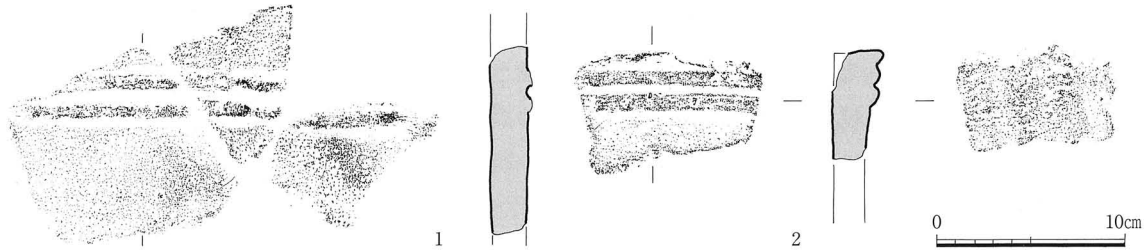


発掘区南壁土層図　1/50



遺構平面図　1/200

発掘区全景（南から）



出土瓦　1/4

からSD01の東岸までの距離が約4.0mであることを考慮すると、東三坊坊間路西辺に沿った築地の雨落溝と考えることもできる。ただし、添柱などの築地塀に関わる遺構は検出できなかった。

SA02は、発掘区の西側で検出した南北方向の掘立柱塀である。重複関係からSD01埋没後に建てられたと考えられる。3間分（5.4m）検出したが、南北ともに発掘区外へ続き、建物になる可能性もある。柱間は1.8m等間である。奈良時代後半の土器が出土した。

なお、ほかにいくつか柱穴があるが、建物としてまとまらなかった。　（細川富貴子）

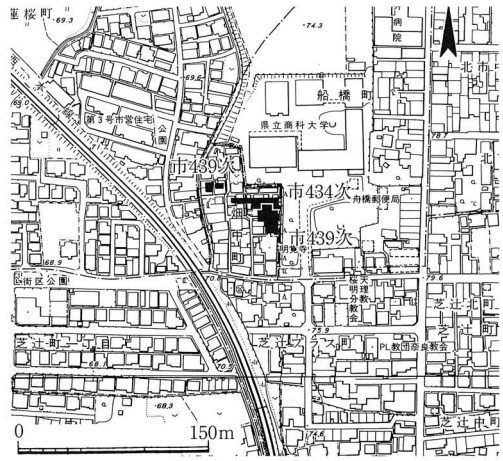
出土遺物は、古墳時代の埴輪、奈良時代の瓦塼、土師器、須恵器が遺物整理箱14箱分ある。このうち12箱分が瓦塼であり、これについて報告する。軒丸瓦1点、軒平瓦3点、塼2点と、ほかは丸瓦、平瓦である。軒丸瓦1点は型式不明で、軒平瓦は6668Aが2点、型式不明が1点である。6668Aは2点ともSD01から出土し、京都府木津町瀬後谷瓦窯で出土した笵割れ2段階[1]と同笵である。丸瓦と平瓦の出土量の合計は1,297点（95.23kg）で、その内訳は丸瓦が174点（12.36kg）、平瓦が949点（80.92kg）、いずれか不明なものが174点（1.95kg）である（破片を含み、残存度は問わない）。このうちSD01から丸瓦が74点、平瓦が405点出土している。丸瓦に比べて平瓦の出土量の割合が高いことと、築地塀が想定される位置で出土したことから、SD01出土の平瓦には半截して熨斗瓦として使用されたものが多数含まれていると考える。また、凸面に2条の凸線を施す平瓦が3点ある。いずれも破片であるので、軒平瓦の平瓦部である可能性もある。凸線は型の押し引きによる。1は凸線の間隔が広く、2は狭い。2の凸線は、広端あるいは狭端部縁のいずれかに沿っている。なお、2の凹面には桶巻き作りの模骨痕がみられる。

（山前智敬）

1）財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告　第27冊－奈良山瓦窯群－』1999

10.　平城京左京二条五坊五坪・十二坪の調査　第434次・第439次

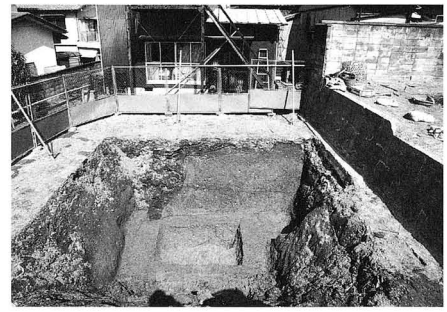
事 業 名　畑中小規模住宅地区改良事業
届出者名　奈良市長
調査次数　平城京　第434次・第439次
調 査 地　畑中町5－3、6、7－1、ほか
調査期間　平成11年9月27日～10月22日
　　平成12年2月1日～3月10日
調査面積　591㎡
調査担当者　安井宣也



発掘区位置図　1/6,000

調査の概要　事業地は、平城京の条坊復原では左京（外京）二条五坊五坪東半部・十二坪南西部および東五坊坊間路にあたり、江戸時代には「畠中村」という添上郡の一村落ではあるが奈良町の一部として認識されていた地域で、旧市街地がある段丘の平坦面西縁及び西斜面に位置する。事業地内は過去の調査例がなく、遺跡の様相はこれまでよくわからなかったが、事業に先立ち改変の規模が大きい段丘平坦面上の改良住宅予定地で奈良時代の遺構の有無の確認するために第434次調査を実施したところ、遺構が残存していることが判明した。そのため、平成12年度にかけて改良住宅予定地を主に発掘調査を実施することとなった。第439次調査は、段丘平坦面上の十二坪南西部の様相解明と、五坪東半部で前回調査が及ばなかった段丘西斜面の奈良時代の遺構面の確認を目的として実施した。平成11年度の調査成果は以下のとおりである。

段丘平坦面における発掘区内の層序は、宅地の整地土（厚さ0.1～0.3m）の下に西寄りでは畑地に伴う褐色砂質シルト（厚さ0.2～0.5m）を挟んで黄橙色のシルトあるいは砂礫の段丘堆積層となる。奈良時代の遺構面は、段丘堆積層上面（標高75.0～77.0m）で、近現代の攪乱が目立つ。段丘西斜面における発掘区内の層序は、宅地の整地土（厚さ0.4m）・褐色砂質シルトの整地土（厚さ0.5～1.8m）の下、東半部では大阪層群とみられる青灰白色粘土や褐色砂となり、西半部では佐保川の河成堆積層とみられる灰黄色砂礫質粘土となる。奈良時代の遺構面は、大阪層群及び河成堆積層の上面である。標高は、前者が71.0～72.0mで、東から西に急に下り、後者は70.2mで西隣接地の法蓮桜町の旧水田上面の標高と近い。


段丘西斜面東半（南から）

段丘西斜面西半（南から）

段丘平坦面の発掘区における主な検出遺構は、奈良時代のものとみられる柱穴、井戸、土坑である。柱穴のうち五坪内にあたる部分で確認したものは比較的大型の建物の可能性がある。また十二坪内にあたる部分で確認したものは、攪乱の影響で建物としてはまとまらないが、比較的小型の建物の可能性がある。五坪内にあたる部分

で検出した井戸SE01は方形の井戸枠の痕跡がみられる。埋土から土器及び瓦の破片が出土した。東五坊坊間路については、道路側溝等の遺構は確認されず、路面の想定部分に柱穴がみられる。

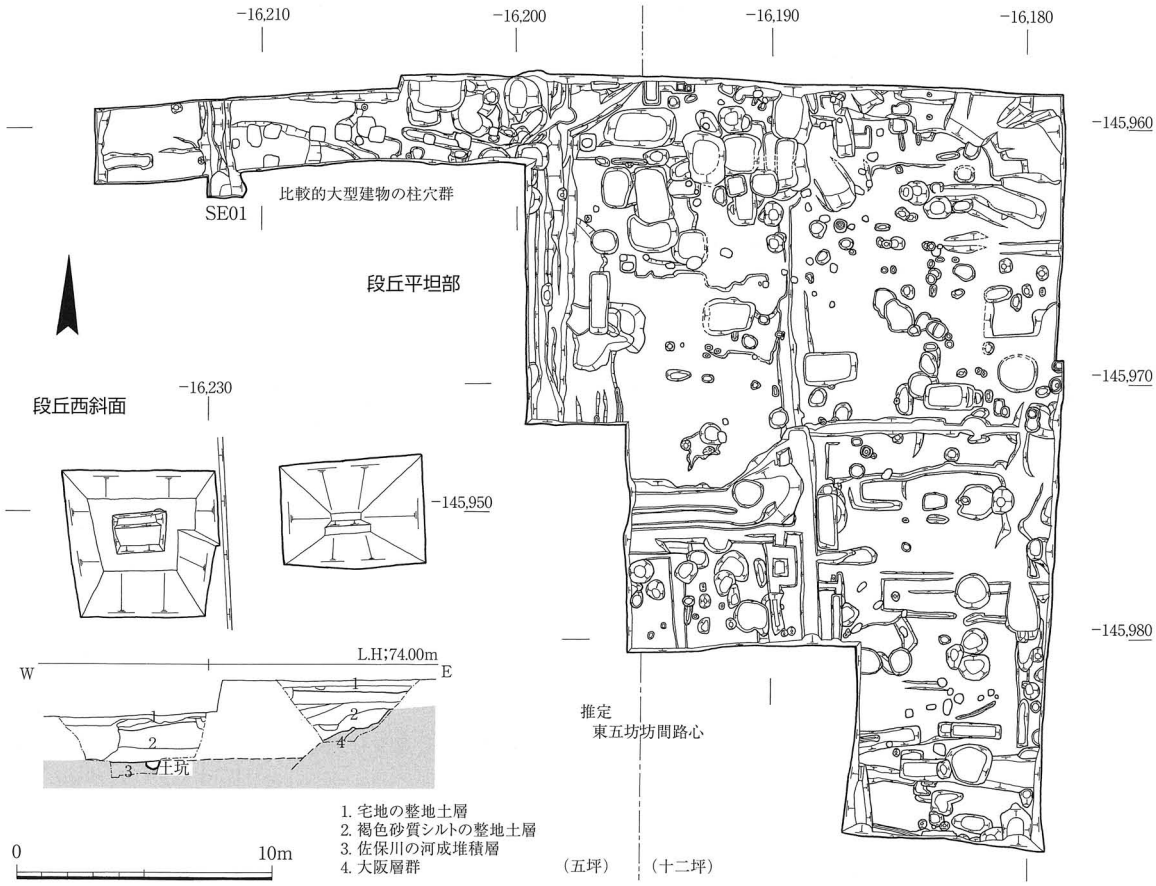
段丘西斜面の発掘区における主な検出遺構は、西半部の北壁で確認した奈良時代の土坑で、埋土から須恵器片が出土した。

調査の結果、奈良時代の平城京に関しては、五・十二坪内とも宅地として利用されていたことがわかった。東五坊坊間路に関しては確認できず、路面の想定部分に柱穴がみられることを考慮すれば、五・十二坪は2坪利用の宅地である可能性もある。平城京廃絶後に関しては、奈良時代の遺構面上に耕地に伴う堆積層がみられる点や中世・近世の居住地関連の遺構がみられない点が奈良町の周辺地域の特徴を示すことから、土地利用の経緯が奈良町よりもむしろ周辺の農村に近いものであったと推察される。

（安井宣也）

五坪部分（北東から）

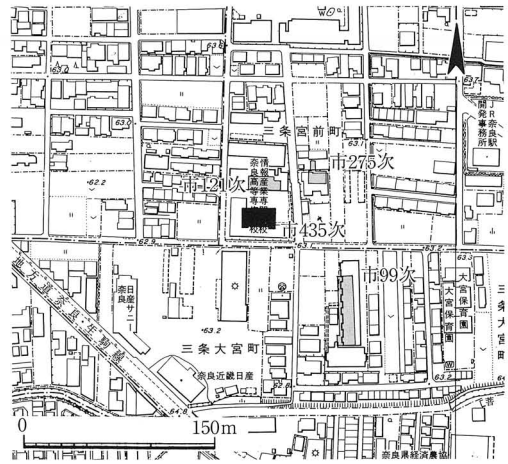
十二坪部分（北から）



遺構平面図・土層図　1/300

11.　平城京左京四条四坊七坪の調査　第435次

事 業 名　共同住宅建設
届出者名　㈱吉本工務店
調査次数　平城京　第435次
調 査 地　三条宮前町236－3
調査期間　平成11年10月14日～11月15日
調査面積　260㎡
調査担当者　大窪淳司



発掘区位置図　1/6,000

調査の概要　調査地は、菩提川によって形成された扇状地の先端部に位置し、平城京の条坊復原では左京四条四坊七坪の南辺及び四条条間路に相当する。事前に試掘調査を行い、奈良～平安時代の柱穴・土坑と東西方向の中世の流路を検出した。今回の調査は、七坪内の様相確認を主目的とし、発掘区を設定した 。

発掘区内の層序は、基本的に造成土以下、耕土（黒色砂質シルト、灰白色砂質シルト、灰色砂質シルト、青灰色砂質シルト）、淡黄褐色砂質シルトと続き、地表下約1.2mで奈良時代の整地土（黄褐色砂質シルト）、地表下約1.3mで地山（褐色砂質シルト）となる。それぞれの上面の標高は、整地土が62.1～62.3m、地山が61.8～62.2mで、東から西へ緩やかに下がる。整地土は、8世紀の土器を包含し、上面から9世紀初頭までの遺構が掘り込まれている。なお、中世の流路は、淡黄褐色砂質シルトの上面から掘り込んでおり、この面が中世の遺構面と考えられる。

検出遺構には、奈良時代以前の流路1条、奈良～平安時代の掘立柱建物1棟、掘立柱塀1条、土坑13、溝1条、中世の流路1条がある。以下、主な遺構について報告する。

奈良時代より前の遺構　流路01は、発掘区の中央から東半で検出し、北端で部分的に掘り下げた。幅6.0～7.3m、深さ約1.4mである。埋土は、概ね3層に分かれ、上・中層が砂礫で、下層が砂礫と有機物を含む粘土の互層である。中層から出土した土器は小片で、時期は不明だが、流路は奈良時代整地土下の地山上面から掘り込んでおり、奈良時代より前に形成されたと思われる。左京四条四坊七坪の調査（第121次調査・昭和61年度）で検出した自然流路に繋がると考えられる。

奈良時代以降の遺構　遺構面は、奈良時代整地土上面である。

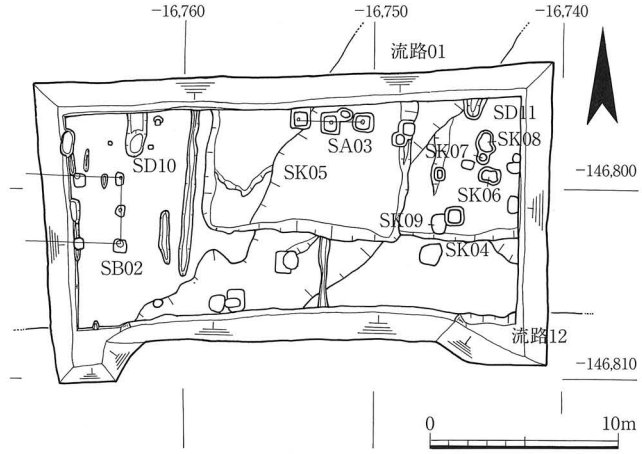
SB02は、桁行1間（2.1m）以上、梁間2間（3.6m）の東西棟建物である。発掘区外へ続く。柱穴から8世紀の土器が出土し、8世紀の建物と考えられる。

SA03は、東西2間（3.6m）の掘立柱塀で、発掘区外へ続く南北棟建物の可能性もある。柱穴から8世紀の土器が出土した。重複関係からSK05より新しく、8世紀後半以降と考えられる。

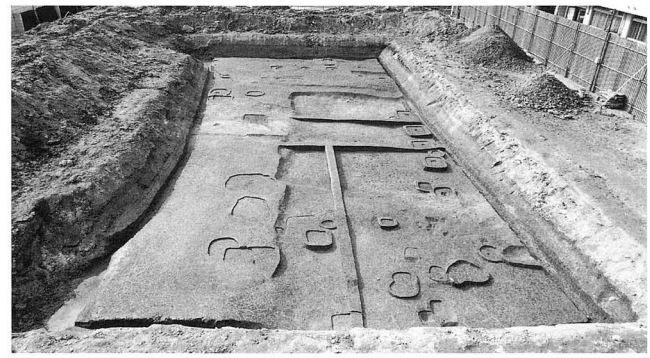
SK04は、発掘区東北部で検出した土坑で、東西6m以上、南北7m以上、深さ0.3～0.4mである。発掘区外へ続く。埋土は上下2層あるが、いずれも水成堆積でない。両層から8世紀後半の土器が出土しており、この頃に埋まったと考えられる。

SK05は、発掘区中央で検出した方形土坑で、東西約11m、南北7m以上、深さ0.3～0.5mである。発掘区外へ続く。埋土は、概ね3層に分かれ、上・中層から8～9世紀初頭の土器が出土した。

重複関係からSK04より新しく、8世紀後半～9世紀初頭に埋まったと考えられるが、南辺をSK04と揃え、深さもほぼ同じであることから、何らかの関連遺構、あるいは造り替えの可能性がある。ただ、SK04と異なって、下層は水成堆積であり、水が溜まっていたことが窺える。したがって、SK05は池の可能性がある。



遺構平面図　1/400



発掘区全景（東から）

SK06～09は、いずれもSK04上面から掘り込まれた8世紀後半以降の土坑である。SK06は、東西約0.8m、南北約0.5m、深さ約0.2m。8世紀中頃～後半の土器が出土しており、8世紀後半に埋まったと考えられる。SK07は、東西約0.4m、南北0.4m、深さ約0.3m。出土土器は、細片のため時期不明である。SK08は、東西約0.6m、南北約1.1m、深さ約0.2m。8世紀末～9世紀初頭の土器が出土しており、9世紀初頭に埋まったと考えられる。SK09は、東西約0.8m、南北約1.0m、深さ約0.1m。8世紀の土器が出土した。

SD10は、発掘区北西部で検出した南北溝である。全長約2.7m以上で、発掘区外へ続く。幅約1.4m、深さ約0.35m。埋土は上下2層あり、下層から8世紀後半の土器が出土した。

SD11は、発掘区北東部で検出した南北溝である。全長約1.3m以上で、発掘区外へ続く。幅約1.7m、深さ約0.2m。出土土器は小片で、時期不明である。重複関係からSK04より新しく、8世紀後半以降 の溝と考えられる。

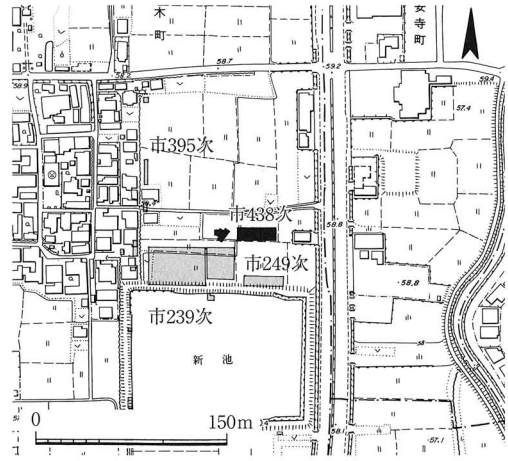
流路12は、発掘区南部で北岸を検出した。平城京の四条条間路の想定位置にあたる東西方向の流路である。試掘調査で、流路幅が10m以上であることを確認した。南岸は発掘区外にあると考えられる。埋土には、暗黄白色細砂、紫灰色シルト、青灰色シルト等があり、概ね上下2層に分かれる。下層から8世紀の土器が出土したが、重複関係からは奈良時代整地土上面で検出した遺構群より新しく、上・下層とも9世紀以降に埋まったと推定できる。同じく四条条間路の想定位置にあたる第325次調査（平成8年度）で確認した中世流路SD91は、12世紀までに埋まっており、これに繋がると考えられる流路12は、この頃までに埋まっている可能性が高い。

以上のように、8世紀後半以降の遺構が大部分をしめ、当地が8世紀後半～9世紀初頭に利用されていたことが窺える。なお、発掘区中央の西寄りに七坪の東西を1/4に分割するラインを想定できるが、区画施設等はなかった。

出土遺物には、奈良～平安時代の土師器・須恵器が遺物整理箱で1箱分あり、他には奈良時代以前と考えられる土器の小片が2点、奈良時代の平瓦の小片が9点、安山岩製の加工痕のある剥片が1点出土した。なお、ミガキ調整された須恵器の杯・皿がSK04～06から、体部外面にミガキが施された須恵器の長頸壺がSK09から出土した。（大窪淳司）

12. 平城京左京五条一坊十三坪の調査　第438次

事 業 名　宅地造成・店舗建設
届出者名　小嶋敏明
調査次数　平城京　第438次
調 査 地　柏木町525－1、－3、526－1、527－1、－5
調査期間　平成12年1月20日～2月25日
調査面積　420㎡
調査担当者　武田和哉



発掘区位置図　1/6,000

調査の概要　調査地は、平城京の条坊復原では左京五条一坊十四坪の南辺中央～東付近に該当している。過去の当坪内での調査事例は2例あり（第249次・平成4年度、第395次・平成9年度）、このうち当調査地の南隣で実施した第249次調査では、五条条間南小路や奈良時代の建物・塀、古墳時代の建物や溝・流路などを検出している。今回の調査では、第249次調査で検出した流路の続きを確認することなどを目的として、2箇所の発掘区を設定した。

発掘区内の層序は、上から黒灰色粘土、暗灰色土（ともに耕土）、黄灰色粘質土（遺物包含層）と続き、その下が古墳～奈良時代の遺構面（標高約57.6m）である。遺構面の下層は、概ね灰色砂、黄灰色粘質土の順に堆積しているが、流路の氾濫の影響などから幾分異なる箇所もある。地表面下約0.5～0.7m（標高57.2～57.4m）で黄灰色シルトの地山に達する。また、東発掘区の東側部分は、後世の水田形成の過程で削平を受けており、遺構は残存していなかった。

検出した主な遺構には、古墳時代の流路、奈良時代の建物・溝・土坑がある。

流路01は、西発掘区中央で検出した。幅1.8～2.8m、深さ約0.8mで、西北西から東南東へ流れる。第249次調査で検出した溝SD12と接続する可能性がある。古墳時代の遺物が出土した。

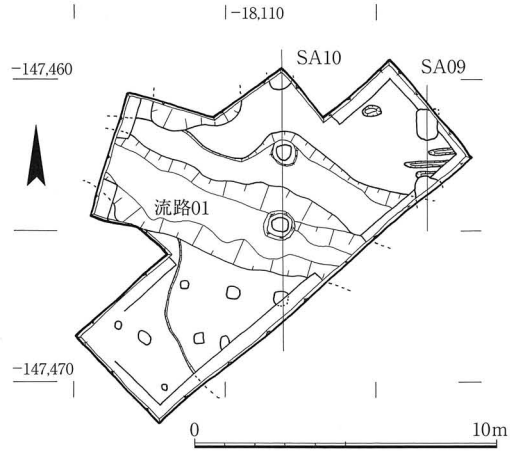
流路02は、東発掘区中央付近で検出した。幅0.6～0.8m、深さ約0.1～0.2m。北西から南東へ流れる。埋土から土師器片が出土したが、小片で時期の特定はできない。後述のSK06より古い。

流路03は、東発掘区中央東寄りで検出した。幅約6.0m、深さ約0.1m。流路02と同様に北西から南東へ流れる。埋土から古墳及び奈良時代の土器片が出土した。後述の溝SD05より古い。

流路04は、東発掘区中央西寄りで検出した。幅1.2～3.5m、深さ約0.3～0.4m。北西から南東へ流れる。埋土から土師器と須恵器片が出土したが、小片のため詳細な時期は特定できない。

SD05は、東発掘区東側で検出した溝である。幅0.9～1.2m、深さ約0.2m。北から南へ流れる。埋土から奈良時代の土器片が出土した。溝心の国土座標値は、X＝－147,460.00 、Y＝－18,067.35である。

SK06は、東発掘区南辺中央東寄りで検出した土坑である。径4.2m以上、深さ約0.1m。埋土か



西発掘区遺構平面図　1/250

ら奈良時代の須恵器と土師器片が出土した。このうち、須恵器杯Aには「上」の墨書がある。

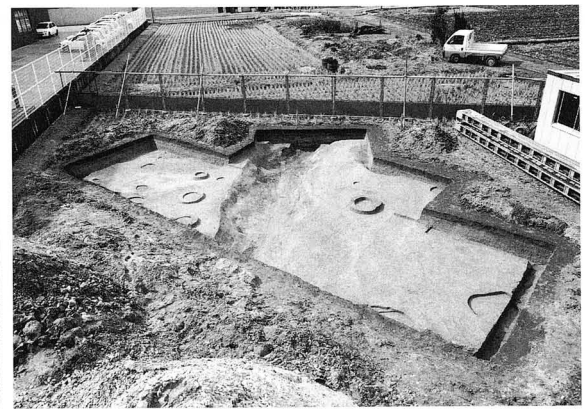
SA07～10は、南北方向の掘立柱塀である。いずれも発掘区内で一部を検出したのみで、両端は発掘区外へ続く。建物である可能性もある。このうち、SA07は、東発掘区西辺で柱間4間分（9.6m）を検出した。柱穴の埋土から奈良時代の土器片が出土した。SA08は、東発掘区西辺で柱間3間分（7.2m）を検出した。SA07の東約2mの位置を平行する。SA09は、西発掘区北東部分で柱間1間分（2.7m）を検出した。SA10は、西発掘区中央で柱間3間分（7.2m）を検出した。

SB11は、東発掘区北辺中央で検出した東西棟建物である。桁行4間分（8.4m）、梁間1間分（2.4m）を検出した。北側は発掘区外へ広がる。北側柱列より南側柱列の柱穴の規模が大きいので、南側柱列を南面廂とみるか、あるいは北側柱列を床束とみるか判断できない。柱穴の埋土から奈良時代の土器片が出土した。遺構の重複関係からみて、流路02・03よりも新しい。

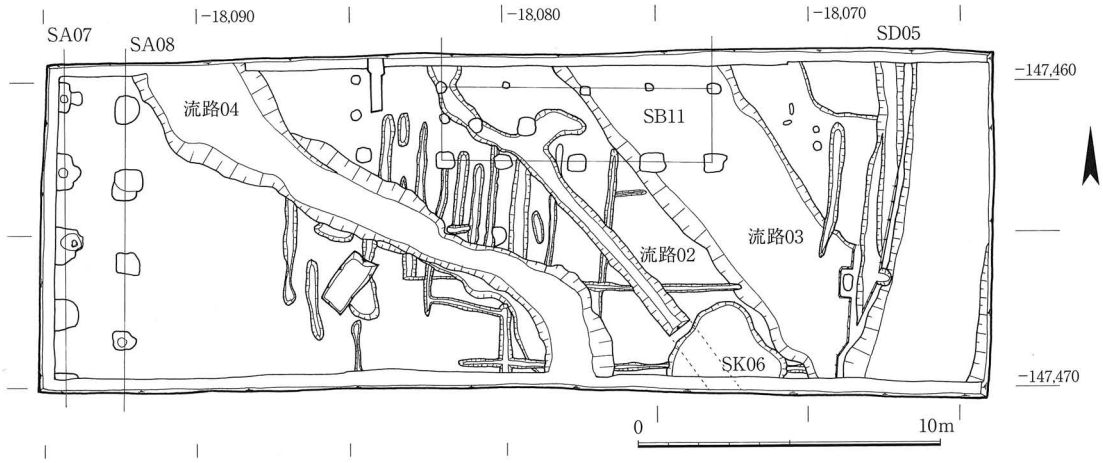
出土遺物は、遺物整理箱約6箱分ある。その大半は古墳・奈良時代の土器片である。

今回の調査では、北西から南東方向に流れる流路を4条検出したが、人為的に開削された溝である可能性も否定できない。埋土から古墳時代の土器片が出土していることから、流路は平城京造営までには埋没したと推定される。また、調査地の北約230mで実施した第316次調査（平成6年度）では、東一坊大路西側溝とその西側の雨落溝と推測される溝を検出している。その成果を基に計算すると、SD05は、第316次調査で検出した雨落溝と推定される溝の延長線上に位置しており、出土土器からみた時期が奈良時代と推定される点や、幅や深さ等の規模が類似している点から、十四坪の東面築地の雨落溝である可能性が高いと考えられる。（武田和哉）

東発掘区全景（東から）



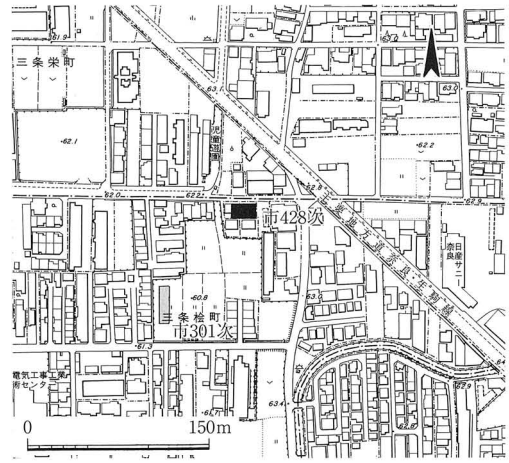
西発掘区全景（東から）



東発掘区遺構平面図　1/250

13.　平城京左京四条三坊十四坪の調査　第428次

事 業 名　共同住宅建設
届出者名　飯田善之
調査次数　平城京　第428次
調 査 地　三条桧町380－4、384－2
調査期間　平成11年5月19日～6月2日
調査面積　112㎡
調査担当者　武田和哉



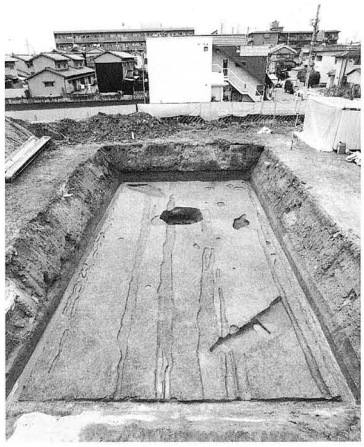
発掘区位置図　1/6,000

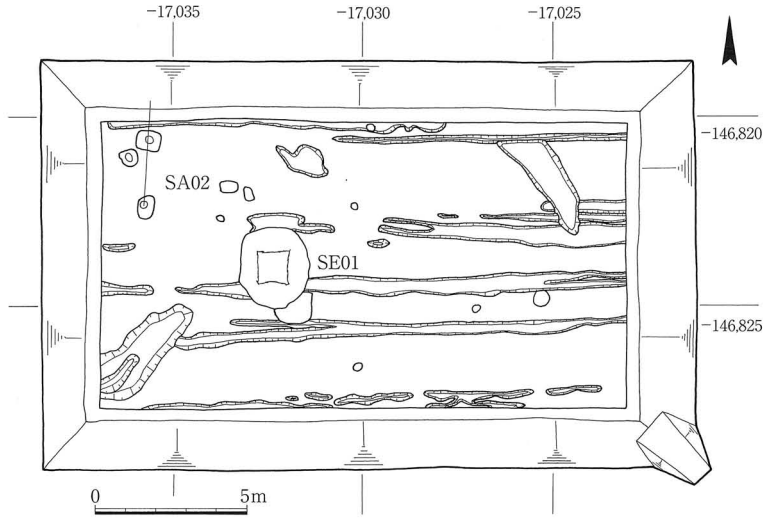
調査の概要　調査地は、平城京の条坊復原では、左京四条三坊十四坪の北東隅部に該当する。当坪内の過去の調査事例は1件あり（第301次・平成6年度）、奈良時代の建物5棟などの遺構を検出している。

発掘区内の層序は、造成土以下、黒灰色土、暗灰色土（いずれも耕土）、灰褐色土と続き、地表面下約1.9mで暗黄灰色土または暗茶褐色土の地山となる。地山上面が奈良時代の遺構面であり、標高は約61.0mである。

検出した主な遺構には、奈良時代の井戸１基、柱列１条、時期不明の土坑がある。SE01は発掘区中央西寄りで検出した井戸である。掘形は径1.8～2.1mで、平面形はやや楕円形を呈する。枠は木製の2段構造である。上段は一辺0.8～0.9mの方形の縦板横桟留の構造で、高さ約0.45m分が残存していた。下段は径約0.65m、高さ約0.35mの曲物を利用していた。検出面からの深さは約1.4mで、枠内の埋土から奈良時代の銅銙（丸鞆）と土器片が出土した。SA02は発掘区北西隅付近で検出した柱列である。発掘区内では1間分（1.65m）を検出した。このほか、柱穴をいくつか検出したが、建物や塀としてまとまらない。なお、出土遺物の総量は、遺物整理箱2箱分である。

今回の調査では、厚い造成土のために調査面積が限定されたものの、奈良時代の井戸や柱列などの遺構を検出することができた。これらの遺構の残存状況はおおむね良好であり、今後の周辺地での調査成果の蓄積が期待される。　（武田和哉）

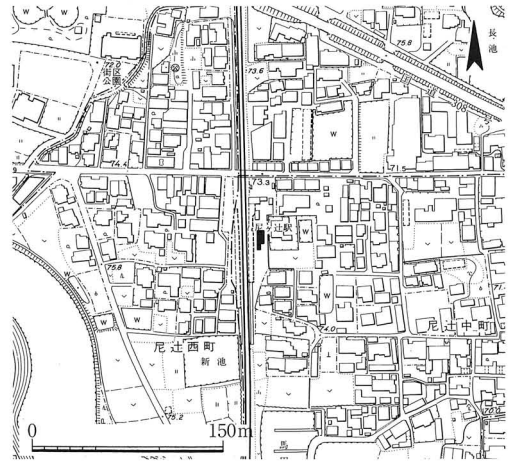

発掘区全景（東から）



遺構平面図　1/200

14. 平城京右京四条二坊十六坪の調査　第425次

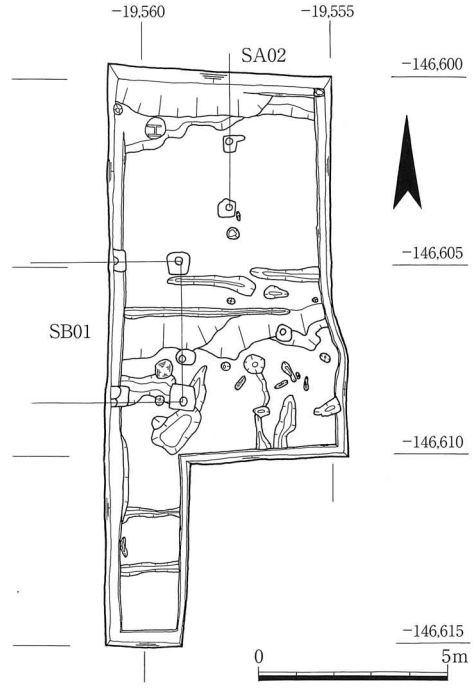
事 業 名　近鉄橿原線尼ケ辻駅地下化工事
届出者名　近畿日本鉄道株式会社
調査次数　平城京　第425次
調 査 地　尼辻西町221－4、ほか
調査期間　平成11年6月8日～6月16日
調査面積　68㎡
調査担当者　大窪淳司



発掘区位置図　1/6,000

調査の概要　調査地は、平城京の条坊復原では、右京四条二坊十六坪の北部に相当する。調査は十六坪内の様相確認を主目的として実施した。

調査地は、西ノ京丘陵の東辺部で、北に下がる傾斜地に位置する。発掘区全域にわたり遺構の残存が悪い。発掘区の北端及び中部付近では水田造成による削平でそれぞれ北に下がる段差が形成されている。このため、発掘区南部では造成土直下で地山となり、中部では造成土の下に耕土（橙灰色砂質シルト、暗灰色砂質シルト）が続き、地表下約0.5mで黄白色粘土の地山となる。また、北部では暗灰色砂質シルトの下に、さらに耕土（淡橙灰色砂質シルト、黄灰色砂質シルト）が続き、地表下約1.1mで地山となる。地山上面の標高は73.8～74.6mで、北に下がっている。発掘区北部の淡黄灰色砂質シルトから12～13世紀の瓦器が出土したことから、水田造成はこれ以降であったと考えられる。遺構面は地山上面である。



遺構平面図　1/200

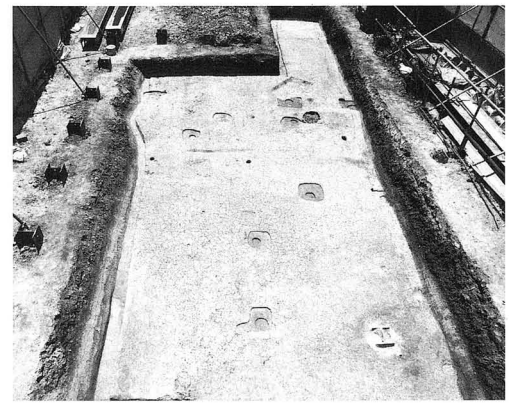
検出遺構には、奈良時代の掘立柱建物1棟、時期不明の掘立柱塀1条・土坑2がある。

SB01は、桁行1間（1.8m）以上、梁間2間（3.6m）の東西棟建物である。妻柱にあたる柱穴がなく、削平されたとみられる。柱穴埋土から奈良時代の須恵器の杯・壺の細片が出土した。

SA02は、南北1間（1.8m）以上の掘立柱塀である。発掘区外北に続く可能性がある。出土遺物はなく、時期は不明である。

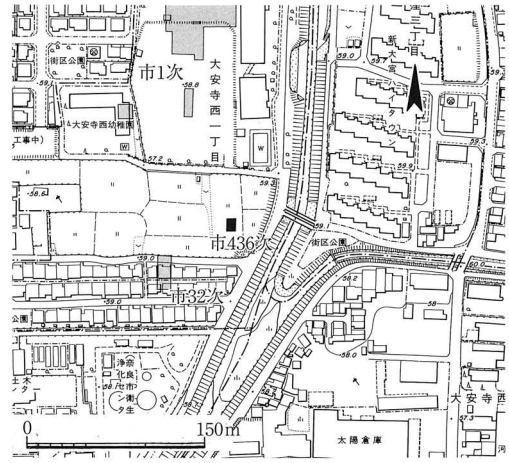
出土遺物は、土器が遺物整理箱1箱分出土した。奈良時代の土師器・須恵器、鎌倉時代の瓦器がある。いずれも細片であり、その多くは耕土から出土した。

（大窪淳司）


発掘区全景（北から）

15.　平城京左京五条二坊十三坪の調査　第436次

事 業 名　宅地造成及び共同住宅新築
届出者名　永保安雄
調査次数　平城京　第436次
調 査 地　大安寺西1丁目334、ほか
調査期間　平成11年10月28日～11月15日
調査面積　94㎡
調査担当者　武田和哉



発掘区位置図　1/6,000

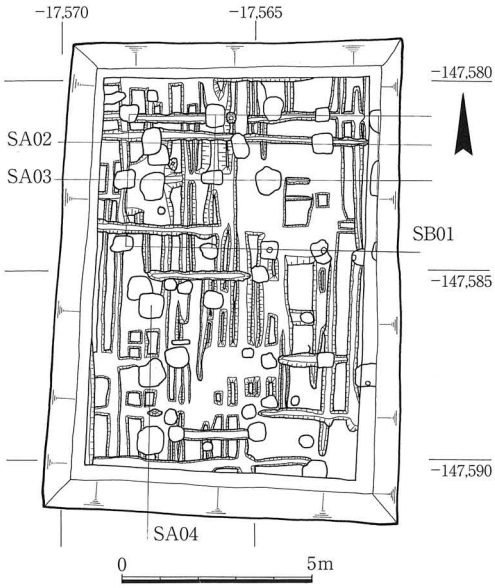
調査の概要　本調査地は、平城京の条坊復原では、左京五条二坊十三坪の南辺中央付近に該当する。

当坪付近における過去の調査事例は3件（第1次・昭和54年度、第32次・昭和57年度、ほか）あり、奈良時代の柱穴などの遺構のほか、十三坪の北側に想定されている五条条間南小路を検出している。

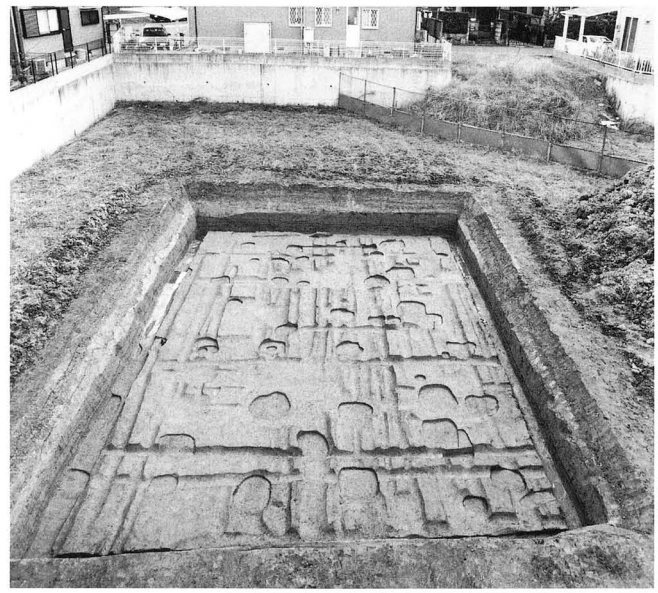
発掘区内の層序は、黒灰色粘土（耕土）以下、暗灰色土（耕土）、暗灰色砂礫、暗黄灰色粗砂、灰色粘土、暗灰色粘質土（遺物包含層）と続き、地表面下約1.0mで黄灰色粘土の地山となる。地山上面が奈良時代の遺構面であり、標高は約56.4mである。

検出した主な遺構には、奈良時代の掘立柱建物1棟、掘立柱塀3条がある。

SB01は、発掘区北半で検出した東西棟建物である。身舎は桁行3間（4.5m）、梁間2間（3.6m）で、西面廂の出は2.1mである。東面廂の有無は確認できなかった。SA02・03は、発掘区北半で検出した東西方向の塀で、いずれも両端は発掘区外へと続く。SA02は柱間2間（4.2m）分を、SA03は2間分（6.0m）をそれぞれ検出した。SA02は建物である可能性もある。ともにSB01と重複する。SA04は、発掘区南半で検出した南北方向の塀で、柱間2間（3.6m）分を検出した。南側は発掘区外へと続く。遺構の検出状況からみて、複数時期にわたる変遷が確認できる。なお、出土遺物は、遺物整理箱2箱分あり、大半は奈良時代の須恵器、土師器である。　（武田和哉）

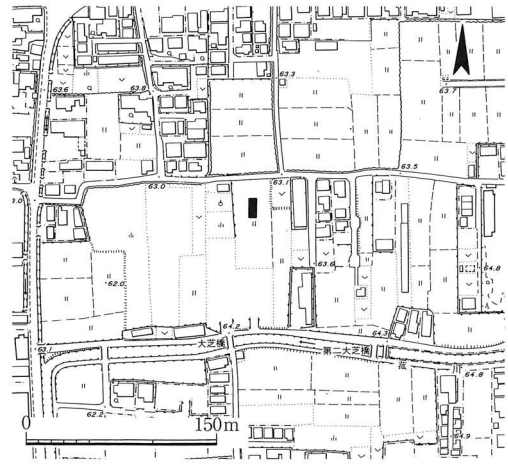


遺構平面図　1/200


発掘区全景（北から）

16. 平城京左京二条三坊七坪の調査　第432次

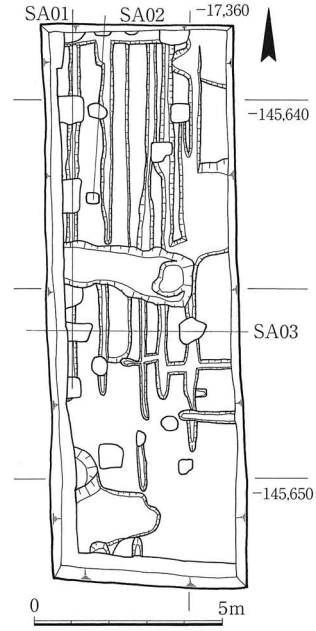
事 業 名　宅地造成
届出者名　㈱あかね住宅
調査次数　平城京　第432次
調 査 地　法華寺町320、321、321－4
調査期間　平成11年9月3日～9月17日
調査面積　75㎡
調査担当者　武田和哉



発掘区位置図　1/6,000

調査の概要　調査地は、平城京の条坊復原では、左京二条三坊七坪の中央よりやや北西寄りの部分に該当する。過去に当坪内での調査事例はなく、したがって当坪内の遺構の残存状況と様相の把握を目的とした。

発掘区内の層序は、黒灰色土、暗灰色土（ともに耕土）以下、暗黄灰色粘質土、淡茶灰色粘質土、暗灰色粘質土、灰色粘質土と続く。このうち、暗黄灰色粘質土には近世の陶磁器片が、暗灰色粘質土と灰色粘質土には、中世の土器片がそれぞれ含まれており、現在調査地の南約100mを東から西へと流れる菰川の氾濫に関係する堆積層と考えられる。この下に淡黄灰色粘土の地山がある。この上面が奈良時代の遺構面であり、地表面からの深さは約0.8m、標高は約61.4mである。



遺構平面図　1/200

検出した主な遺構は、奈良時代の柱列3条、時期不明の土坑である。SA01は、発掘区西辺で検出した南北方向の柱列。柱間4間分（9.6m）あり、発掘区外へ続く。SA02は、発掘区北西隅付近で検出した南北方向の柱列。発掘区内では2間分（2.4m）を検出した。SA01・02ともに、建物である可能性がある。SA03は発掘区中央で検出した東西方向の柱列。発掘区内では1間分（3.0m）を確認したが、建物である可能性は低い。ほかにも柱穴をいくつか検出したが、建物や塀としてまとまらない。

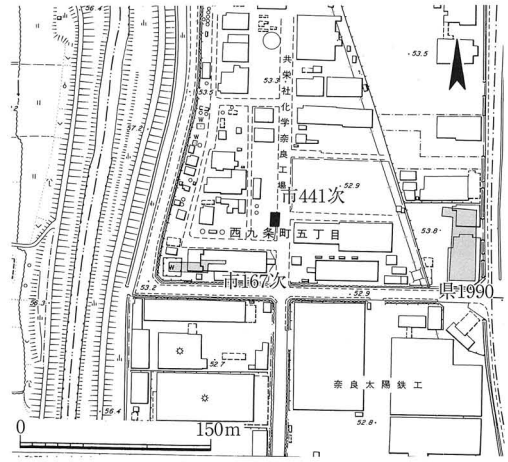
遺物は、瓦塼が遺物整理箱7箱分、土器が1箱分出土した。軒丸瓦は、6225A、6225種別不明、6308種別不明が各1点、軒平瓦は、6721Cが1点、形式不明が4点である。また、緑釉平瓦が1点ある。

本調査地では、中近世の河川氾濫に伴う堆積層が存在するものの、その下層の奈良時代遺構面は比較的良好に残存していることを確認した。　（武田和哉）

発掘区全景（北から）

17.　平城京左京九条一坊七坪の調査　第441次

事 業 名　工場増築
届出者名　共栄社油脂株式会社
調査次数　平城京　第441次
調 査 地　西九条町5丁目2－5
調査期間　平成12年3月6日～3月10日
調査面積　80㎡
調査担当者　中島和彦



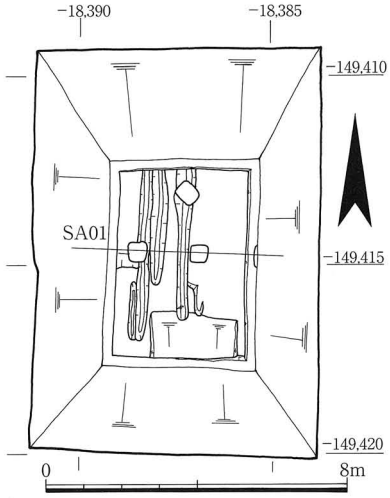
発掘区位置図　1/6,000

調査の概要　調査地は、平城京左京九条一坊七坪のほぼ中央にあたる。調査地より南西へ約60mの第167次調査（昭和63年度）では、奈良時代の井戸と坪境小路を検出している。また、東へ約150mの県1990年度調査では、奈良時代以降の佐保川と考えられる流路の西岸、奈良時代の溝・土坑を検出している。

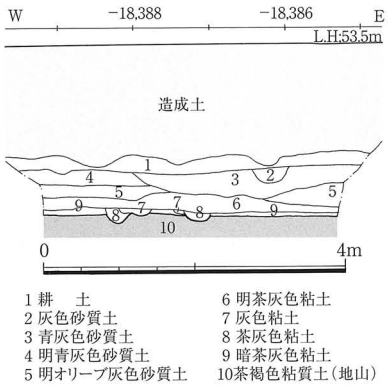
発掘区内の層序は、発掘区北側で、上から造成土、耕土、明青灰色砂質土、明オリーブ灰色砂質土、明茶灰色粘土、暗茶灰色粘土とつづき、現地表下約2.2m（標高約51.1m）で茶褐色粘質土の地山となる。厚い造成土のため、遺構検出ができたのはわずか22㎡である。

地山上面で、奈良時代の掘立柱塀1条、土坑1、暗茶灰色粘土上面で中世の小溝5条を検出した。掘立柱塀SA01は東西2間分を検出した。発掘区外東西につづく。掘立柱建物になる可能性もある。柱間は1.8m等間である。中世の小溝はすべて南北方向のもので、幅約0.3m、深さ0.05～0.15mである。溝のひとつから瓦器椀の小片が出土した。

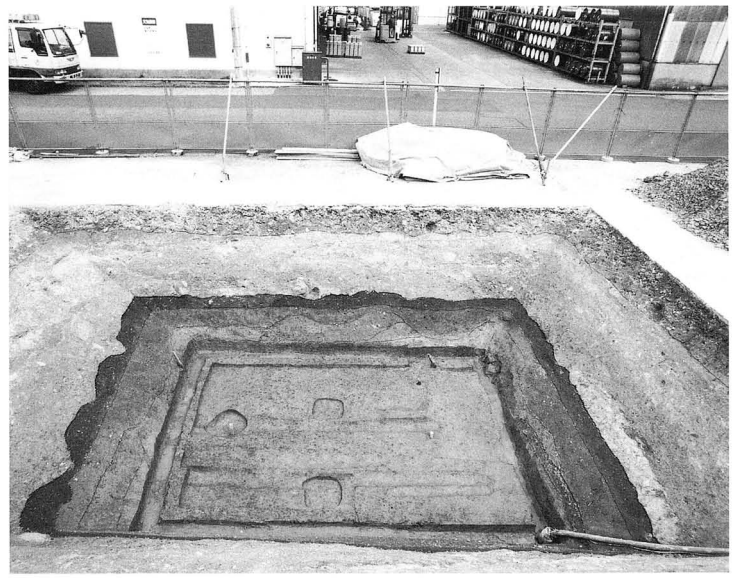
出土遺物には遺物整理箱1箱分の土器がある。古代から近世までの各時代のものがあるがいずれも小片である。（中島和彦）



遺構平面図　1/200



発掘区北壁土層図　1/100


発掘区全景（西から）

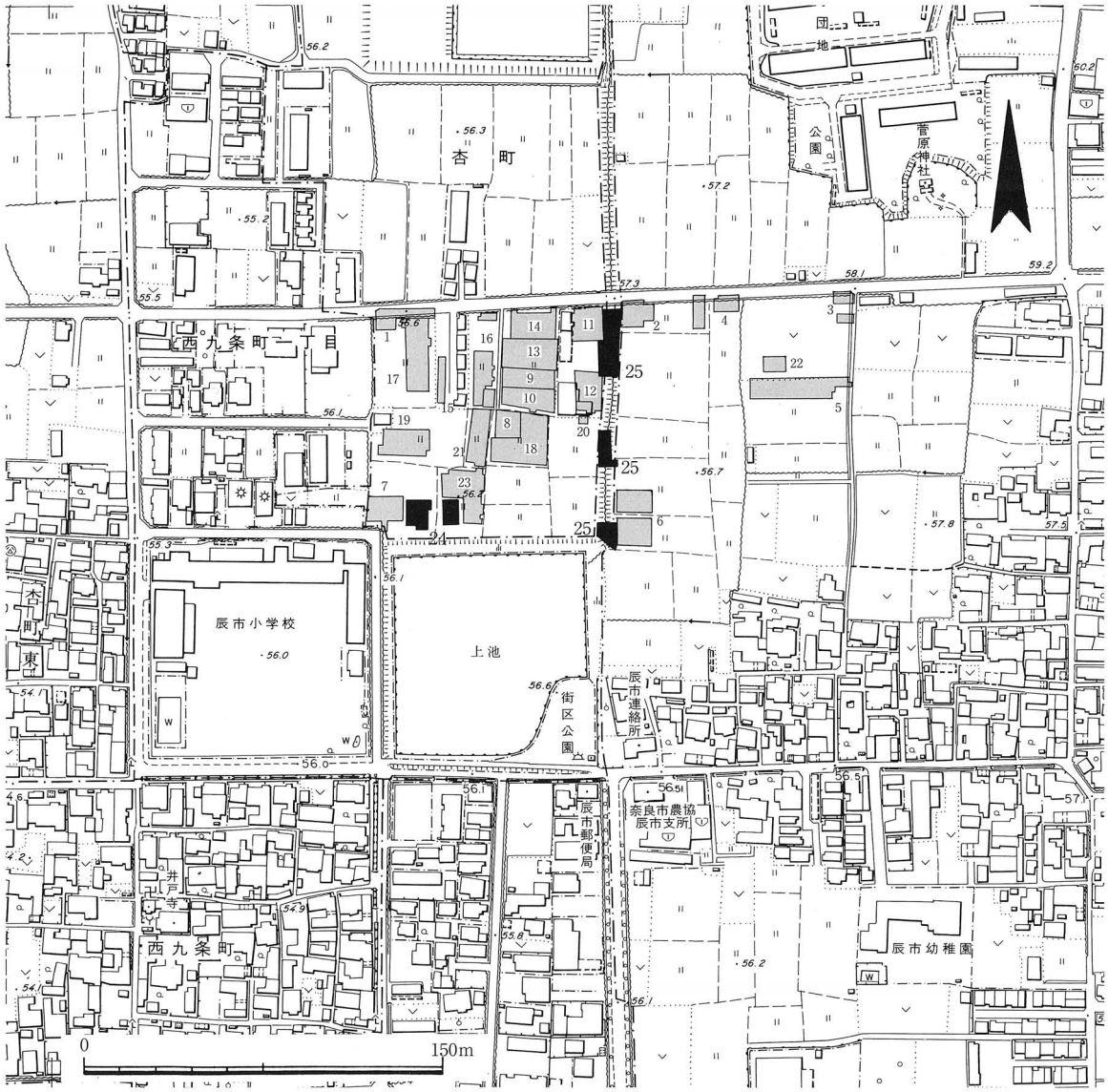
18. 平城京東市跡推定地の調査　第24次・第25次

平城京東市跡推定地では、第1次調査からこれまで19年間継続して発掘調査を行っている。継続調査が始まった当初は、推定地の範囲を確認するためにそれぞれの坪の周囲を調査してきたが、ここ数年間は左京八条三坊六坪について調査を行って、この坪の内部の様相についての資料を蓄積している。平成11年度にも、この坪内で2件の発掘調査を実施した。そのうち、1件はこの坪の内部に発掘区を設け、建物等の遺構を検出し、これまでに検出されている遺構との関係を確認した。もう1件は、この坪の東辺で、東市跡推定地の中央を南北に貫く東三坊坊間路の想定地に発掘区を設け、坊間路とそれに関連する遺構を検出した。

なお、本文中の遺構番号は、東市跡推定地内で付けている通し番号である。

平城京東市跡推定地発掘調査一覧表

調査次数	届出者名	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
24		範囲確認調査	杏町591、592	H11.11.16～H12. 1.13	400㎡	秋山
25	奈良市長	西九条佐保線街路整備事業	東九条町435-2	H12. 1.17～ 3.30	600㎡	宮崎・細川



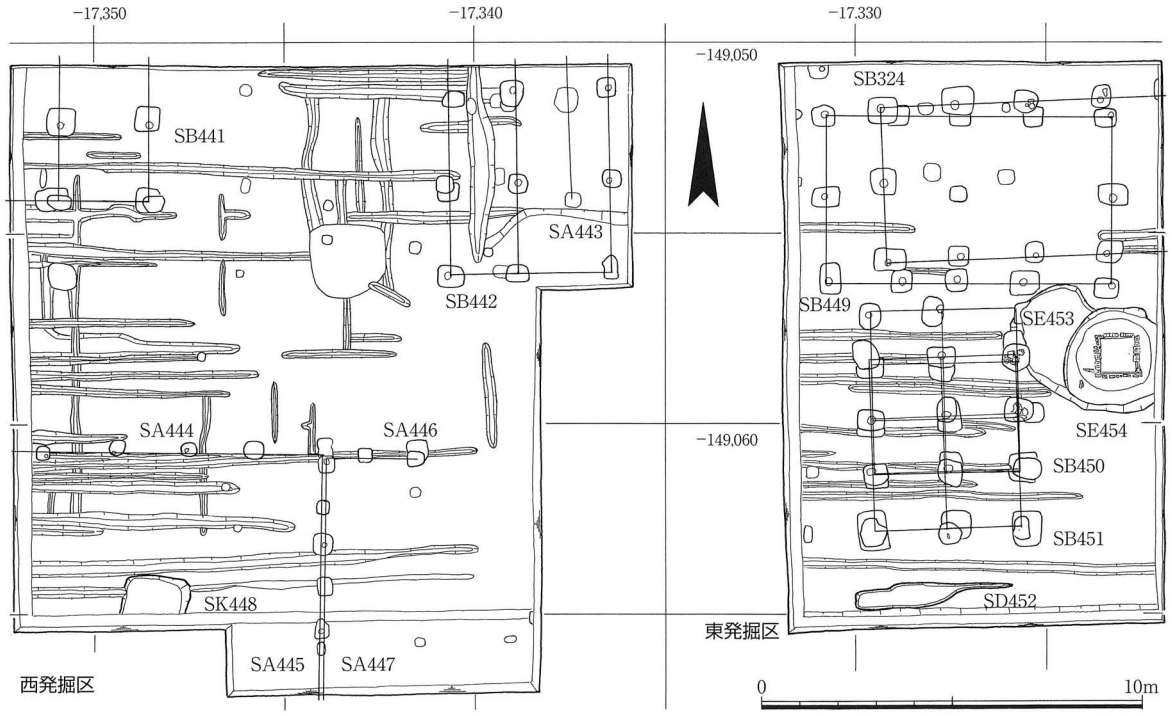
平城京東市跡推定地内の発掘区位置図　1/5,000

(1)　左京八条三坊六坪の調査　第24次

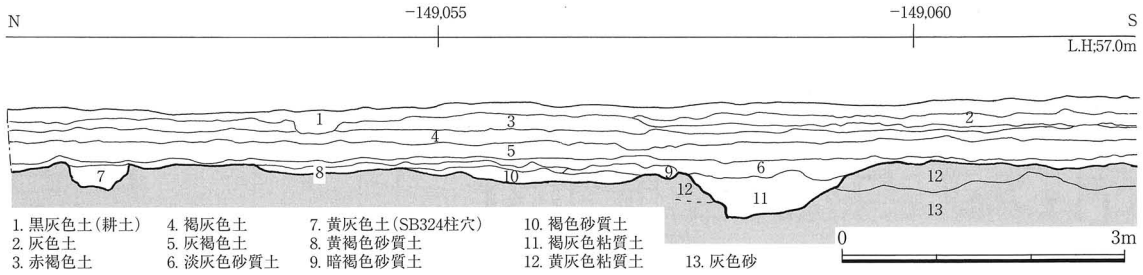
東市跡推定地では、六坪・十一坪を中心に調査が続けられている。六坪は、これまでの調査成果から、北辺に築地塀、東辺に門、坪の北東部に総柱建物を含む掘立柱建物が並ぶ一画、中央南側に空地、西側中央付近に土器埋納遺構、溝で区画された掘立柱建物が並ぶ一画、南辺中央付近に掘立柱建物が並ぶ一画があることがわかっている。今回の調査地は、六坪の南辺中央西寄りに位置する。坪内の様相を明らかにするため東西2箇所に発掘区を設けた。それぞれ東発掘区、西発掘区と証する。東発掘区はTI第23次調査（平成10年度）発掘区の西南に隣接し、西発掘区はTI第7次調査（昭和61年度）発掘区の東に隣接している。

発掘区の層序は、上から黒灰色土（耕作土）、灰色土、赤褐色土、褐灰色土、灰褐色土、淡灰色砂質土と続き、地表下約0.7mで地山である黄灰色粘質土となる。さらにその下層には灰色砂がある。地山上面の標高は、東発掘区北東隅で標高55.7m、西発掘区南西隅で標高55.3mで、北東から南西に傾斜している。遺構面は地山上面である。

検出遺構には、奈良・平安時代の掘立柱建物6棟、掘立柱塀5条、井戸2基、溝1条、土坑1がある。



遺構平面図　1/200



東発掘区東壁土層図　1/80

SB441は、西発掘区北西隅で検出した掘立柱建物で、TI第7次調査で西に続く柱穴を検出している。発掘区外北へ続く桁行1間以上、梁間3間の東廂付南北棟建物と考えられる。柱間寸法は桁行1.9m、梁間3.0m等間、廂の出2.2mである。柱穴から奈良時代の土師器甕・杯または皿、須恵器杯または皿が出土した。

SB442は、西発掘区北東隅で検出した桁行2間以上、梁間2間の西廂付南北棟掘立柱建物である。建物主軸は北で若干西に振れている。柱間寸法は桁行、梁間とも2.4m等間、廂の出は1.8m。柱穴から奈良・平安時代の土師器杯・甕、須恵器杯の小片が出土した。

SA443は、西発掘区北東隅で検出した南北方向の2間以上の掘立柱塀である。柱間寸法は2.7m等間。柱穴から奈良時代の土師器皿の小片が出土した。

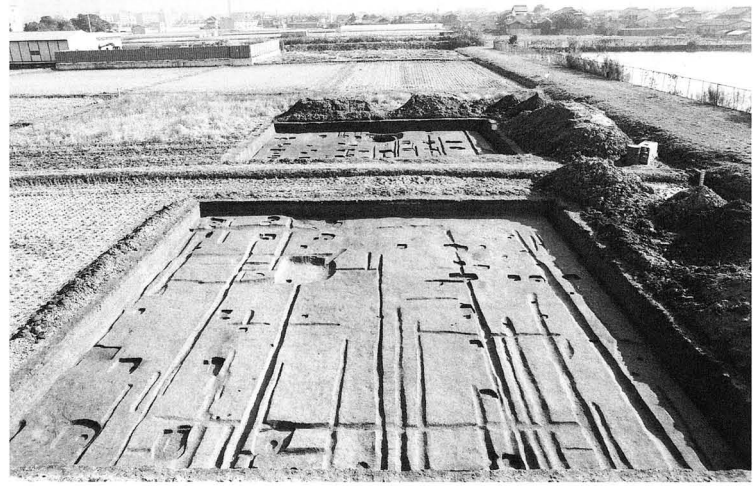
SA444は、西発掘区南側で検出した4間以上の東西掘立柱塀である。東端で後述のSA445に接続する。柱間寸法は1.8m等間である。柱穴から奈良時代の土師器杯又は皿の小片が出土した。

SA445は、3間以上の南北塀で、柱間寸法は1.8m等間である。

SA446は、SA444延長線上で検出した東西2間の掘立柱塀である。西端で後述のSA447に接続する。柱間寸法は1.15m等間。

SA447は、2間以上の南北塀で、柱間寸法は2.3m等間である。なお、SA446・447はSA444・445より新しく、これらを建替

発掘区全景（東から）



発掘区全景（西から）

SE453・454全景（南から）

えたと思われる。柱穴から奈良時代の須恵器杯・甕・壺 の小片が出土した。

SK448は、西発掘区南辺で検出した平面不整形掘形の土坑である。東西1.75m、南北1.0m以上で、掘形の南側は発掘区外へ広がる。深さは0.1mで、底は比較的平らである。埋土は黒褐色土で、焼土及び炭を含む。平安時代の土師器、須恵器、土馬の脚、鉄製品が出土した。

SB449は、東発掘区北側で検出した桁行4間、梁間2間の東西棟掘立柱建物である。柱間寸法は桁行が西から1.9m、1.5m、1.9m、1.9m、梁間が2.2m等間である。桁行の西から2間目に間仕切りの柱がある。柱穴から奈良時代の土師器杯または皿の小片が出土した。

SB324は、桁行6間、梁間2間の東西棟掘立柱建物で、TI第23次調査で東側柱列を検出している。柱間寸法は桁行1.9m等間、梁間2.1m等間である。建物主軸は北で若干西に振れている。SB449の建替えであると考えられるが、全体にSB449より1.5m東にずれている。柱穴から奈良時代の土師器杯または皿・甕の小片、須恵器の杯または皿・甕の小片が出土した。

SB450は、東発掘区南側で検出した桁行3間、梁間2間の掘立柱総柱建物である。柱間寸法は桁行1.5m等間、梁間1.9m等間である。柱穴から奈良時代の土師器杯・皿・甕、須恵器杯・皿・壺・甕の小片が出土した。重複関係からSB451より古いことがわかる。

SB451は、SB450と同規模の掘立柱総柱建物である。SB450の建替えであると考えられるが、全体に南へ1.5mずれている。桁行3間、梁間2間で、柱間寸法は桁行1.5m等間、梁間1.9m等間である。柱穴から土師器杯・皿・甕、須恵器杯・壺・甕の小片が出土した。

SD452は、SB451の南側で検出した東西方向の溝である。幅0.7m、長さ4.1m、深さ0.15mである。埋土は暗褐色土で、奈良時代土師器杯・皿の小片が出土した。SB451の雨落溝である可能性がある。

SE453は、東発掘区東側で検出した井戸である。井戸枠の縦板1枚を残し、広範囲に抜取られている。さらに東側は後述のSE454によって破壊されているため、掘形の規模及び構造は明確でないが、下方には掘形埋土の灰色砂質土（地山を含む）が残っており、東西1.8m以上、南北2.8m、検出面からの深さ0.8mまでを確認した。掘形埋土から奈良時代中頃の土師器杯、須恵器椀が出土した。重複関係から建物SB450より古いことがわかる

SE454は、SE453の東側で重複して検出した平面不定形掘形の井戸である。規模は東西2.7m以上、南北2.7m、検出面からの深さ1.5mである。井戸は湧水層である灰色砂まで掘り込まれている。井戸枠は上部が抜取られ、瓦、塼、人頭大の河原石で埋められいた。最下段の枠が残っており、内側に井籠組、外側に方形縦板組の枠を据えた二重構造である。内法は一辺0.88mである。井籠組の枠材の上面中央には、それぞれ枘穴を設け、上段に枠を積み重ねた痕跡がみられる。枠内埋土から奈良・平安時代の須恵器が、抜取り坑埋土から平安時代前半の土師器、須恵器、黒色土器、軒平瓦、塼が出土した。

発掘区を東西に分けたため、東発掘区と西発掘区との遺構の関係に不明な点もあるが、遺構の重複関係、建物主軸の振れ及び出土遺物から、今回の調査地での奈良～平安時代の遺構のおおよその変遷を次のように考える。まず、西発掘区では建物SB441とやや離れて東にSA443が建つ。SB441の南には区画塀SA444・445がある。東発掘区では建物SB449とその南に井戸SE453があったものと思われる。次に西発掘区では区画塀SA444・445がSA446・447となる。東発掘区では建物SB449がSB324に建て替わり、南には総柱建物SB450が建つ。その後SB450はSB451に建て替わる。井戸SE453は平安時代になるとSE454に替わり、西発掘区ではSB442、SK448がそれと同時期であったものと思われる。

（秋山成人）

出土遺物には、土器、瓦塼、金属製品がある。このうち、土器が遺物整理箱で2箱分、瓦塼が4箱分、金属製品が1点出土した。

土器・土製品には、8～9世紀の土師器、須恵器、黒色土器A類、製塩土器、土馬がある。SE453・454、SK448、柱穴等から出土した。このうち、SE454、SK448出土土器の概要を記す。

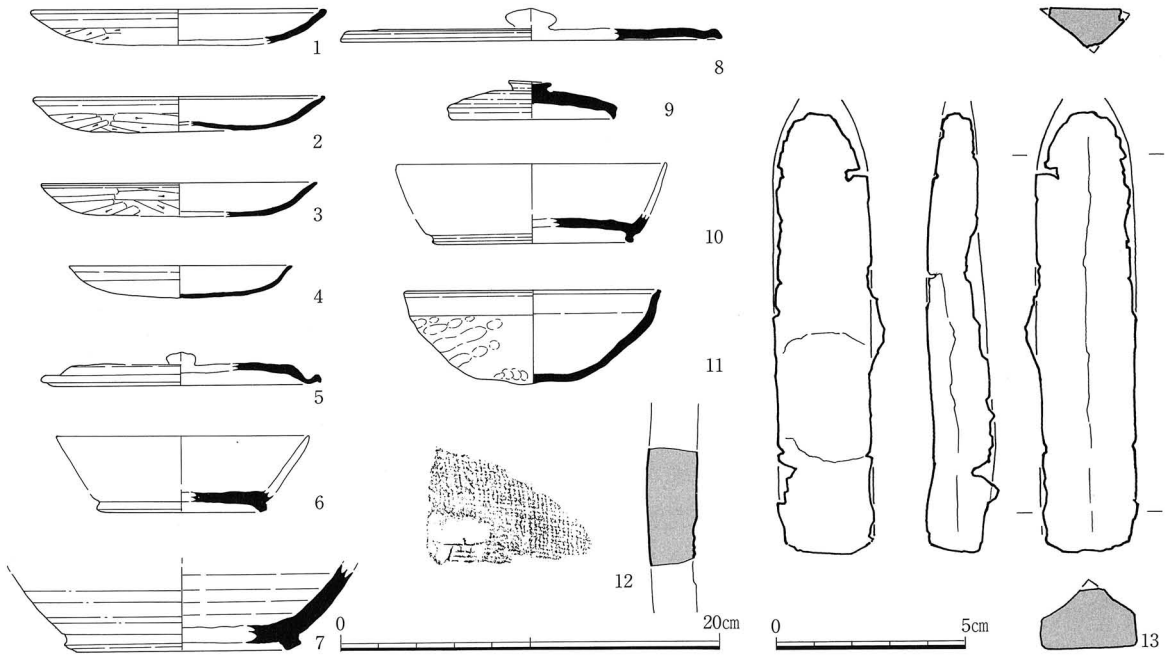
SE454抜取坑出土土器には、土師器杯A・皿A（1～4）・椀A・高杯・甕、黒色土器A類椀、須恵器杯A・B（6）・蓋（5）・壺（7）・甕がある。1～3は口縁部外面をケズリで調整する。4の器壁は薄く、2㎜程度しかない。ヨコナデ調整で仕上げている。5は、口縁部が大きく外側に広がる。6・7は、高台がかなり外側の位置に付いている。9世紀末から10世紀前半代の土器と考えられる。

SK448出土土器・土製品には、土師器杯C・皿C・椀C（11）・高杯・甕、須恵器杯B（10）・蓋（8・9）・甕、土馬がある。8の頂部外面は、不定方向のナデ調整で、縁部が大きく外側へ広がっている。9の頂部外面はロクロケズリであり、瓶か壺の蓋である可能性が高い。10は、底部外面を不定方向のナデ調整で仕上げている。高台の端部と底部内面は、ロクロナデ調整痕の一部が磨耗しており、非常に滑らかな手触りである。11は、口縁部だけをヨコナデ調整し、体部には成形時の凹凸が残っている。東市跡推定地内では比較的多く出土する器形の1つである。土馬は脚部片が1点出土した。9世紀初頭～前半のものであろう。

瓦には、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、文字瓦、塼がある。大部分は、SE454から出土した丸瓦、平瓦である。軒丸瓦は6143Aが1点あり、SE454抜取坑から出土した。塼は13点あり、すべてがSE454抜取坑から出土した。大半は小片であるが、一辺約7㎝のものが1点ある。文字瓦（12）が1点ある。丸瓦の凹面に押印したもので、「廣」と思われる文字が確認できるが、文字の下半部は欠損している。

鉄製品（13）は、長さ12.7㎝、幅は2.5㎝、厚さ1.6㎝、重さ76.72ｇである。表面には稜があり、裏面は下半部で少し窪んでいる。断面形は、先端から4.8㎝までが二等辺三角形で、以下は五角形である。全体が錆付いており、剥離が著しい。二次的に火を受けたためか赤色を帯びている。用途は不明確だが、形状からみて鍋の脚部、または矛先の可能性がある。SK448から出土した。

（秋山成人・三好美穂・宮﨑正裕）



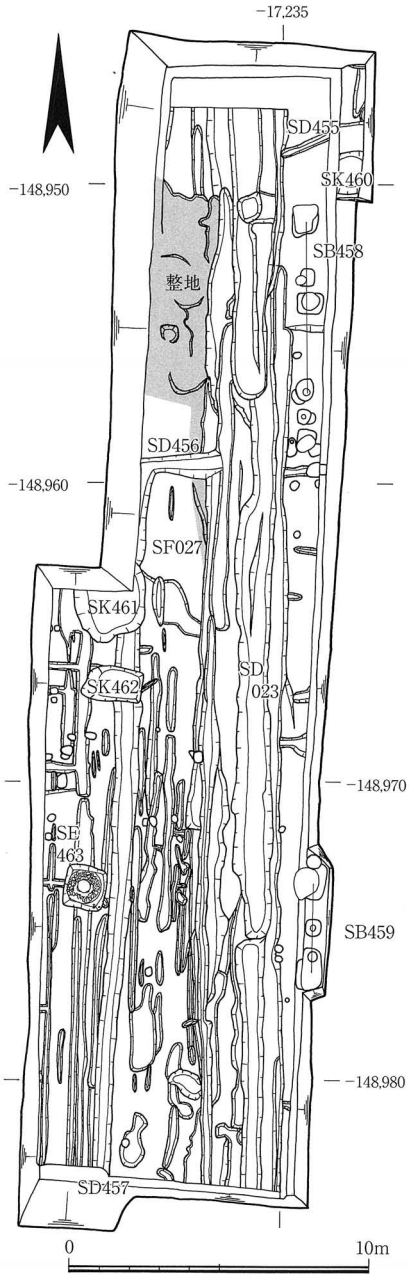
出土土器・瓦　1/4　・鉄製品　1/2

(2)　東三坊坊間路の調査　第25次

調査は、東三坊坊間路の検出と、八条条間小路との交差点部分の様相解明を主目的とした。発掘区を3箇所設定し、北から順に北・中央・南発掘区とした。基本層序は、耕土以下、茶灰色砂質土、茶褐色砂質土、茶灰色粘砂と続き、いずれの発掘区も現地表下0.5m前後で地山となる。遺構面はすべて地山上面で、北発掘区では黄灰色粘質土（標高56.5m前後）、中央発掘区では茶灰色砂（標高56.3m前後）、南発掘区では黄灰色砂（標高56.2m前後）の上面である。

主な遺構には、奈良時代の道路及び側溝、掘立柱建物・塀と土坑、鎌倉時代の井戸と溝、鎌倉時代以降の土坑と耕作に関わる小溝がある。なお、いずれの発掘区でも南北に縦断する杭列を検出したが、これは調査前まで所在していた堤防の基底部を土留めした部材である。

発掘区がまたがる道路遺構について記した後、北発掘区から順に遺構について記すことにする。



北発掘区遺構平面図　1/250

道路遺構　SF027は、東三坊坊間路である。北発掘区で、後述のSD023の西岸から約5m分を検出した。TI第11次調査（平成2年度）でSF027の西端を検出しているので、これと合わせて路面幅が約5.7mであることが判明した。

SD023は、SF027の東側溝である。北発掘区では、幅約3m、深さ0.1～0.4mで、南発掘区では、幅約1.3m、深さ約0.2mである。なお、溝の南端は八条条間小路北側溝につながり、L字形に東へ曲がることが、TI第6次調査（昭和60年度）で判明している。奈良時代から平安時代初頭の土器と土馬が出土した。溝心の国土座標値は、北発掘区ではX＝－148,950.000、Y＝－17,236.280である。

SD028は、SF027の西側溝である。中央発掘区で溝の東岸を、南発掘区で幅約1.1m分を検出した。深さ約0.2m。溝の南端は八条条間小路北側溝につながり、L字形に西へ曲がる。奈良時代から平安時代初頭の土器が出土した。重複関係から後述のSK465よりも新しく、SD468よりも古い。

SF022は、八条条間小路である。南発掘区で、SF027との交差点部分を検出した。路面幅は、後述の通り、南側溝が付け替えられるため、約4mから約6mに広くなる。

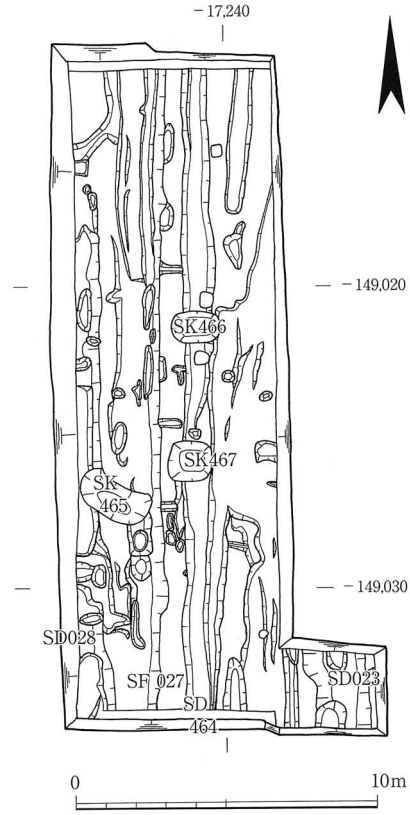
SD020・021は、ともに南発掘区で検出したSF022の南側溝であり、SD020からSD021へ付け替えられたことが判明している（TI第6次・昭和60年度）。ともにSF027を横断する。深さは0.1m程度である。奈良時代の土器が出土した。重複関係からSD020・021は後述のSD468よりも、SD021は後述のSK470よりも古い。

北発掘区の遺構　SD455は、幅約0.4m、深さ約0.2mの溝で、東端は発掘区外に続く。溝底の標高は北東が南西に比べて高い。遺物は無かった。重複関係からSD023よりも先に埋まったものと思われる。後述の通り、SD023の東に

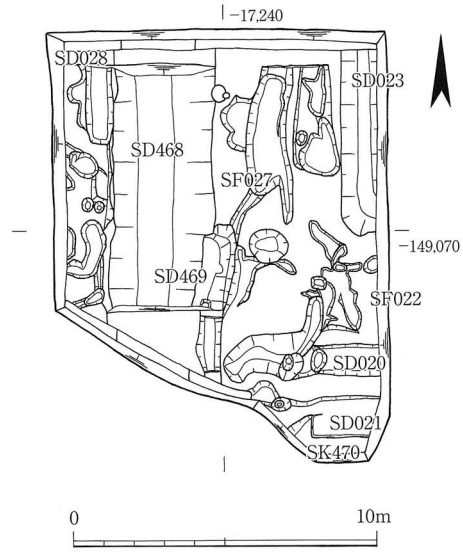
北発掘区全景（北から）

中央発掘区全景（南から）

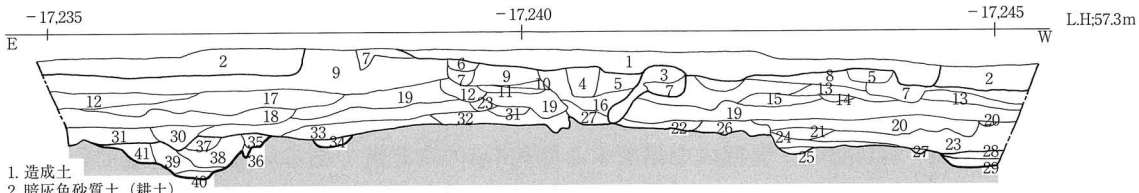
南発掘区全景（北から）



中央発掘区遺構平面図　1/250



南発掘区遺構平面図　1/250

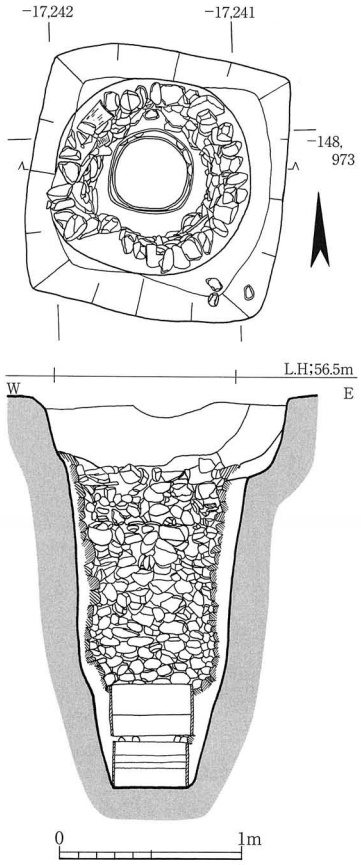


1. 造成土
2. 暗灰色砂質土（耕土）
3. 淡黄灰色粘砂
4. 黄灰色砂礫
5. 淡茶灰色砂質土
6. 灰色粘砂
7. 淡黄灰色砂質土
8. 黄灰褐色砂質土
9. 黄灰色砂質土
10. 灰色砂
11. 黄灰色粘砂
12. 灰色粘砂
13. 茶灰色砂質土
14. 灰色砂質土
15. 灰褐色砂質土
16. 黄灰色粘質土
17. 暗灰褐色砂質土
18. 茶灰褐色粘質土
19. 茶灰褐色砂質土
20. 灰褐色粘砂
21. 灰褐色粘質土
22. 茶灰色砂
23. 茶灰色粘砂
24. 灰褐色砂質土
25. 灰褐色粘砂
26. 茶灰色粗砂
27. 灰色粘砂
28. 灰色粘質土
29. 黄茶褐色粘質土
30. 暗茶灰色粘質土
31. 茶褐色粘質土
32. 淡黄灰色粘砂
33. 茶褐色砂質土
34. 灰色粗砂
35. 灰色砂
36. 黒灰色砂
37. 橙灰色砂質土
38. 暗灰色砂質土
39. 明橙灰色粘砂
40. 黄灰色粘質土
41. 橙色粘砂

28・29はSD028
35〜41はSD023

0　3m

中央発掘区南壁土層図　1/80



SE463平面及び断面図　1/40

築地を想定すると、暗渠であった可能性がある。

SD456は、幅約0.5m、深さ約0.2mの東西溝で、西端は後述のSD457につながる。奈良時代の土器が出土した。重複関係からSD023よりも先に埋まったものと思われる。

SD457は、幅0.6～0.9m、深さ0.3m前後の南北溝で、北端はSD456につながり、南端は発掘区外に続く。奈良時代の土器が出土した。重複関係から後述のSK461・462よりも古い。

SB458・459は、南北2間の掘立柱列である。SB458の柱間は北から2.7m、3.0mである。SB459の柱間は1.5m等間で、中央の柱穴は両端の柱穴よりも小さい。後述の通り、ともに築地に取り付く、東三坊坊間路に開く門である可能性がある。

SK460は、南北約1.4m、東西0.9m以上の土坑で、東端は発掘区外に続く。深さ約0.8mである。奈良時代の土器が出土した。

SK461は、南北、東西とも約2.5m、深さ0.1～0.2mの土坑で、北端は発掘区外に続く。奈良時代の土器が出土した。

SK462は、南北約1.1m、東西約1.8m、深さ約0.2mの土坑である。奈良時代の土器が出土した。

SE463は、深さ約2.2mの円形の石組井戸で、掘形の平面は隅丸方形である。井戸底に曲物を2段重ねている。検出面下0.4m前後までは石が抜き取られている。以下、曲物まで平面円形の石組が続く。上段の曲物は内径約45㎝、高さ約27㎝で、下段の曲物は内径約40㎝、高さ約24㎝である。掘形、枠内、抜取坑埋土のすべてから鎌倉時代初頭の瓦器が、枠内から奈良時代の軒丸瓦 6138Cbと軒平瓦6712Bが出土した。

発掘区北端のSD023の西岸で、南北約7m、東西2m以上に広がる整地土（黄褐色粘質土）がある。西端は発掘区外に続き、最も厚い部分で約0.2m堆積している。SD023はこの整地土上面から掘り込まれる。整地土には奈良時代の土器片と瓦片が含まれるが、詳細な時期は不明である。

中央発掘区の遺構　SD464は、幅約0.9m、深さ0.2～0.3mの南北溝で、発掘区外に続く。検出した位置、規模、埋土の状態からみて北発掘区で検出したSD457につながると思われる。奈良時代の土器が出土した。重複関係から後述のSK466・467よりも古い。

SK465は、北西から南東方向に長い土坑で、長辺約2.4m、短辺約1.2m、深さ約0.4mである。遺物は無かった。

SK466は、南北約1.1m、東西約1.6m、深さ約0.6mの土坑である。奈良時代の土器が出土した。

SK467は、南北約1.4m、東西約1.5m、深さ約0.4mの土坑である。奈良時代の土器の土器のほか、鎌倉時代末～室町時代初頭の瓦質土器が出土した。

発掘区の一部を拡張したところ、SD023溝内から奈良時代中頃の土器がまとまって多量に出土した。出土状態からみて、土坑である可能性が高い。

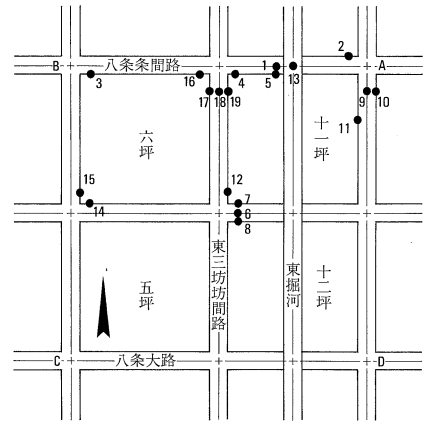
南発掘区の遺構　SD468は、発掘区を縦断する幅約4mの南北溝である。深さは北端で約1.7m、南端で約1.4mである。奈良時代の軒平瓦6671Cや土器のほか、鎌倉時代後半の土師器、瓦器、瓦質土器が出土した。重複関係から後述のSD469よりも新しい。

SD469は、南北溝で、南端は発掘区外に続く。西岸はSD468で削平され、幅は不明であるが、

深さは0.4mまで確認した。遺物は無かった。

SK470は、南北1.1m以上、東西2.8m以上、深さ0.4m以上の土坑で、南端は発掘区外に続く。奈良時代～平安時代初頭の土器が大量に出土した。

これまでの成果[1]をもとに条坊関連遺構についてまとめる。東三坊坊間路SF027の東側溝SD023は、十一坪の南端では既に溝心がわかっており（点12）、今回新たに北端でも溝心X=－148,950.000、Y=－17,236.280が判明した（点19）。六坪の南端ではSF027の西側溝SD028を検出したが、東岸が鎌倉時代の南北溝SD468で削平されていることから、溝心が特定できなかった。しかし、北端では既にSD028の溝心がわかっていることから（点17）、点17と19をもとにSD023・028の溝心心間距離8.45mとSF027の道路心X=－148,950.000、Y=－17,240.505（点18）を求めることができた。



条坊概念図

次に十一坪の周囲及び内部の区画について考えてみる。十一坪の西辺の区画施設が想定される位置でSB458・459が検出できたことから、本来、区画施設として築地が存在し、そこに門が開いていたものと考える。また、門と考えたSB459の中心（X=－148,974.600、Y=－17,233.900）が十一坪の北端からほぼ1/4にあたり、SB459から東堀河をはさんで東へ約90mのところで検出した東西道路SF336（道路心X=－148,976.350、Y=－17,145.000）も、SB459と同様に十一坪を北端からほぼ1/4に区画していた坪内道路と考えられている（TI第22次・平成10年度）。しかし、SB459とSF336が同時期である確証は無い上、十一坪の中央には坪内を東西に分ける東堀河が存在する。現在のところ、十一坪内は東西ともに北端からほぼ1/4で区画していた時期があった可能性が高い。

出土遺物　土器が遺物整理箱11箱分と瓦塼が39箱分ある。土器の一部と軒瓦の概要を記す。

土器には、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器がある。1～19はSD023出土土器である。土師器の内外面は剥離が著しいが、杯・皿・椀には外面にケズリの痕跡を残すものもある。奈良時代～平安時代初頭のものである。20～33は中央発掘区SD023で想定した土坑からの出土土器である。土師器杯・皿・椀の法量はSD023や後述するSK470のものに比べてやや大きい。杯A（20～22）と杯C（23・24）には外面にミガキ、内面に暗紋を施すものもある。奈良時代中頃のものである。34～58はSK470出土土器である。土師器杯・皿・椀の外面はケズリで調整するものが多い。58は須恵器壺体部の破片に「美濃」と線刻している。奈良時代～平安時代初頭のものである。

瓦塼は、丸瓦、平瓦が大半で、軒瓦が14点、塼が6点ある。軒瓦の内訳は、素弁十弁に復原できる軒丸瓦（59）、軒丸瓦6138Cb、6301Cが各1点と型式不明軒丸瓦が2点、軒平瓦6671C、6712Bが各1点、6721C、6732Lが各2点、型式不明軒平瓦が2点と奈良時代末～平安時代初頭頃に比定されている[2]軒平瓦（60）が1点ある。59は東市跡推定地出土品（TI第3次・昭和57年度）、姫寺推定地出土品[3]と同笵と思われる。60は瓦当左半分の断片であるが、平城京左京八条一坊三・六坪と同十坪出土品と同笵と思われる[4]。

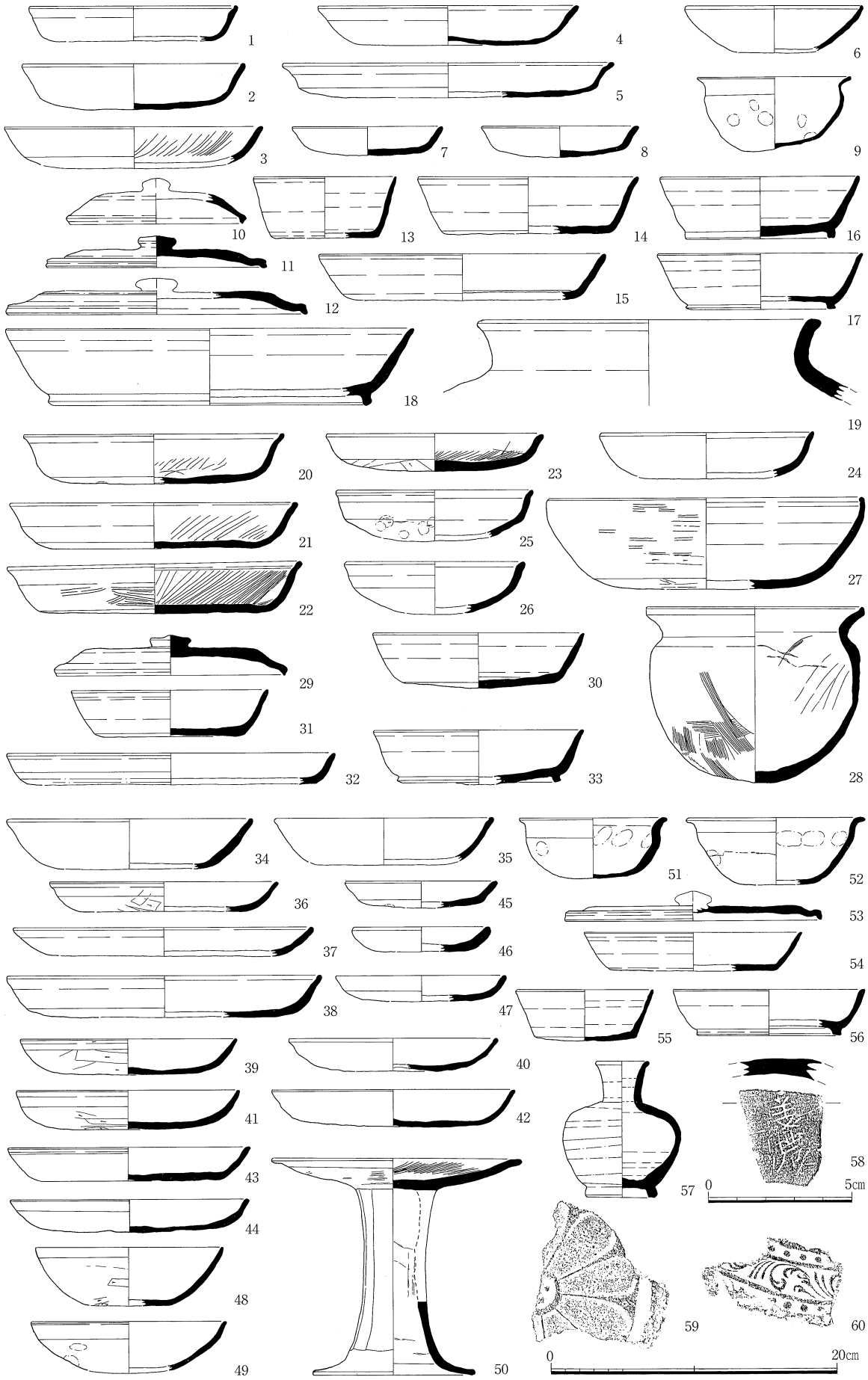
（宮崎正裕・細川富貴子）

1）これまでの東市跡推定地の条坊関連の調査成果を図に示した。点1～17、点A～Dについての国土座標値は、奈良市教育委員会『平城京東市跡推定地の調査　Ⅳ・Ⅴ・Ⅸ』1986・1987・1991を参照していただきたい。

2）奈良国立文化財研究所編『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書』1985。

3）奈良国立文化財研究所『平城京左京八条三坊発掘調査概報　東市周辺東北地域の調査』1976。

4）前掲書2)。



出土土器・瓦　1/4（58は1/1）

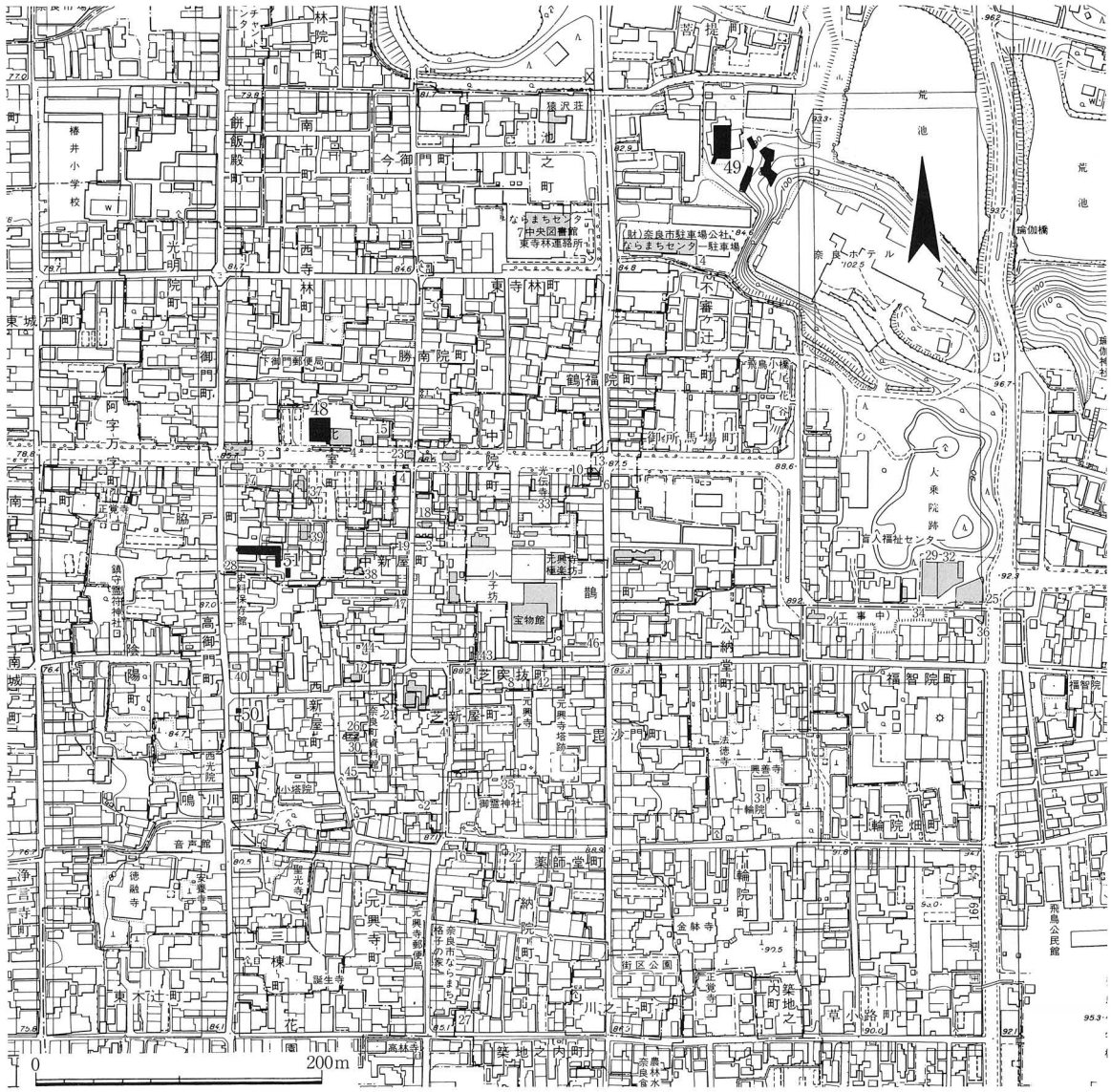
Ⅱ. 寺院・神社の調査

1. 元興寺旧境内・奈良町遺跡の調査

平成11年度は、元興寺旧境内で、第48次から第51次まで4件の発掘調査を実施した。しかし、中近世の奈良町遺跡の遺構が多く、奈良時代の元興寺に関わる遺構はほとんど残存していなかった。わずかに第51次調査で、元興寺の創建期に関わると思われる建物等を検出したのみである。同じ第51次調査で、元興寺を創建する際に削平されたと思われる古墳の周濠を検出した。また、第49次調査では、室町時代に築かれた山城である鬼薗山城の発掘調査を実施した。

平成11年度　元興寺旧境内発掘調査一覧

調査次数	届出者名	事　業　名	調　査　地	調 査 期 間	調査面積	調査担当者
48	杉山嘉一	共同住宅建設	北室町18－1	H11. 5.11～ 6.22	212㎡	中島
49	シェルホーム	共同住宅建設	高畑町1116-3、-4、-5	H11. 5.26～ 7.27	520㎡	安井・原田香
50	村上良雄	個人住宅建設	高御門町17	H11. 9.17～ 9.29	10㎡	秋山
51	奈良市長	文化施設整備事業（奈良市立華邨書道美術館建設）	脇戸町3	H11.11.29～H12.1.8	150㎡	中島



元興寺旧境内発掘調査位置図　1/5,000

(1)　元興寺旧境内（食堂推定地）・奈良町遺跡の調査　第48次

Ⅰ　はじめに

調査地は、元興寺の食堂推定地の西側にあたり、調査地の東側ではGG第4次調査（昭和57年度）が行われている。この調査では元興寺の遺構は検出されず、中世・近世の遺構が多く検出された。特に備前・常滑窯の大甕を据えた埋甕またはその抜き取り坑が35基確認され（SX07）、中世の奈良町の様相を知る貴重な資料となっている。今回の発掘区は、第4次調査発掘区の西側に隣接して設定し、埋甕遺構SX07の全容の解明が期待された。

Ⅱ　検出遺構

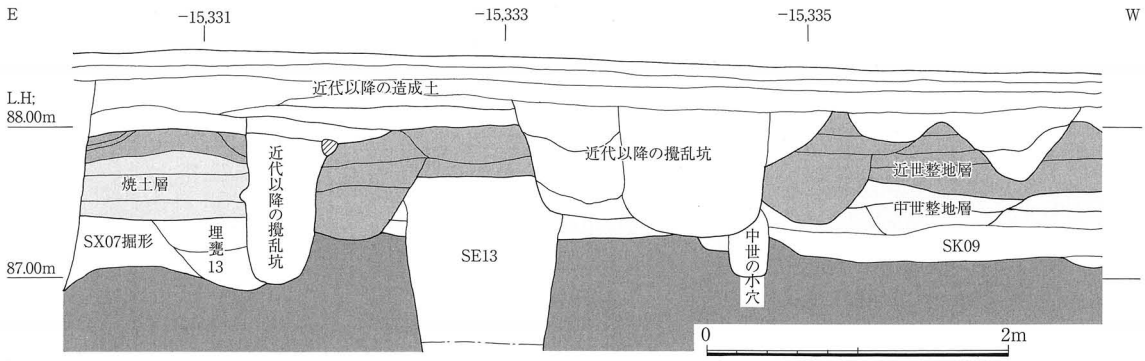
発掘区内の層序は、細かな層が幾層も重なり複雑であるが、大きくみると、上から近代以降の造成土（約0.3m）、近世の整地土（約0.5m）、中世の整地土（約0.2m）があり、地表下約1.0mで黄橙色粘土の地山となる。地山の標高は約87.2mである。なお、発掘区西側では中世の整地土は存在せず、地山の直上が近世の整地土である。また、後述する発掘区南東の埋甕群SX07は厚さ約0.4mの焼土層で覆われているが、SX07が廃棄された後の整地土と考えられる。遺構面はいくつかあるが、近世の整地土上面と地山上面で遺構を検出した。

検出遺構には、井戸10基と、土坑、柱穴が多数ある。中世から近代までの各時期のもので、多くは近世のものである。また、古代の遺構はなかったが、中世以降の各時代の遺構からは古代の遺物が混入して出土した。以下、各時代に分けて記す。なお、遺構番号は第4次調査からの通し番号としたので、ここに記載していない遺構については既報告を参照していただきたい。

鎌倉・室町時代の遺構　SK09は、発掘区南東部に広がる東西9.0m以上、南北7.0m以上、深さ約0.25mの平面不整形な土坑である。暗灰褐色土とともに大量の古代の瓦で埋まっており、廃瓦を投棄したものと考えられる。9世紀から12世紀中頃までの土器が出土した。発掘区南側につづくが、第4次調査Bトレンチまでは及んでいない。東側はSX07で破壊されているが、後述する理由で、第4次調査でSX07の北及び東でみられた、SX07の掘形と考えた落ち込みがこれの掘形と思われる。したがって、SK09は東西16mで、南北8m以上の規模である。

SK10は、平面不整円形の土坑で、東西約3.4m、南北約2.7m、深さ約1.2mである。掘形は擂鉢状で、一辺約1.0m、厚さ約0.5mの扁平な石が3個出土した。3個ともに三笠安山岩で、基壇建物の礎石に使用されていたものが棄てられたと考えられる。12世紀末から13世紀初めの土器が出土した。南側はSE26によって破壊されている。

SK11は、東西約1.5m、南北約1.3m、深さ約0.9mの土坑である。北側はSE18によって破壊されている。検出面から深さ約0.3mまでのところでは、完形を保った瓦器と土師器が、まとまっ



発掘区南壁土層図　1/50

発掘区全景（東から）

発掘区全景（南から）

て出土した。13世紀前半のものである。

SK12は、東西約1.1m以上、南北約1.5m以上、深さ約0.1mの土坑で、13世紀前半の土器がまとまって出土した。南側はSK15で、西側はSE28によって破壊されている。

SE13は、直径約1.2mの平面円形の井戸で、深さ約0.4mまで掘削したが、井戸枠はなかった。13世紀後半の土器が出土した。

SK15全景（北から）

SK14は、平面がやや不整形な円形の土坑でである。直径約2.0m、深さ約0.9mであり、掘形は擂鉢状である。14世紀前半の土器とともに、製墨用と考えられる土師器の丸底の鉢が数片出土した。この土器はGG第38次調査（平成5年度）のSK03からも出土している。

SK15は、東西約1.3m、南北約0.9m、深さ約0.5mの平面楕円形の土坑である。東縁に人頭大の石を南北方向に4石列べているが、土坑に伴うものかは不明である。坑内には大量の土師器皿が廃棄され、200枚近くが完形を保った状態で出土した。また、土器とともに銅製の小椀が1点出土した。15世紀中頃から後半のものと考えられる。

SX07は、第4次調査発掘区から今回の発掘区にかけて広がる埋甕遺構である。第4次調査分と合わせて39基以上の埋甕または抜き取り坑を検出した。埋甕または抜き取り坑、据え付け坑に、新たに1～39の番号を付して整理したところ、SX07は大きく2つの埋甕群に分かれることがわかった。第1群は埋甕1～12で、第2群は13～39である。

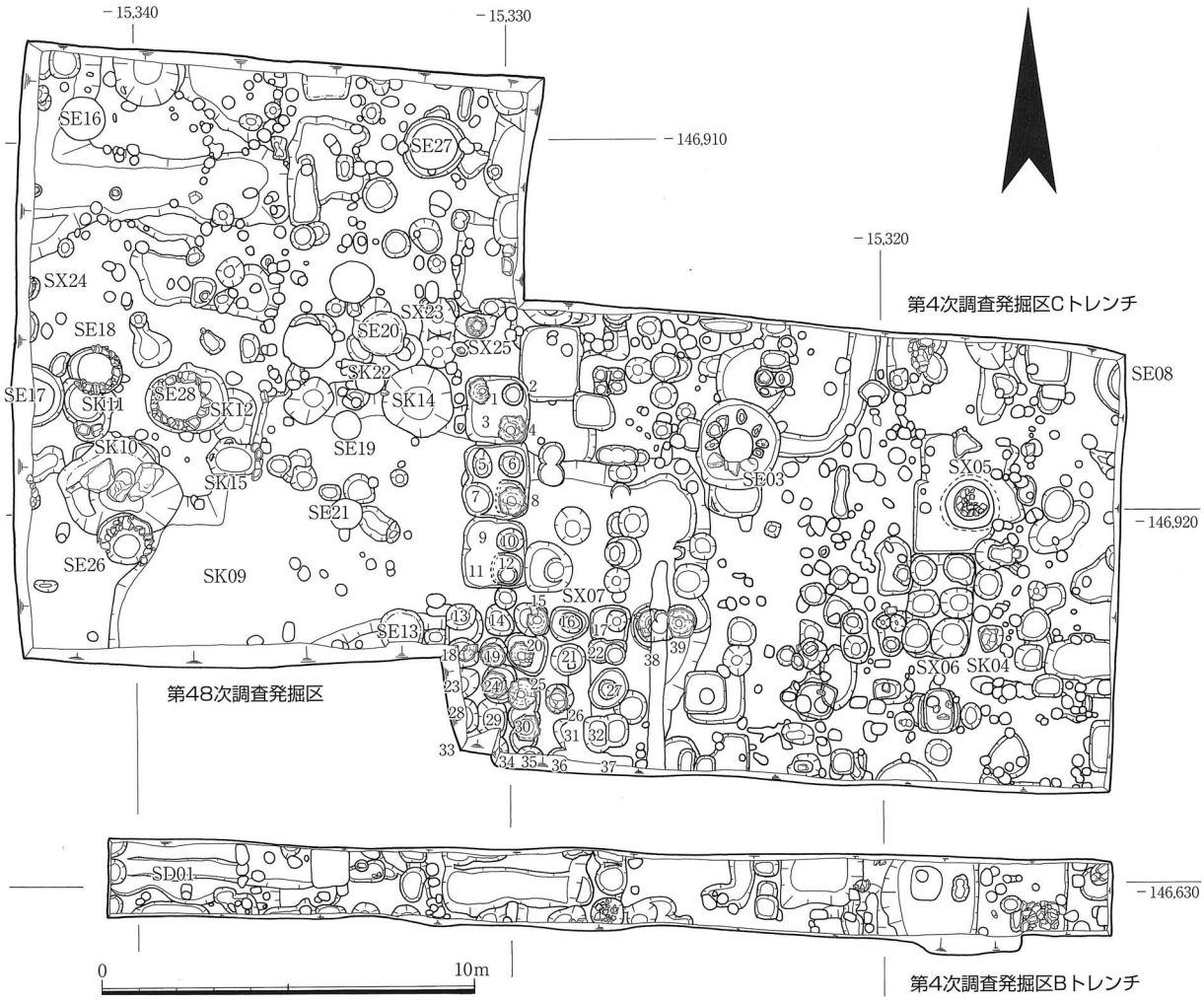
第1群は、一辺約3.5mの方形の掘形に甕を4個据え付けるもので、これを南北に3組列べている。掘形は最も残りの良い埋甕1の北側では、深さ約0.5mである。したがって、個々の甕には掘形がないが、掘形の底には甕底の形状に合った、浅い窪みがある。埋甕1・4・8には、甕の下半部が残存している。埋甕10の抜き取り坑には、甕の破片と拳大の石が放り込まれている。なお、埋甕5と7、7と9の抜き取り坑の間に重複して、新しい径約0.4m、深さ約0.1～0.2mの平面円形の土坑が2箇所みられたが、深さが浅いことからみて、いずれも甕の抜き取り坑とは考えがたい。

第2群は、東西約5m、南北約5mの範囲に、埋甕を東西5列、南北5列、計25個を配置し、最も北側の列の東側にさらに2個の埋甕を東西に列べている。この東側の2個については、掘形の底の

SX07埋甕一覧表

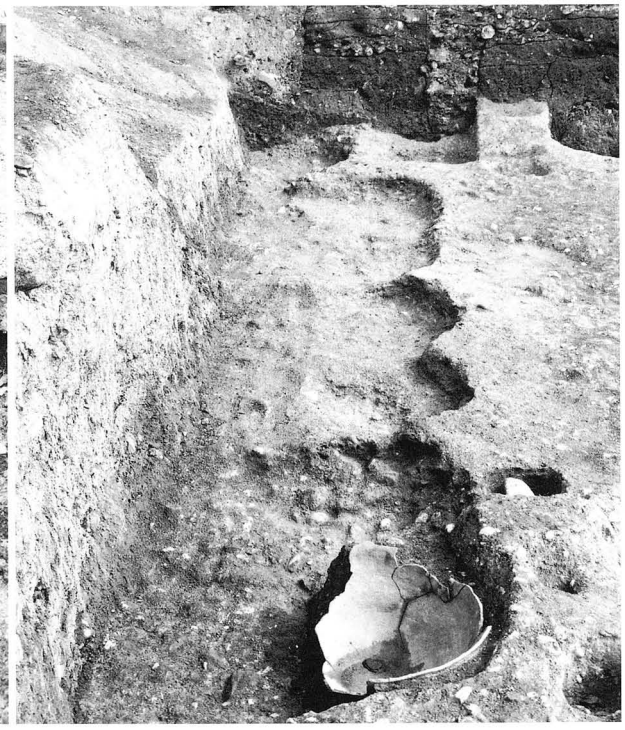
甕No.	種類	調査次数	備考	甕No.	種類	調査次数	備考	甕No.	種類	調査次数	備考
1	常滑窯	第48次	底部に補修痕	14	（備前窯）	第48次		27		第４次	
2		第４次		15	常滑窯	第４次		28	（備前窯）	第48次	
3	（備前窯）	第48次		16		第４次		29	（常滑窯）	第48次	
4	常滑窯	第４次		17		第４次		30	備前窯	第４次	
5	（常滑窯）	第48次		18	常滑窯	第48次		31		第４次	攪乱で一部破壊
6		第４次		19	備前窯	第48次		32		第４次	
7	（常滑窯）	第48次		20	常滑窯	第４次		33	（常滑窯）	第48次	
8	常滑窯	第４次		21		第４次		34		第４次	
9	（備前窯）	第48次		22		第48次		35		第４次	
10		第４次		23	（常滑窯）	第48次		36		第４次	攪乱で一部破壊
11	（備前窯）	第48次		24	備前窯	第48次		37		第４次	攪乱で破壊
12		第４次		25	常滑窯	第４次		38	常滑窯	第４次	
13	（備前窯）	第48次		26	備前窯	第４次		39	常滑窯	第４次	

（）は抜き取り坑出土の破片



遺構平面図　1/250

埋甕SX07（北から）



埋甕SX07（北から）

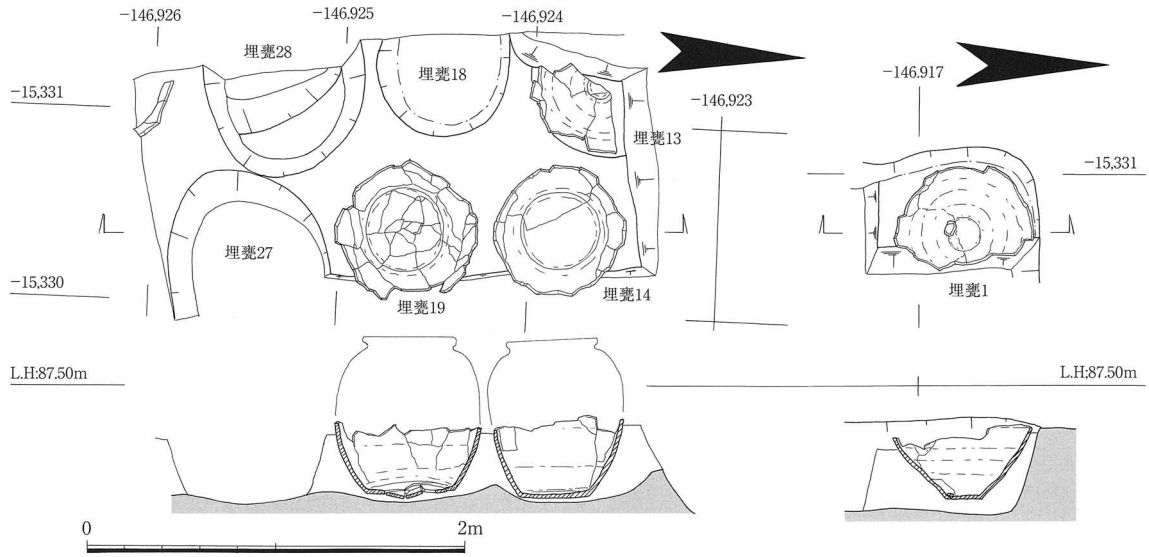
高さが他のものより0.1～0.2m高いことから、別の群の可能性もあるが、福井県一乗谷朝倉氏遺跡の例[1]などでは、方形の埋甕列からはみ出したものもひとつの群中にあることから、第2群に含めた。第1群と同様に個々の甕には掘形がなく、群全体がひとつの掘形に納まっていることが、土層断面からわかる。埋甕18のすぐ西側では地山がSX07の底より0.4m高いことから、掘形は埋甕の範囲よりもやや大きいものと考えられる。また、掘形の底には甕底の形状にあった、浅い窪みがある。埋甕18～20・24～26・30・38・39には甕の下半部が残存する。なお、埋甕16・17・21・22の抜き取り坑の周辺には、重複して平面円形の土坑がいくつかあるが、いずれも甕の抜き取り坑かどうかは不明である。

第1群と第2群には重複関係がなく、ともに埋甕内や抜き取り坑には、甕の破片とともに焼土と炭で埋まっているので、これらは同時期に存在し、焼失したと考えられる。これらの他にも第4次調査では、いくつかの平面円形の土坑があり、これらを埋甕の抜き取り坑と考えると、さらに別の埋甕群が想定できるが、群としてのまとまりを確認するには至っていない。なお、第4次調査でSX07の掘形と考えた東西9m以上、南北8m以上の掘り込みが、SK09の東半部分と想定できる理由は、第1群の埋甕の北端がこれよりさらに北側にあること、第2群の埋甕の底下にSK09の埋土が残っていること、北縁がSK09の北縁とつながることなどからである。

埋甕は、第1・2群いずれも下半部を残し、上半部が破壊されている。個々の埋甕については、表にまとめた。埋甕はすべて常滑窯、備前窯のいずれかである。甕の外面には、漆が染み込んだ布が張り付けられているものが多くある。補修痕であろう。埋甕1の甕（常滑窯）の内面底には小さな穴が開いており、それを甕の破片と漆で補修している。また、甕の多くは肩部から口縁部にかけて煤が付いており、これは地上に露出していた部分に火災の際に付着したものと考えられる。復原すると、約0.7m埋められていたことが想定できる。さらに甕の肩部には、外側から打ち割られた痕があるものもある。

埋甕の年代は、常滑窯の甕が中野編年の8型式[2]にあたる14世紀後半で、備前窯の甕が間壁編年のⅣ期[3]にあたる15世紀である。遺構の年代は、SX07を覆う焼土層から16世紀の土師器羽釜、

1）一乗谷朝倉氏遺跡35次調査SX1388 など。福井県立朝倉氏遺跡資料館編『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅺ』1980。
2）中野晴久「常滑・渥美」『概説中世の土器・陶磁器』1995。
3）間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート1～5」『倉敷考古館研究集報1・2・5・18』1966～68・1984。



埋甕SX07平面及び立面図　1/40

信楽窯の擂鉢が出土したことから、15世紀には造られ、16世紀には焼失したと考えられる。

江戸時代以降の遺構　SE16は、掘形が直径約1.0mの平面円形で、深さ約3.2mである。井戸枠はない。掘形は検出面から約0.6mまでは垂直に掘り込まれているが、そこから下は壁面が崩落して袋状になる。埋土は大きく3層に分かれ、上から焼土を含む灰褐色土（約0.6m）、淡灰褐色土（約1.4m）、暗灰褐色土（約1.2m）であり、中層からは大量の17世紀初めの土器とともに鞴羽口、鉄滓が出土した。なお、井戸と考えたが、ほとんど湧水はなかった。

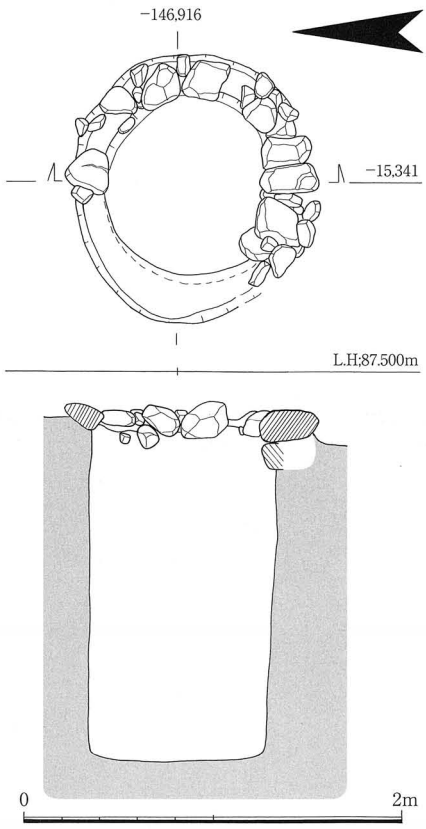
SE17は、平面円形掘形の井戸である。掘形は垂直に2段に掘り込まれている。上段は直径約1.6mで、深さ約0.5mである。下段は直径約1.0mで、深さ約1.0mまで掘削した。井戸枠はなかった。17世紀前半の土器が少量出土した。

SE18は、平面円形掘形の井戸である。掘形は垂直に2段に掘り込まれている。上段は直径約1.3mで、深さ約0.1mある。下段は直径約1.0mで、深さ約1.8mである。上段には内法約1.0mの石組が1段分残っているが、下段には井戸枠がなく、素掘りのままである。黄橙色粘土の地山を掘り抜いている下段の壁面は堅固であるが、上段掘形の壁面は中世以降の整地土であり、その脆弱な部分のみ石組があるようである。井戸内には石組の石が多量に転落しており、17世紀前半の土器が少量出土した。SE16と同様に湧水はなかった。

SE19は、直径約0.75mの平面円形掘形の井戸で、深さ約2.0mである。堀形は垂直に掘り込まれ、井戸枠はなかった。鉄製品をはじめ坩堝、鉄滓などの鋳造関連遺物とともに、17世紀前半の土器が多く出土した。これもまた、湧水はなかった。

SE20は、直径約1.2mの平面円形掘形の井戸で、深さ約1.0mまで掘削した。掘形は垂直に掘り込まれ、井戸枠はなかった。17世紀前半の土器が少量出土した。

SE21は、直径約0.9mの平面円形掘形の井戸で、深さ約0.8mまで掘削した。掘形は垂直に掘り



SE18平面及び断面図　1/50

SE18全景（西から）

込まれ、井戸枠はなかった。上層は焼土で埋まっている。17世紀前半の土器が出土した。

SK22は、直径約0.6mの平面円形の土坑で、深さ約0.7mある。掘形は垂直に掘り込まれ、17世紀前半の土器が出土した。

SX23は、直径約0.9mの平面円形の土坑で、南北に2つ並んでいる。掘形は底の広い擂鉢状で、おそらく甕2個体を埋設していたものと思われる。16～17世紀の土器が少量出土した。

SX24は、発掘区西壁で検出した埋甕遺構で、直径約0.6m、深さ約0.1mの平面円形の掘形内に瓦質土器の深鉢を1個埋設する。地山面より0.4m上の整地土上面から掘り込まれている。深鉢内から17世紀前半の土器が出土した。

SX25は、東西約0.7m、南北約1.1m、深さ約0.45mの平面楕円形の掘形に、瓦質土器深鉢1個を埋設した埋甕遺構である。深鉢はほぼ完存しており、口径約60㎝、器高約45㎝である。底は打ち欠かれ、直径約22㎝の円形孔がある。深鉢内から17世紀前半の土器が少量出土した。

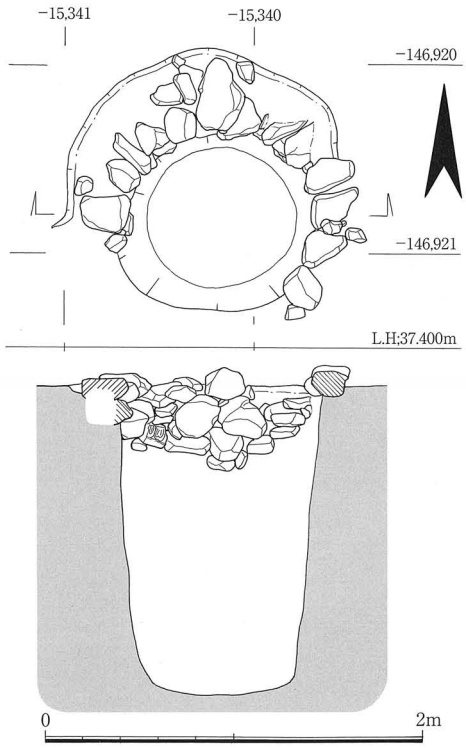
SE26は、平面円形掘形の井戸で、掘形は2段に掘られている。SE18と同様に、上段に平面円形の石組が1段残り、下段には井戸枠がなく、素掘りのままである。上段は直径約1.5mで、深さ約0.1mあり、石組の内法は約1.0mである。下段は直径約1.0mで、深さ約1.5mである。SK10と重なっている北側の壁面は脆弱なため、その部分には数段の石組がある。石組の石の1つに五輪塔の台座が使われている。湧水はなかった。17世紀中頃の土器が多く出土した。

SE27は、平面円形掘形の井戸で、掘形は2段である。上段は直径約1.7m、深さ約0.3mである。下段は直径約1.2mで、深さ約0.9mまで掘削した。井戸枠はなかった。18世紀の土器が出土した。

SE08は、第4次調査Cトレンチの北東隅の井戸である。半分以上が発掘区外にあるが、平面円形掘形と思われる。深さ約0.7m以上あり、18世紀末から19世紀前半の土器が出土した。

SE28は、内法径約1.1mの平面円形石組井戸である。深さ約0.4mまで掘削した。明治時代以降のものである。

（中島和彦）



SE26平面及び断面図　1/50

SE26全景（南から）

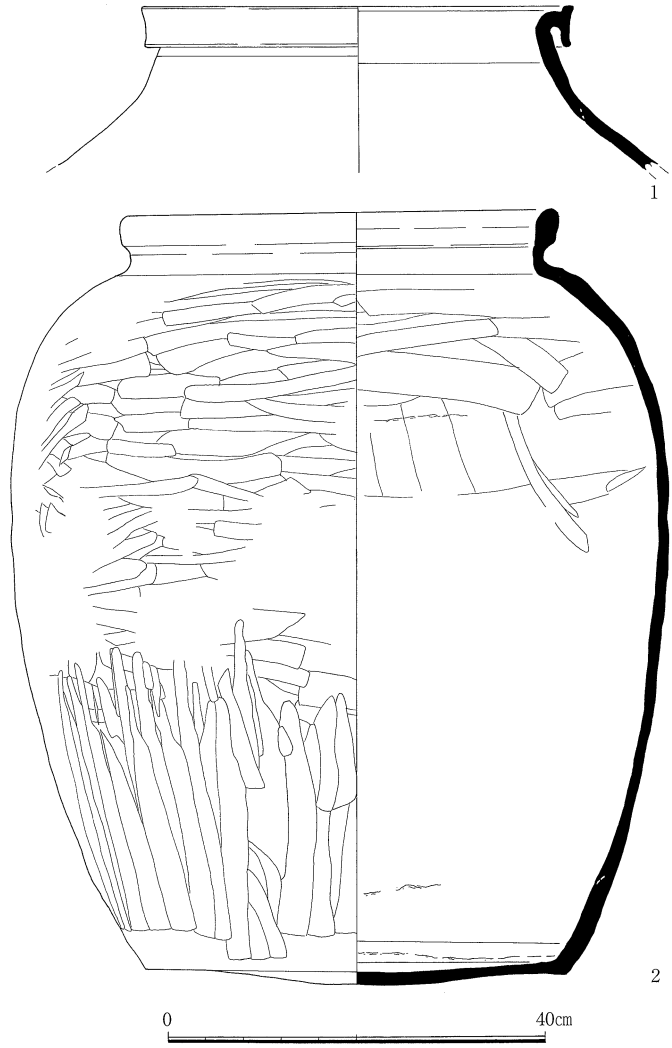
Ⅲ　出土遺物

古代から近代までの各時期の遺物が遺物整理箱約187箱分出土した。土器・土製品は古代から近代のものが遺物整理箱77箱分出土した。SX07及び近世の井戸からの出土量が多い。瓦は遺物整理箱で110箱分出土した。ほかに、金属製品、木製品、石製品や鍛冶関連遺物がある。

土器・土製品　SX07、SK15、SE16出土の土器・土製品について記す。

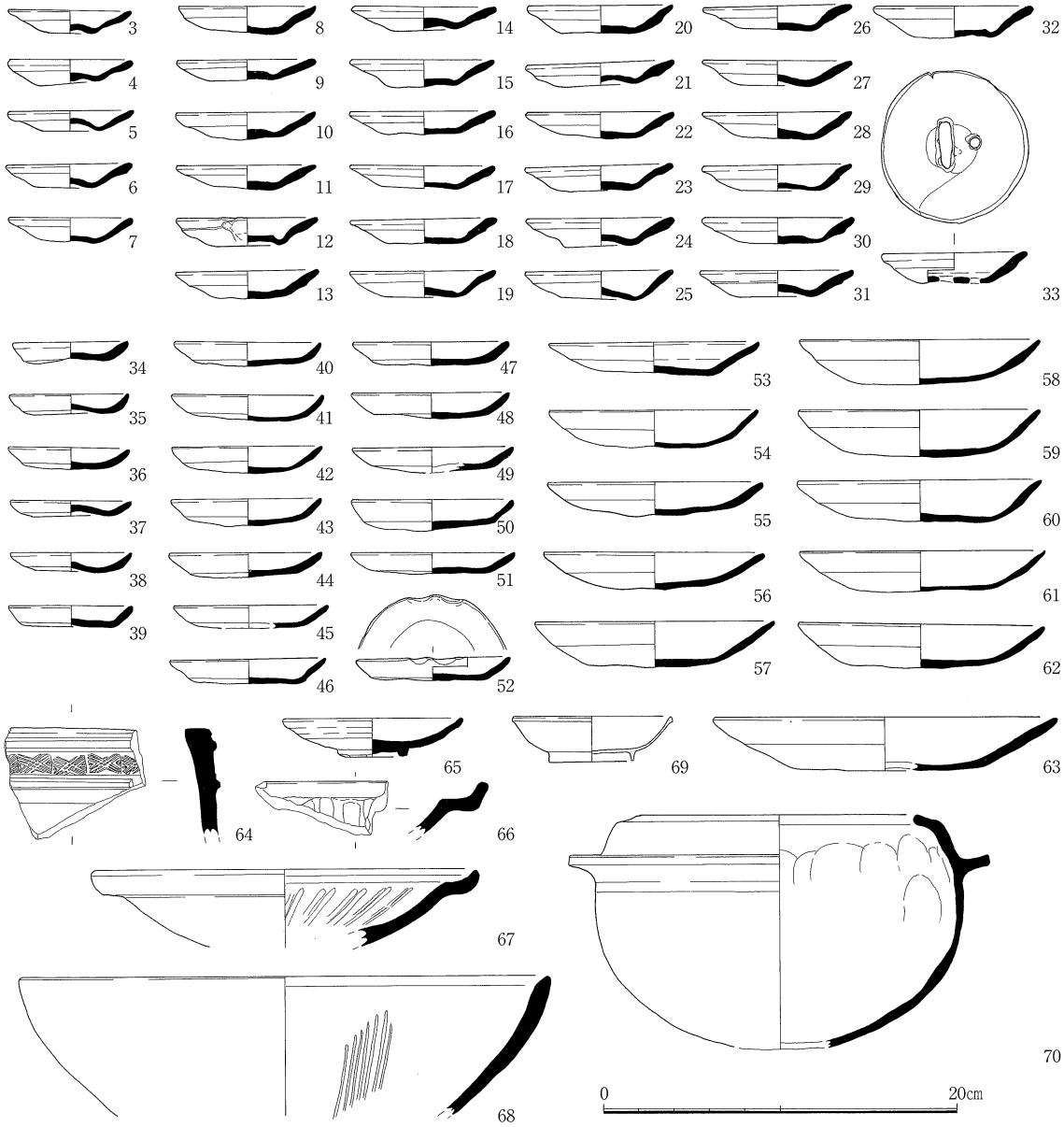
SX07出土土器には、土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・深鉢、国産陶器甕・擂鉢、青磁盤・椀があり、遺物整理箱27箱分である。ほとんどが国産陶器の常滑窯、備前窯の甕の破片である。1は常滑窯の甕で、埋甕7から出土した。口径45.3cmで、口縁縁帯部は下方に大きく垂れ下がり、その幅は約4.0cmである。外面には自然釉が厚く掛かる。また、外面の肩部から体部にかけて押印紋が2ないしは3条施されている常滑窯の甕もある。これらの常滑窯の甕は中野編年の8型式[4]にあたり、14世紀後半のものと考えられる。2は備前窯の甕で、埋甕19から出土した。復原口径は約46.4cm、器高約81.9cm、底径約44.4cmである。口縁部は直立気味で外側に玉縁を作りだす。体部外面は丁寧に横方向の板目のないハケ調整し、その後、下半部にのみ縦方向の板目のないハケ調整している。内面はナデ調整で、上半部は粗い板目のないハケ調整をする。焼成は良好で、赤褐色に焼き上がっている。他の備前窯の甕も同様の特徴である。間壁編年のⅣ期[5]にあたり、15世紀のものと考えられる。国産陶器には他に信楽窯の擂鉢がある。内面の擂目は1単位3条と4条とがある。土師器皿は奈良Ⅲ期とⅣ期[6]のものが、羽釜は大和H型とI型[7]が出土した。

SK15出土土器には、土師器（3～63・70）、瓦質土器（64～68）、国産陶器、輸入陶磁（65～67）がある。総破片数1,751点が出土した。土師器皿の比率が高く、全体の9割を越えている。このうち完存しているものが216枚あり、これは1割強である。皿は胎土の色調によって大きく2群に分かれ、赤色または褐色系のもの（3～33）と、白色または灰色系のもの（34～63）とがある。赤色系のものには、口縁部を強くヨコナデ調整するために、内面の底部と口縁部の境が窪むものや、やや上げ底状のものがある。口径7.0cm前後のものと、8.3cm前後のものの大小2種類に分か



SX07出土土器　1/8

4）前掲書2)。
5）前掲書3)。
6）森下恵介・立石堅志「大和北部における中近世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財センター紀要1985』1986。以下、土器の編年は同書を参照。
7）菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所、1983。以下、羽釜の分類は同書を参照。



SK15出土土器　1/4

れる。33の底部には焼成後の穿孔が2箇所みられる。白色系のものは、やや広い平坦な底部で、そこから口縁部に緩やかな屈曲でたちあがる。胎土は赤色系に比べて精良である。口径は7.0㎝から19.5㎝まで数種類に分かれる。5の口縁部には片口が1箇所ある。赤色系、白色系いずれも口縁部に油煙の痕跡があるものが少量ある。また、土師器皿の墨書土器が8点ある。口縁部破片の内外面にそれぞれ同じ数字が1字ずつ「一」、「三」、「四」、「五」、「七」、「八」、「九」、「十」と墨書されている。羽釜は大和H_3型で、70は体部を無紋のタタキで成形する。64は円形の瓦質土器深鉢で、口縁部外面に2条の突帯を貼り付け、その間を斜格子紋のスタンプを連続して押捺する。68は瓦質土器擂鉢で、擂目は1単位7条である。65は白磁皿で、外面の体部下半が露胎である。高台裏には抉りが4箇所あり、見込み部には重ね焼きの痕跡がある。66と67は龍泉窯系の青磁盤で、いずれも内面に鎬紋がある。これらは奈良Ⅳ期前半にあたり、15世紀後半頃と考えられる。

SE16出土土器は、17世紀前半の良好な一括資料である。土師器（71～186・222～225）、瓦質土器（188～202）、国産陶器（203～218・221）、輸入陶磁器（219・220）、犬形土製品（187）が

ある。総破片数3,604点が出土した。

土師器皿は、大きくa類（71～117）とb類（118～182）の2種類に分けられる。a類は浅く、口縁部に「の」字状に強くヨコナデ調整することにより底部と口縁部の境を屈曲させており、凹線状に浅く窪んでいる。胎土は砂粒が多く、やや粗い。色調は黄橙色系で、口径は6.6～7.3cmと8.0～8.7cmの2種類がある。116と117の底面に焼成後に穿孔しており、117の内面の孔周辺には油煙が付着している。b類は、やや丸い底部から緩やかな屈曲で口縁部にたちあがる。胎土は砂粒が少なく、a類に比べて精良で、色調は灰白色から灰黄色系である。口径は6.3cmから12.3cmまでの数種類があり、9.0cm前半前後のものが最も多い。口縁部は「の」字状のヨコナデ調整をし、口縁部全周には煤が付くものもある。また墨書土器が2点ある。181は外面底部に梵字を4字（「 」（キリーク）、「 」（サク）、「 」（サ）、「 」（カ））と、182は内面底部に「ほ□いれもの」と記す。183は京都系の土師器皿で、内面の底部には凹線状の圏線があり、口縁部には内傾する端面がある。184はやや深めの皿、185は大型の皿で両者とも1個体しか出土していない。ともに胎土、焼成、調整手法は皿a類に類似している。186は土師器壺である。外面体部から底部には調整がなく、内面と口縁部はナデ調整である。土師器羽釜はすべて大和I型で、法量には大中小の3種類がある。224は法量が大きいもので、口径20.7cm、器高16.1cm、鍔径24.5cmであり、223は中位のもので、口径16.8cm、器高11.1cm、鍔径19.8cmである。小さいものは、鍔径約15.0cmである。いずれも体部を無紋のタタキで成形し、内面を部分的に板目のないハケ調整している。土師器鍋の法量には大小2種類がある。225は大きく口径31.7cm、222は小さく口径21.4cmである。体部は無紋のタタキで成形し、225は内面をハケメ調整している。

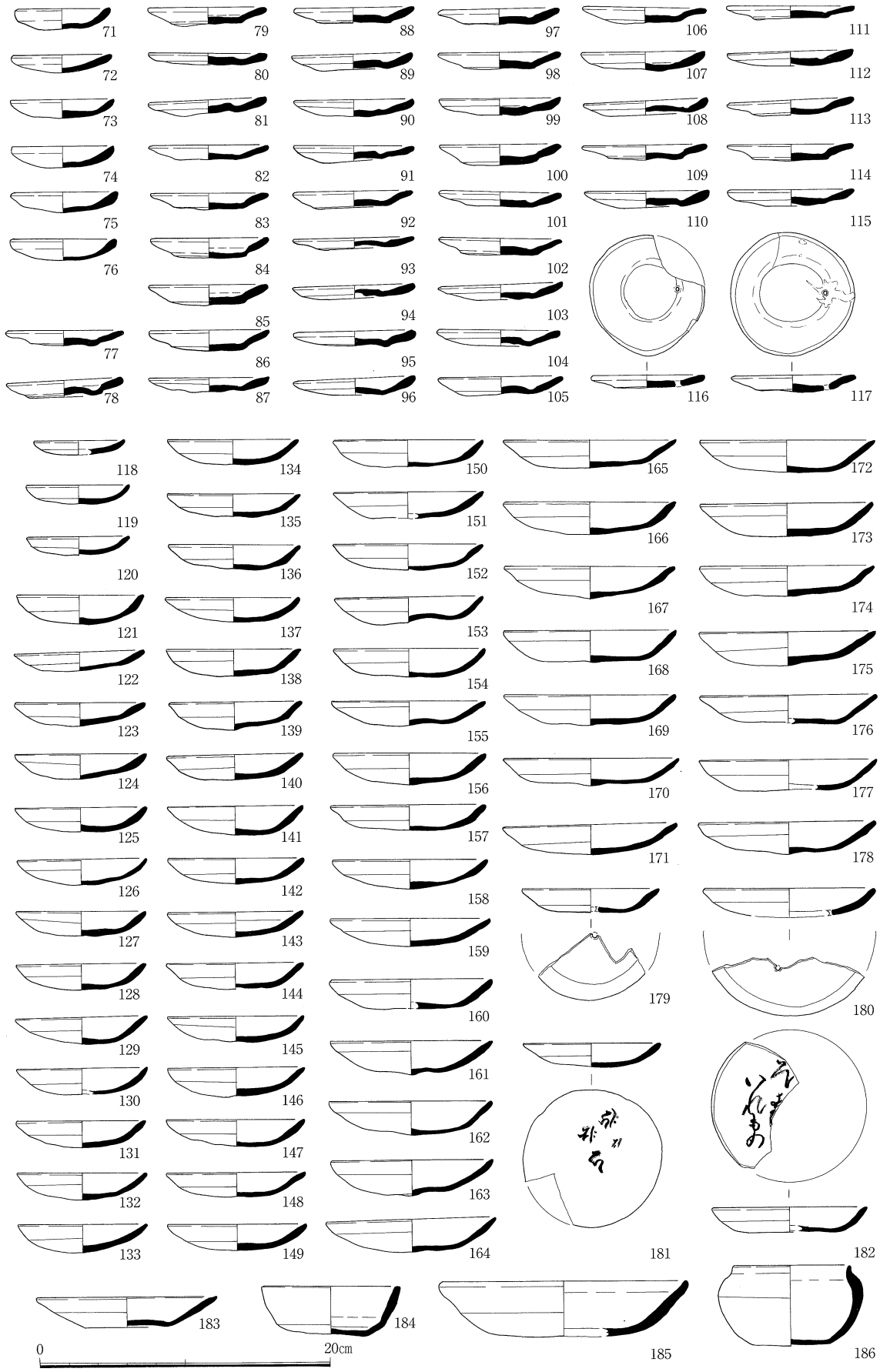
瓦質土器は、擂鉢と深鉢または浅鉢が大半で、他に花瓶や羽釜などの特殊な器種が出土している。189～191は小型浅鉢で、外面に菊花紋と梅花紋の単体のスタンプを押捺する。花瓶（193）は胴部の2条の沈線間に花紋の単体スタンプを押捺する。頸部には沈線でアーチ形の窓を4箇所描き、中に菱形紋と花紋の単体スタンプを押捺する。擂鉢の法量には大中小の3種類がある。188は小さく口径15.9cm、器高7.3cm。195は中位で口径22.2cm、器高10.7cm。196は大きく口径31.9cm、

SK15出土土器器種構成表

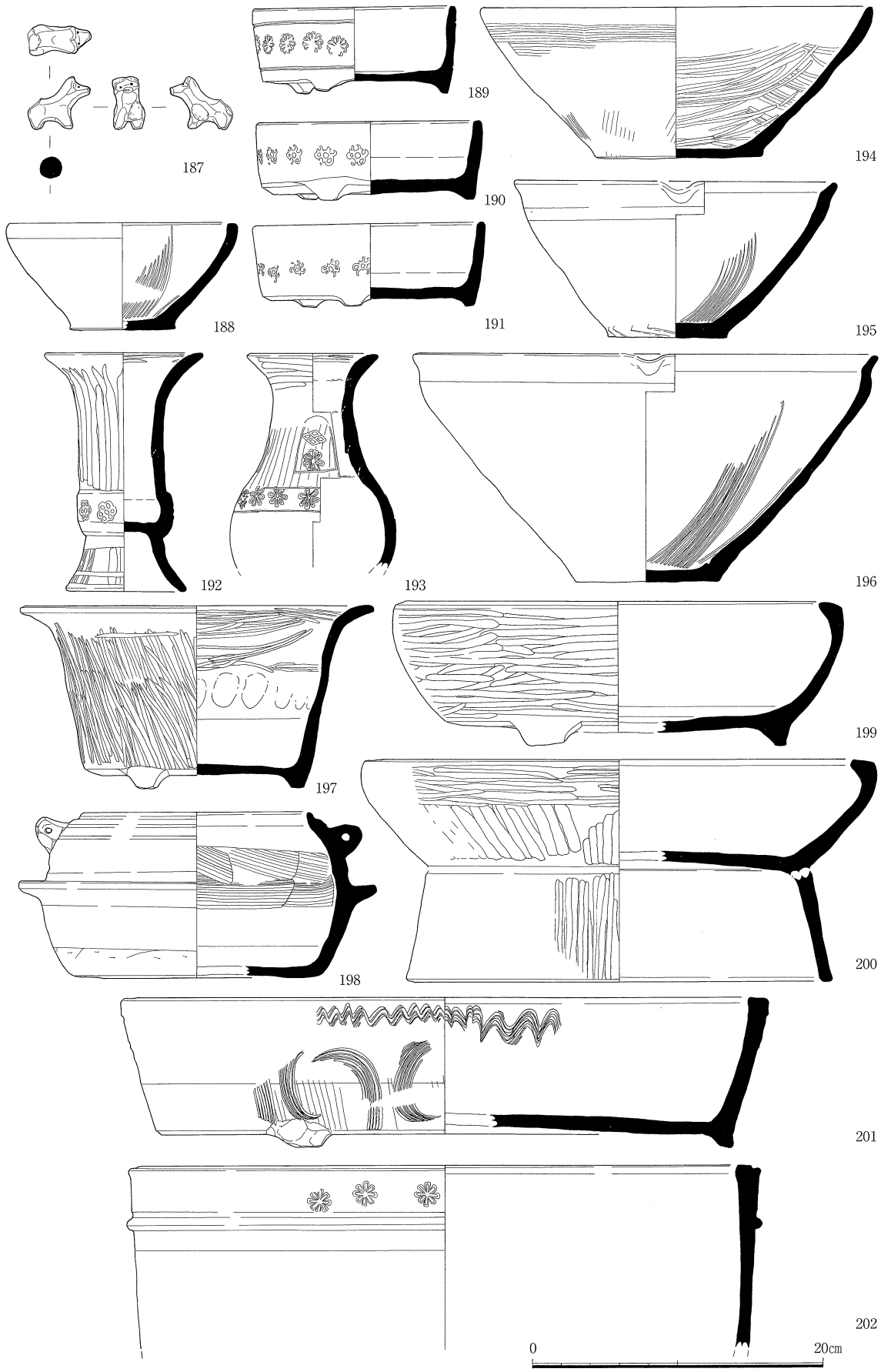
種類	産地等	器種	出土点数	出土比率
土師器		皿	1635	93.4%
		（赤色系）	1229	70.2%
		（白色系）	401	22.9%
		（他）	5	0.3%
		羽釜	60	3.4%
	小計		1695	96.8%
瓦質土器		擂鉢	14	0.8%
		浅鉢・深鉢	26	1.5%
	小計		40	2.3%
国産陶器	瀬戸美濃窯	椀・皿	2	0.1%
	信楽窯	擂鉢	3	0.2%
	備前窯	壺・甕	2	0.1%
	常滑窯	壺・甕	3	0.2%
	産地不明	壺・甕	2	0.1%
	小計		12	0.7%
輸入陶磁器	青磁	盤	2	0.1%
	白磁	皿	2	0.1%
	小計		4	0.2%
合計			1751	100.0%

SE16出土土器器種構成表

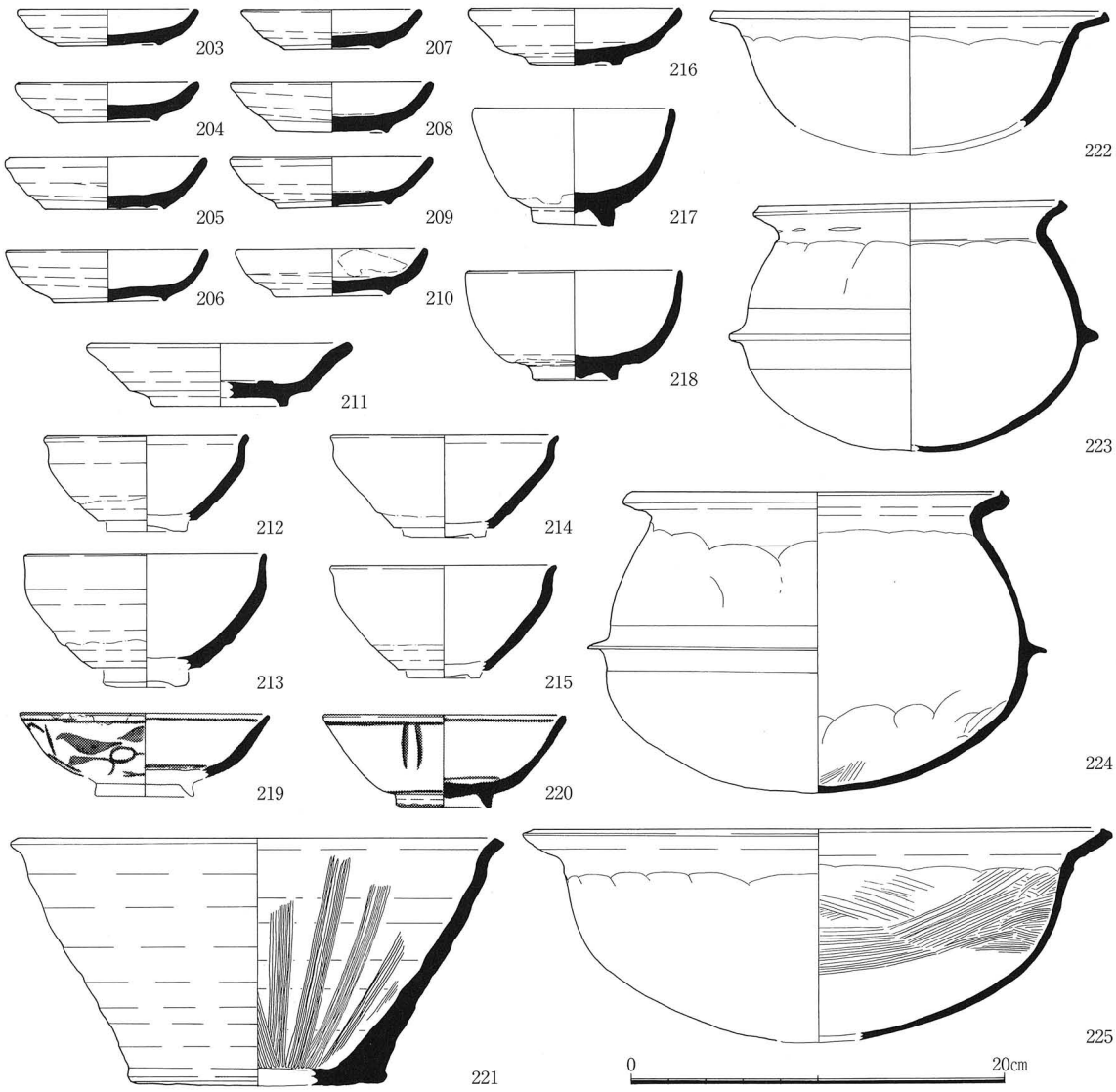
種類	産地等	器種	出土点数	出土比率
土師器		皿	1331	36.9%
		（a類）	410	11.4%
		（b類）	906	25.1%
		（京都系）	8	0.2%
		（他）	7	0.2%
		壺	5	0.1%
		羽釜	974	27.0%
		鍋	96	2.7%
		不明	14	0.4%
	小計		2420	67.1%
瓦質土器		擂鉢	164	4.6%
		捏鉢	40	1.1%
		浅鉢	65	1.8%
		深鉢	320	8.9%
		鉢浅深不明	409	11.3%
		壺	1	0.0%
		花瓶	5	0.1%
		風炉	4	0.1%
		蓋	1	0.0%
		羽釜	8	0.2%
	小計		1017	28.2%
国産陶器	肥前系窯	椀	17	0.5%
		皿	4	0.1%
		壺・甕	4	0.1%
		小計	25	0.7%
	瀬戸美濃窯	椀	39	1.1%
		皿	25	0.7%
		鉢	1	0.0%
		壺・甕	4	0.1%
		小計	69	1.9%
	信楽窯	壺・甕	1	0.0%
		擂鉢	13	0.4%
		小計	14	0.4%
	備前窯	鉢	1	0.0%
		壺・甕	20	0.6%
		小計	21	0.6%
	常滑窯	壺・甕	1	0.0%
	産地不明	壺・甕	6	0.2%
	小計		136	3.8%
輸入陶磁器	青磁	椀	1	0.0%
	白磁	皿	6	0.2%
	青花	椀	17	0.5%
		皿	6	0.2%
		小計	23	0.6%
	赤絵	椀	1	0.0%
	小計		31	0.9%
合計			3604	100.0%



SE16出土土器(1)　1/4



SE16出土土器(2)　1/4



SE16出土土器(3)　1/4

器高15.5cmである。内面の擂目は188が1単位10本、195が1単位6本、196が1単位13本である。羽釜は鉄釜を模倣したもので、口縁部外面に一対の耳がある。外底面はケズリ調整している。202は深鉢で、口縁端部から下に4cmの外面に凸帯を貼り付け、その間に花紋の単体スタンプを押捺する。

203～211は瀬戸美濃窯系の皿で、203～206は灰釉を全面に施釉し、207～209は見込み部のみ釉を円形に掻き取る。210と211は鉄釉を全面に施釉し、中に灰釉を斑状に施釉している。211の見込み部には幅0.8cm、高さ0.2cmの凸帯が環状にめぐり、この上面は露胎で他のものが溶着した痕跡がある。瀬戸美濃窯系の椀212～215は鉄釉を施釉している。216～218は肥前系窯の皿と椀で、灰白色の釉を施釉している。221は信楽窯の擂鉢で内面には1単位6本の擂目があり、見込み部には格子状に擂目がある。内外面は赤褐色で、焼成は良い。

219と220は漳州窯系の青花椀で、いずれも見込み部の釉を環状に掻き取る。220の高台部は露胎で、畳付部は研がれ、平滑である。他に景徳鎮窯系の青花がある。

犬形土製品（187）は土師質で、上半部が淡黄橙色、下半部が黒灰色である。左前足と尾を欠く。

SE16の出土土器は、梵字の墨書土器や花瓶などの仏具関係の瓦質土器が出土するなど、寺院との深い関係が考えられる。

軒瓦の内訳

調査次数	軒丸瓦										軒平瓦									軒桟瓦
	素弁十弁蓮華紋	6201			6282	6291	型式不明	平安時代以降			6572	6641	6661				6732	型式不明	平安時代以降	
		Aa	Ab	A	E	Ab		文字紋	巴紋	その他	種別不明	E	B	Da	Db	種別不明	J			
GG 第4次		1		2			1	1	13	2	1	1			3				7	
GG 第13次		4	1	3	1		1	1	9	1				2	4	1			22	
GG 第15次		1							3										3	2
GG 第23次									1											
GG 第48次	1	7		3		1	3		8	8		1	1	5	2	3	1	1	11	2

瓦　大半が丸瓦、平瓦、桟瓦の破片である。SK09から大量に出土した。軒瓦の内訳は食堂周辺の発掘区の出土軒瓦とともに表に示した。このうち、SK09からは軒丸瓦の素弁十弁蓮華紋が1点、6201Aaが6点、6201Aと6291Abが各1点、型式不明が2点、軒平瓦の6641Eが1点、6661Daが4点、6661種別不明と型式不明が各1点、平安時代の均整唐草紋軒平瓦が1点出土した。食堂周辺をみると、奈良時代では、元興寺創建瓦である軒丸瓦6201Aと軒平瓦6661Dの出土点数は多いが、それ以外のものは少ない。素弁十弁蓮華紋軒丸瓦は飛鳥寺Ⅰ型式と、型式不明軒丸瓦のうち1点は飛鳥寺XIV型式と同笵と思われる[8]。平安時代以降では、軒丸瓦の大半が巴紋で、蓮華紋は2点のみである。文字紋軒丸瓦は2点とも「興福寺」銘である。軒平瓦は大半が均整唐草紋である。

金属製品　銅椀、蛭藻金、銭貨、鉄釘がある。

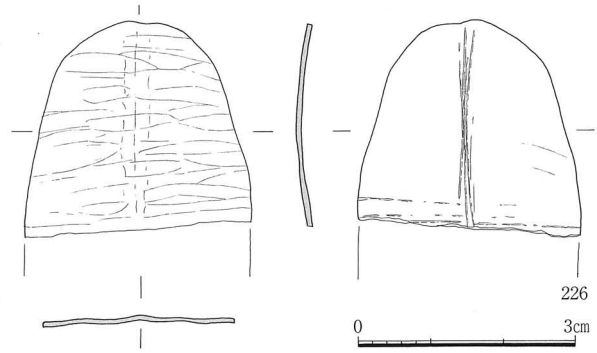
銅椀（69）は、口径9.0cm、器高2.6cmである。鋳造品で、いわゆる六器である。SK15から出土。

蛭藻金（226）は、端部の破片であるが、幅3.1cm、厚さ0.07cmあり、長さ3.0cm分が残っている。重さ8.44ｇである。表面には横方向の槌目が全面に施され、裏面は槌目が無く平滑である。裏面には折り取り面にそって横方向のタガネ痕がある。中央にも縦方向のタガネ痕があり、表面では縦方向の稜線となる。タガネで印をつけた後、一定の大きさ（重さ）に折り取って使用したと考えられる。蛍光X線分析[9]による蛭藻金の成分については表に記した。SX07廃棄後の整地土層から出土したが、その上面からSE19が掘り込まれていることから、16～17世紀初め頃の蛭藻金と考えられる。

蛭藻金蛍光X線分析表

分析部位	Au（金）	Ag（銀）	Cu（銅）	Pb（鉛）	Fe（鉄）
表　面	84.2	13.4	2.2	－	0.1
裏　面	84.3	13.4	2.1	－	0.1
断面切口	81.2	14.3	3.2	0.1	1.2

銭貨は、20点出土した。SE16から淳化元寳（北宋、初鋳990年）、咸平元寳（北宋、998年）、景祐元寳（北宋、1034年）、皇宋通寳（北宋、1038年）各1点、元豊通寳（北宋、1078年）2点、銭文不明3点が出土した。不明の3点のうち2点は厚さ1㎜にも満たず、銭文が不鮮明であることから模鋳銭である可能性がある。SE26から元符通寳（北宋、1098年）、一部が欠損した元□通寳各1点が、SK09から「寳」の部分の破片1点が、SK12



出土蛭藻金　1/1

8）奈良国立文化財研究所『飛鳥寺発掘調査報告』1958。

9）表面からの非破壊による標準試料を用いた半定量分析である。分析は、奈良国立文化財研究所（村上　隆）による。

から大観通寶（北宋、1107年）1点が、SE19から元豊通寶1点が、19世紀の土坑から錆化が激しく銭文不明の鉄銭1点が、表土から寛永通寶（1697年、新寛永）2点、「寶」のみ判読できる鉄銭の破片1点が、ほかに元祐通寶（北宋、1086年）1点が出土した。鉄銭2点は寛永通寶（1739年）であると考えられる。なお、GG第4次（昭和57年度）発掘区から正隆元寶（金、1157年）1点が出土している。

その他の遺物　発掘区全域から鍛治関連の遺物が出土したが、特にSE16から多く出土しており、これらは17世紀のものである。以下、鍛治関連遺物の鞴羽口、取瓶、砥石、鉄滓、炉壁について記述する。

鞴羽口は、SE16から14個体分以上の破片が出土した。そのうち残りが良く、外径・孔径が分かるものは9点で、4点を図示した。いずれも全形が分かるものはなく、炉側の先端部から途中までの部分しか残存していない。外形は筒状を呈し、先端に向かってやや窄まっている。断面は円形や隅丸方形を呈するものがあり、外径は6㎝前後から8.5㎝前後のものまであるが、通風孔の径はいずれも3㎝前後である。先端は熱のため黒灰色に溶けたり崩れたりしており、表面は薄くはがれ、暗赤灰色、暗紫灰色を呈する。また、黒灰色、暗褐色や黒青色の鉄滓が付着するものもある。鞴側に向かって灰白色、黄灰色、赤褐色や茶褐色に変わっている。表面はナデで平滑に仕上げているが、ところどころに指頭圧痕が残るものもある。通風孔の内面は、ヨコナデで調整をするものもあるが、ほとんどは芯を抜き取ったままで、いわゆるシボリメと思われる縦皺が残っている。胎土はわずかに砂の混ざった粘土で、5㎜前後の小石や細かいスサを含む。スサの多くは籾殻だが、種類が確認できないものもある。なお、ほかの遺構からも破片が数点ずつ出土した。

取瓶は、SE19出土の1点（5）のみである。口径12.7㎝、器高6.6㎝、器壁厚1.6㎝、最大容量約280mlである。外面底部は淡灰色で、2次加熱は受けていない。口縁部から内面にかけては一部が赤みがかった灰色である。胎土には籾殻を含む。表面は指で押さえた後、ナデで調整する。底から2㎝程の深さ（約80ml）まで鉱滓が付着し、口縁には湯を注ぎ出した痕跡が1箇所ある。鉱滓は暗灰赤色で緑青が生じており、主成分は銅とみられる。付近に銅を扱う工房があったと思われるが、銅滓とみられるものは、SX07上面で検出した土坑から小片が1点出土したのみである。

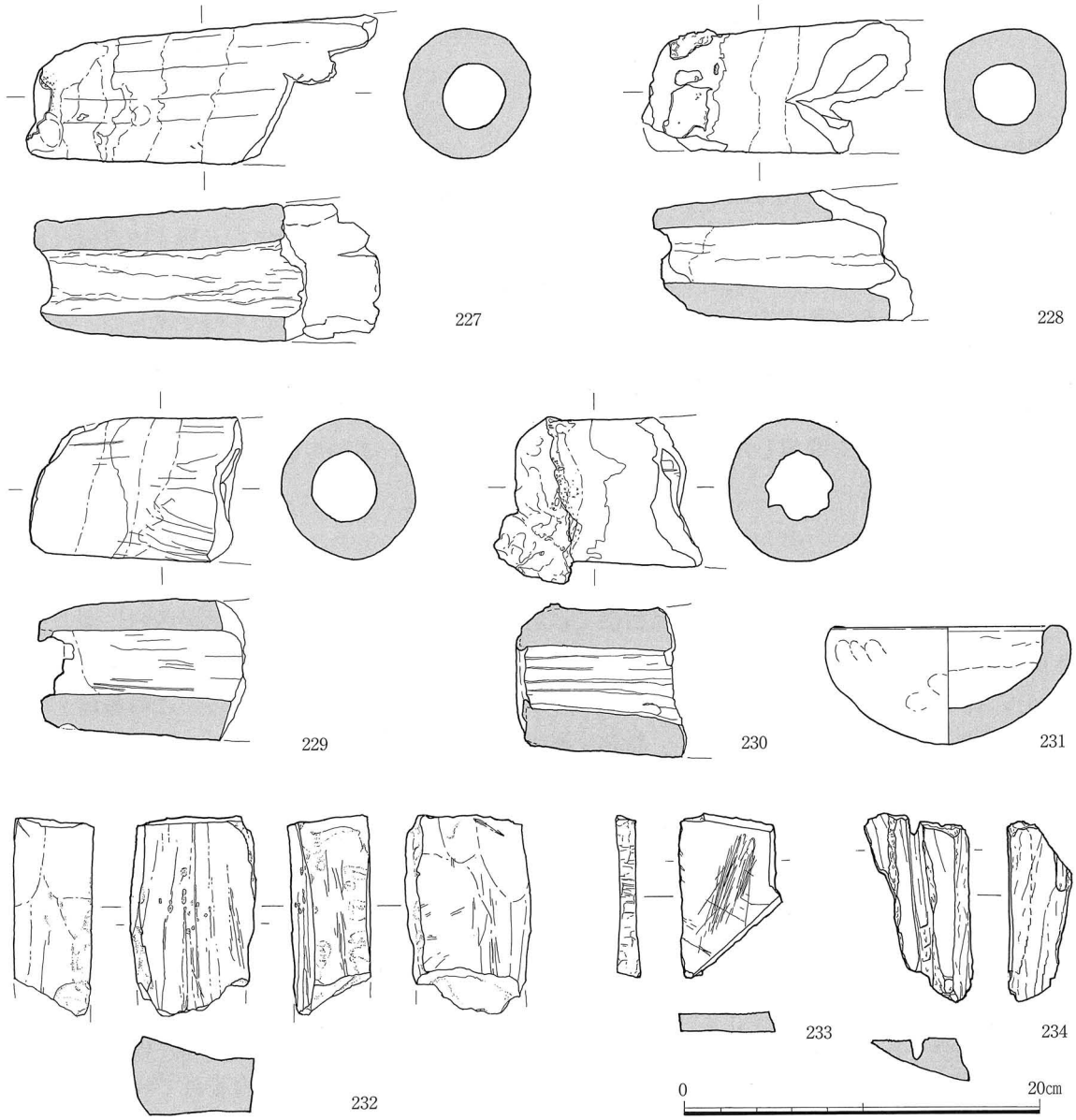
砥石は22点出土した。SE16からは9点出土し、うち3点に溝がある。6は灰白色の砂岩製で、4面を使用している。7は暗灰色の頁岩製で、やや表面のきめが細かい。表裏とも使用している。鏨で切断した痕跡が側面の一つにある。8は暗灰色の頁岩製で、きめは7に比べてやや粗い。上面は平滑で、断面U字形の溝がある。側面は自然のままだが、一部に浅い溝状の使用痕がある。

鉄滓は、全体で約78.7kgで、うち約72.3kgがSE16から出土した。一部には黒褐色の飴状のものや、茶褐色で溶けかけた小石や不純物を多く含む軽いものもあるが、ほとんどが橙褐色、茶褐色の粗鬆な組織に木炭の細片を含むもので、底の丸い椀型のものもある。

炉壁と思われるワラスサを含む粘土の破片は、少量しか出土しておらず、SE16、SE19などから数片ずつ出土したのみである。　（中島和彦・宮崎正裕・原田香織）

Ⅳ　まとめ

1．第4次調査で検出していた埋甕遺構SX07の規模が明らかになった。埋甕は少なくとも2群に分けられ、第1群が12基、第2群が27基で、計39基ある。このうち13基の甕の下半部が残る。甕は常滑窯と備前窯で14～15世紀の製品である。甕やその抜き取り坑は焼土や炭で埋まっており、SX07は焼失したことが考えられる。焼土層には16世紀の遺物が少量含まれることから、SX07の年代は15～16世紀頃と考えられる。SX07に伴う建物は確認できず、宅地内での利用状況は不明



出土鞴羽口・取瓶・砥石　1/4

であり、今後の検討を要する。また、甕内の貯蔵物については、今回新たな手がかりはなかった[10]。

2. 17世紀代の井戸、土坑が多く検出され、良好な一括資料が出土した。これらは17世紀の前半代の短期間に掘削し、埋没している。またSX05やSE16のように鋳造ないしは鍛冶に関わる遺物を伴う遺構が多い。井戸と考えたものの中には湧水のないものが多く、井戸以外の鋳造または鍛冶に関連する遺構である可能性も考慮する必要があろう。調査地周辺では、これまで17世紀前半の鋳造ないし鍛冶関連遺構がいくつか確認されており（GG第47次、GG第51次、HJ第424次調査など）、中世や近世中頃以降の時期と比べて、この時期に鋳造ないし鍛冶関連遺構が多いことはこの地域の特徴の1つとして指摘できよう。

3. 蛭藻金は出土層位から16～17世紀初めのものと考えられる。意図的に一定の大きさに折り取られており、秤量貨幣としての使用が考えられる。蛭藻金の確実な出土例は、今回のものを含め、全国で5例である。

（中島和彦）

10）甕の内容物については、菅原正明氏がGG第4次調査で出土した甕の内面に付着した黒色物を分析し、油と推定している。菅原正明「甕倉出現の意義」『国立歴史民族博物館研究報告　第46集』1992。

(2)　脇戸古墳・元興寺旧境内（僧房推定地）・奈良町遺跡の調査　第51次

Ⅰ　はじめに

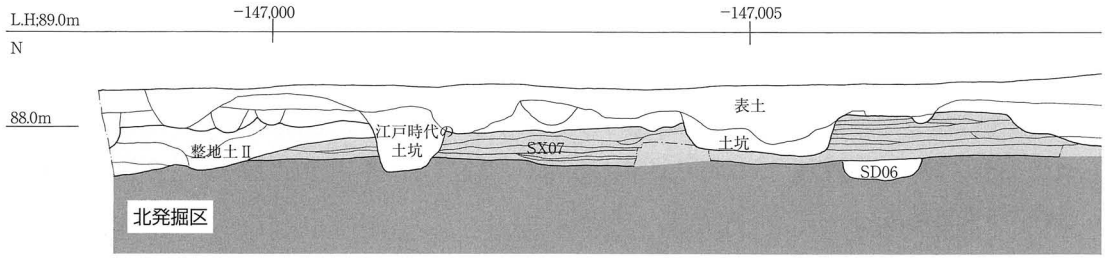
調査地は、元興寺の西面築地と、僧坊の西南行大房が想定される位置である。調査地より南へ約10mのGG第28次調査（平成2年度）では、元興寺の遺構は検出されず、中世・近世の遺構・遺物が検出されている。また、南東へ15mのGG第39次調査（平成5年度）でも元興寺の遺構は検出されなかったが、幅約4mの古墳の周濠が発見され、周濠内からは古墳時代後期の埴輪が出土した。脇戸古墳と命名されたが、調査が小規模だったことから古墳の全容は不明であった。今回の調査は、元興寺の遺構の検出と脇戸古墳の確認のために、建物建設部分に東西に長く発掘区を設定した。調査の結果、脇戸古墳の西側周濠が検出されたため、発掘区を南側に拡張し、さらに南東側に新たに発掘区を設定した。この発掘区を南発掘区とし、当初の発掘区を拡張した部分を含めて北発掘区とする。

Ⅱ　検出遺構

調査地の地形は、北発掘区中央から西に向かって低くなり、発掘区内の層序は中央の傾斜変換部を境に東西で異なっている。東端と西端では約1mの比高差があるため、発掘区内には大きくみて4つの整地土層（Ⅰ～Ⅳ）がみられた。北発掘区の西半部は、上から、近現代の造成土（約0.7m）、整地土Ⅳ（褐色土系、約0.4m）で、その下が明黄褐色土の地山となる。この整地土は西に堆積が薄くなり、やがて無くなり、発掘区西端から東約5mまでは造成土の下がすぐ地山である。なお、この整地土には黒色土器のA類椀が含まれており、9～10世紀以降のものと考えられる。発掘区西端の地山の標高は約87.1mである。北発掘区東半部の中央寄りでは、大きく3層に分かれ、上から、中世から現代までの盛土（約0.7m）、版築状の土層（約0.3m）、整地土Ⅰ（暗褐色粘質土系、約0.4m）で、その下が黄褐色粘土の地山である。地山の標高は約87.1mで、東に高くなり、東端では87.6mとなる。暗褐色粘質土系の整地土は地山が高くなるとともに堆積が薄くなり、東端では無くなる。

前述の整地土Ⅰをおおう版築状の土層は、黄白色、橙色、褐色系の粘土を約2～10㎝の厚さで版築状に交互に積んだもので、最も厚い部分で約0.45mある。遺物や礫は含まれていない。北発掘区から南発掘区にかけて見られる。広さは南北約18m、東西約17m以上あり、さらに発掘区外東側に続く。南北の両端は、緩やかな傾斜で地山に向かい下降してゆく。建物の基壇の可能性が考えられるのでSX07としたが、基壇の化粧石やその抜き取り痕跡などは見つからなかった。

SX07の南北両側にはそれを覆うように、北側には整地土Ⅱ（黄橙色粘土系）が、南側には整地土Ⅲ（茶褐色土系）がある。整地土Ⅱ・Ⅲには瓦や礫が多く入り、整地土Ⅰ・Ⅳとは様相が異なる。出土した瓦は元興寺創建期までさかのぼるものがあり、また整地土Ⅱの上面からは11世紀後半の土坑が掘り込まれることから、奈良時代から平安時代中頃のものと推定される。



発掘区東壁土層図　1/50

北発掘区では、SX07及び整地土Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの上面で鎌倉時代以降の、北発掘区の東半部ではさらに地山上面で古墳・奈良・平安時代の遺構を検出した。また、南発掘区では、北半部はSX07上面で、南半部は地山上面で遺構を検出した。

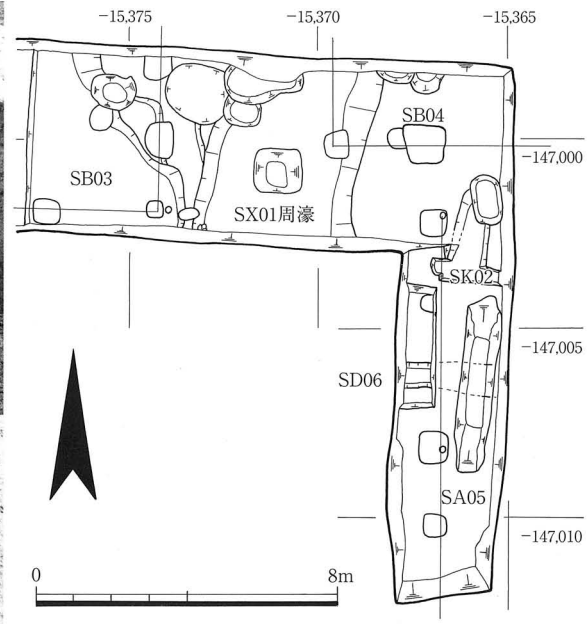
遺構には、井戸、土坑、溝、柱穴などが約140ある。大半が近世の遺構で、時代が特定できた67の遺構のうち、55がそれである。その半数以上が17世紀のものである。その他に古墳時代及び古代・中世・近代の遺構がある。以下、時代ごとに主なものを記す。

古墳時代の遺構　脇戸古墳（SX01）の幅約4.0m、深さ約0.2m、長さ約5.0m分の周濠を北発掘区で検出したが、南発掘区ではこの続きを検出できなかった。西に膨らむ円弧を描いており、古墳の西側の周濠と思われる。濠内は暗褐色粘質土で埋まり、埴輪（川西編年[1]のⅤ期）がぎっしりと包含されていた。濠内に葺石またはその転落石はなく、葺石はなかったと考えられる。墳丘はGG第39次調査の成果を考え合わせると径約30mの円墳に復原できる。ところが、この復原通りだと南発掘区で周濠が検出できるはずであるが、確認できなかった。地山の高さからみて、南発掘区で大きく削平されたとは考えがたいので、脇戸古墳の墳丘は次の3通りが想定される。1. 円墳であるが、南北にやや長い楕円形を呈する。2. 円墳で、造り出しが南発掘区の部分にあたる。3. 前方後円墳で、南発掘区の部分に前方部がある。今後、墳丘南側の確認が必要である。

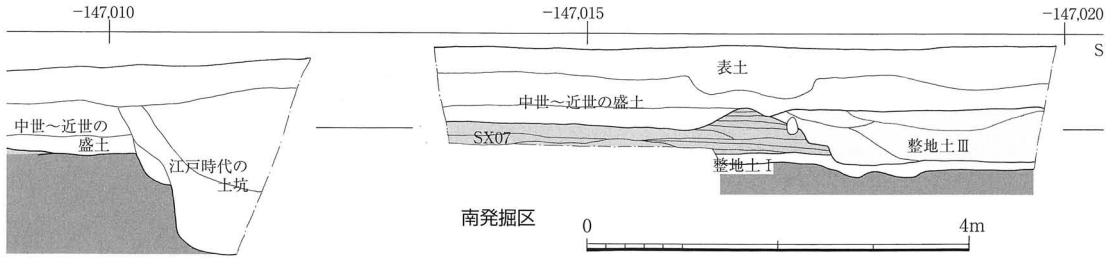
SK02は、南北に長い隅丸長方形の平面形の土坑で、主軸は北でやや東に振れる。南端は後世の遺構で破壊されており、幅約1.0m、長さ約2.0m以上、深さ約0.2mである。中央東寄りに陶質

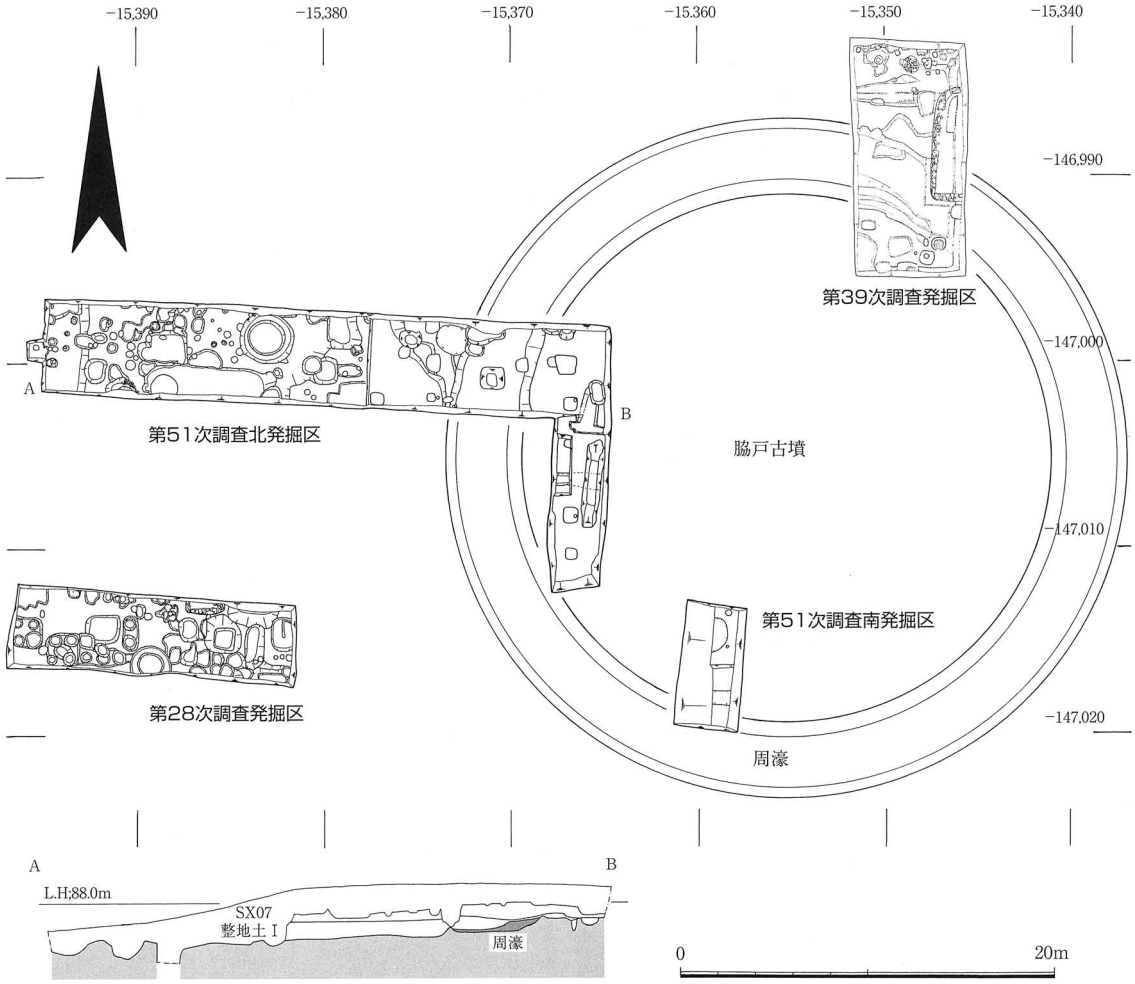
1)　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号、日本考古学会、1978。

SX02土器出土状態（北から）



遺構平面図［古墳〜奈良時代］　1/200





古墳復原想定図　1/400　（土層図の高さについては1/200）

北発掘区東半部［古墳〜奈良時代の遺構］（北から）

土器と考えられる壺1点が口縁部を上にして埋められていた。壺内には何も残っていなかった。重複関係からSX07 より古いが、脇戸古墳と同時期かは不明である。

SX09土器出土状態（北から）

奈良・平安時代の遺構　SB03は、発掘区外北側につづく掘立柱建物で、東西1間（3.0m）以上、南北2間（3.6m）以上ある。重複関係から整地土Ⅰより古い。

SB04は、発掘区外北側につづく掘立柱建物で、東西1間（2.4m）以上ある。重複関係からSX07より古い。

SA05は、SB04の南側から南北方向にのびる掘立柱塀で、南北3間（7.1m）以上あり、発掘区外南につづく。重複関係からSX07より古い。

これらの掘立柱建物・塀は、出土遺物が小片のため、時期が不明であるが、主軸が南北の正方位であり、柱掘形が方形である点から奈良時代以降のものと想定する。

SD06は、東西方向の溝で、幅約0.8m、深さ約0.2mである。発掘区外東西につづく。重複関係からSX07より古い。

SD08は、幅約2.3m、深さ約0.3mの溝で、発掘区外南北につづく。溝内からは9世紀末から10世紀初めの土器が出土した。

SX09は、掘形が南北約0.5m、東西0.3m以上、深さ約0.25mの土坑である。西側が17世紀頃の土坑で破壊されるが、平面は円形であると想定される。土師器甕を中央に据え、その東側に灰釉陶器壺1点と土師器皿2点を置く。また、甕内にも土師器皿2点を納めてあった。重複関係からSD08より新しい。地鎮遺構であろうか。11世紀前半のものである。

鎌倉・室町時代の遺構　SK10は、東西約1.3m、南北約0.7m以上、深さ約0.7mの土坑で、北側は発掘区外につづく。平面形は円形であると考えられる。11世紀後半の土器と、凝灰岩の切石と人頭大の河原石が出土した。土器の大半は土師器皿で、完形を保って出土したものもある。整地土Ⅱ上面から掘り込まれている。

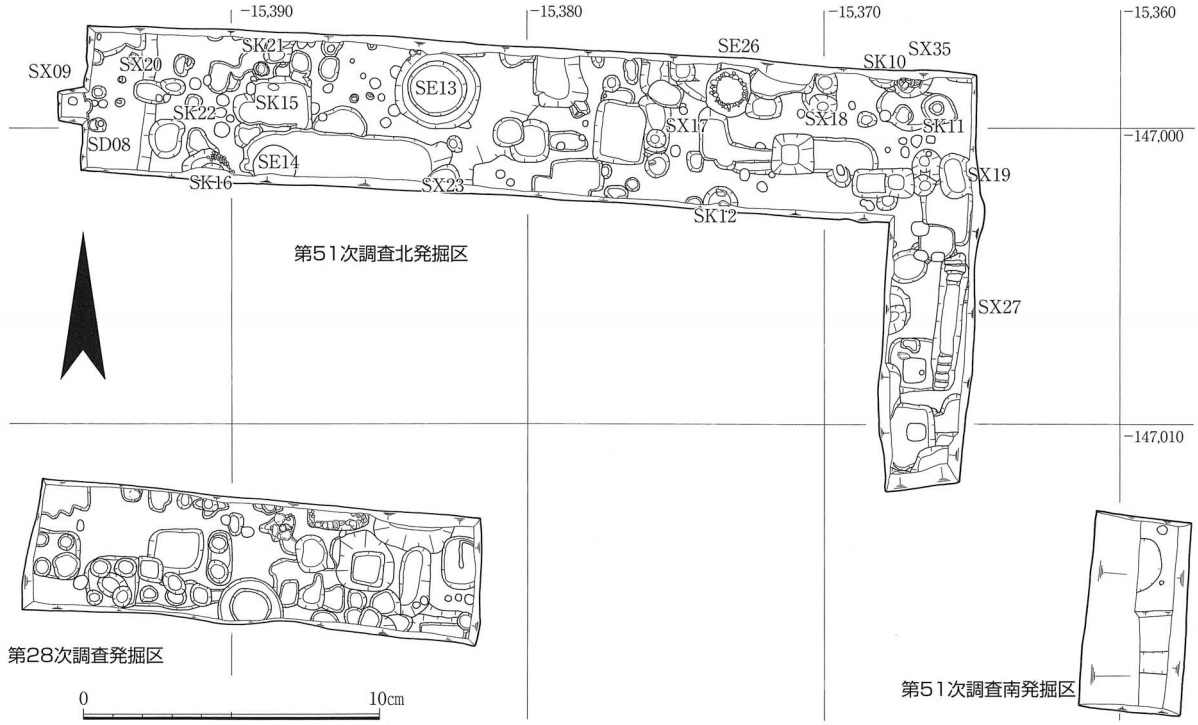
SK11は、東西約2.6m、南北約1.3m、深さ約2.0mの土坑で、平面形は楕円形である。一部がさらに一段深く、垂直に掘り込まれている。直径約1.0mの平面円形で、深さ約0.6mである。13世紀前半の土器が出土した。整地土Ⅱ上面から掘り込まれている。

SK12は、東西約1.2m、南北約0.6m以上、深さ約0.5mの土坑で、南側は発掘区外につづく。13世紀前半の土器が出土した。SX07上面から掘り込まれている。

江戸時代の遺構　SE13は、平面円形掘形の井戸である。掘形は2段で、上段は直径約2.9m、深さ約0.5mであり、下段は直径約2.0mで、深さ約1.0mまで掘削した。上段には石組があったものと思われ、下段は素掘りのままである。焼土で埋まり、火を受けた壁土や土器が出土した。17世紀初めのものである。

SE14は、径約1.4mの平面円形掘形の井戸で、深さ約0.4mまで掘削した。枠はなく、17世紀前半の土器が出土した。

SK15は、東西約2.0m、南北約1.7m、深さ約0.3mの平面方形の土坑である。17世紀前半の土器と鉄滓と鞴の羽口が多く出土した。



遺構平面図［平安時代以降］　1/250

北発掘区全景［平安時代以降の遺構］（西から）

南発掘区全景（南西から）

北発掘区全景［平安時代以降の遺構］（東から）

SK16は、東西約1.7m、南北1m以上、深さ0.5mの土坑である。発掘区外南につづく。平面形は円形と思われる。擂鉢状の掘形に沿って拳大の石を葺いている。18世紀以降の土器が出土した。

SX17～19は、平面円形の土坑で、南北に並んでいる。埋甕の抜き取り坑と考えられる。深さは約0.6mである。SK17・18からは17世紀の土器が出土した。

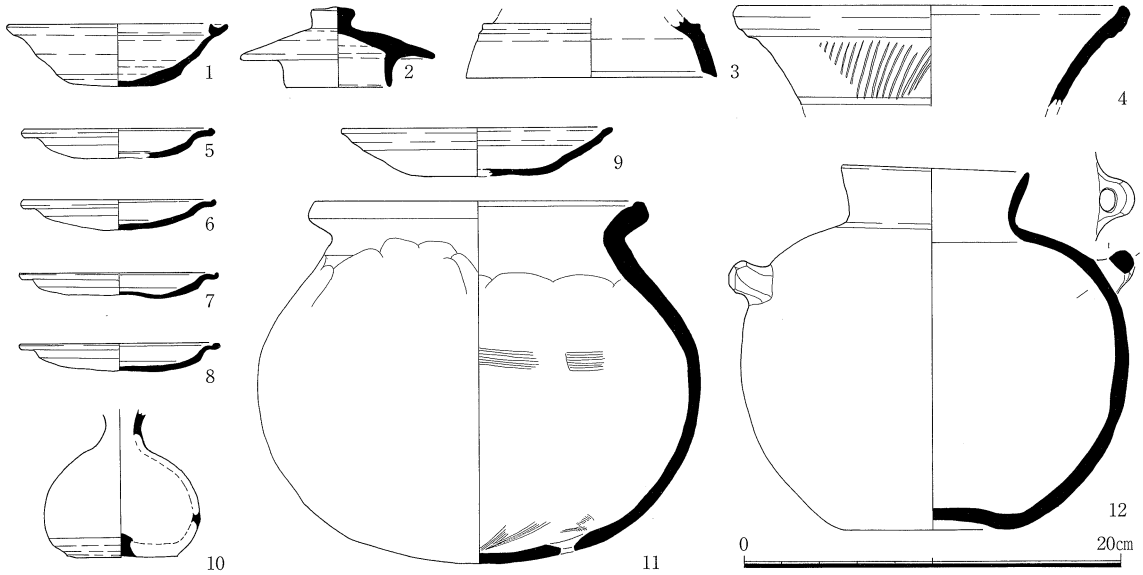
SX20～25は、埋甕遺構6基である。SX21・23・25には瓦質土器の甕、SX20には信楽窯の鉄釉甕、SX22には信楽窯の壺、SX24には産地不明の甕が使われている。なお、SX25は発掘区壁面で確認した。

明治時代以降の遺構　SE26は内法約0.9mの平面円形石組の井戸。深さ約0.4mまで掘削した。

SX27は、平面が南北に長い長方形の防空壕と思われる。幅約0.9m、長さ約4.7m、深さ約1.0mであり、南北両端に階段がある。東西両壁面は垂直に掘り込まれている。第2次世界大戦時のものであろう。

Ⅲ　出土遺物

出土遺物には、古墳時代から近現代までの各時代のものがある。瓦が遺物整理箱で75箱、土器が21箱、埴輪が20箱あり、他に鉄滓、鞴羽口がある。瓦の大半は丸瓦と平瓦で、軒瓦は30点出土した。内訳は、軒丸瓦3点（うち巴紋1点）、型式不明1点、軒平瓦9点（うち近世瓦4点）、軒桟瓦1点である。その他に近世以降の道具瓦、土管が多く出土した。土器の大半は近世の遺物である。以下には、脇戸古墳SX01周濠、SX02、SX09出土の遺物について記す。古墳周濠からは円筒埴輪、形象埴輪（盾、獣脚、靫か？）、須恵器杯・壺・壺蓋、土師器壺が出土した。円筒埴輪は11本以上出土しており、うち1本は全形がわかる。突帯は5条で、円形の透し孔が下から3・5段目に一対づつ直交してある。黒斑はなく、須恵質のものもある。外面はタテハケ調整で、内面はナデまたはタテハケ調整する。口縁部外面にヘラ記号のあるものが3点ある。前述の通り、川西編年Ⅴ期のものである。盾形埴輪は2個体分あり、円筒部に盾部を貼り付けている。盾面にはヘラ描き沈



出土土器　1/4

線が中央部から放射状に8本あり、方形の刺突孔が2つある。別の1個体の盾面には、ヘラ描き鋸歯紋がある。須恵器杯身（1）は、口径が小さく11.6cmで、口縁部のかえりが短い。埴輪の時期よりもかなり新しい。細頸壺の蓋（2）の上面は、自然釉が厚く掛かっている。脚部の破片（3）の外面には自然釉が掛かる。有脚細頸壺であろうか。須恵器壺（4）は、口縁部外面に右傾した櫛目の刺突紋が並んでいる。SK02出土の壺（12）は、形態からみて陶質土器と考えられる。肩部には上下方向に円形の孔があく2対の耳がある。外面は無紋のタタキ成形の後、粗いロクロナデで調整している。内面には無紋の当て具痕がある。SX09出土土器には、土師器皿（5～9）・甕（11）、灰釉陶器壺（10）がある。甕（11）は「都城形」[2]と呼ばれるもので、外面には無紋のタタキ成形痕が、内面には無紋の当て具痕がある。底近くに焼成後に穿たれた径5mmほどの孔がある。灰釉陶器壺（10）の底には回転糸切り痕跡がある。

Ⅳ　まとめ

脇戸古墳はGG第39次調査で墳丘北側の周濠が確認されていたが、今回の調査で西側の周濠を新たに確認した。径約30mの円墳と推定できるが、南側の周濠が確認できなかったため、墳形の確定についてはさらに調査を進めなければならない。円筒埴輪、形象埴輪が出土したが、樹立した状態を保っているものはなかった。葺石は当初からなかったようで、また、墳丘の削平がひどく、段築は確認できなかった。

版築遺構SX07は、南北約18m、東西約17m以上の範囲にわたって広がっており、厚さは0.45m以上である。このような大規模な地業を行う契機としては、元興寺南西行大房の建設が考えられる。『東南院文書』所収「東大寺堂舎損色検録帳」によると、南西行大房は11世紀前半まで存在が確認されているが、12世紀中頃には見られないようである。今回整地土上で検出した中世の遺構の年代もこのことと矛盾しない。また、SX07より古い掘立柱建物が存在することから、平城京へ移転後すぐの元興寺には南西行大房は建っておらず、しばらくは掘立柱建物が建っていたものと推定できる。大安寺の北西中房でも同様に基壇建物の下に掘立柱建物が検出されており、いずれの場合も僧坊の建設が中心建物の建設よりやや遅れるため、掘立柱建物で間に合わせたものと考える。

（中島和彦・宮崎正裕）

2）三好美穂「都城の煮炊具」『古代の土器研究４』古代の土器研究会第４回シンポジウム資料　1996。